
王家の帰還

chappy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王家の帰還

【Nコード】

N8255B

【作者名】

happy

【あらすじ】

我々の知る歴史の上では、遙か過去に暗殺された偉人が、もし生き延びていたとしたら。時代の歯車は少しずつ変化してくだらう。そんな延長線上にある現代の戦記物語。陰謀が渦巻く王国と帝国の闘争の中で、「王家の奇蹟」を施された正当な皇統継承者ルナの正義の戦いが始まる。

ルナの航跡 1

【時間軸は最高の玩具である。】

歴史に名を残す「偉人」がいる。時の経過にただ埋もれていく者もいる。

何がその差を生むのか。

誰にも分らないが、人はそれを宿命と呼ぶのだろう。

例えば一人の「偉人」の生死は、歴史にどれくらいの影響を与えているのだろうか。

「偉人」の功績が歴史であって、その功績を手がけたのは誰でも構わないのかもしれない。いや、「偉人」自体が功績なのであって、歴史とはその行ないを記録したものに過ぎないと考えよう。そうでなければ、誰もが感じているであろう宿命というものを否定することになってしまわないか。つまり、時代に及ぼす影響が大きい宿命を持った者が「偉人」なのである。

政治・軍事・文化のそれぞれの分野で、世界史上に登場する「偉人」達。古代ヨーロッパ史から例を引くと、アレクサンダー大王やユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）は、彼等が「偉人」の宿命を持って生まれたと考えることに躊躇する人は少ないだろう。両者には、意思半ばで世を去ったという共通点が見出される。彼等が人生を全うしていたとしたら、現代に生きる我々が直面する科学文明全盛の恩恵や問題点、これらはどんな形をとることになったのだろうか。

戯れに、一人の「偉人」を生き長らえさせてみよう。まずは現代国家の枠組みにさえ多大な影響を残したユリウス・カエサル。彼が

腹心ブルータスの凶刃に倒れなかったとしたら。我々の知っているものとは、違った歴史が幾つも刻まれていくに違い無い。

そんな物語を一つ、紹介しよう。

AUC：紀元前753年（ローマ帝国の伝説上の発祥年度）を起源とした暦のこと。

《序 章》（1/2）

【3年前 A・U・C 2685年 冬】

男は停まった馬車の窓から、夜の寒空に突き刺さるようにそびえる城を見上げていた。城の正面に位置する巨大な門は閉じられていたが、それは公式の行事で王族が出入りする場合にしか開けられることはない。その横に設置された小ぶりの門が通常の入出口であり、言わば勝手口である。それでも男が乗る馬車はおろか、大型のトレーラーでさえも出入りできる規模を持つ。その門も真夜中の今は閉じられており、男はその勝手口の開門を待っているのである。馬車の御者と門兵が、門に寄り添うように建てられた番所の中で、無線や電話と書類にまみれながら入城の手続きを始めてから、もう何分たっただろうか。

「時代がかったものよ。」

男は誰にとも無くひとりごちた。航空機が飛び交う現代に、馬車を使う神経が彼には理解できない。いや、徹底した教育を受けたので、このシキタリを知らない訳ではない。そして、その流儀の理由も知識としてはある。

「権威の象徴？」

男の口元に笑みがこぼれた。高位の役人や王族に接見する者は、馬

車で入城することでこの国の威厳を示すのだと言う。馬鹿げてる、と男は思った。

その時、番所から御者が戻って来て、門兵も外に出て門に向かい始めた。入城が認められたらしい。当たり前だ。自分はこの国の役人の最高位である宰相に呼ばれて来たのだ。それを待たせること自体が無礼ではないか。そんな感情も芽生えたのだが、宰相の客人として無表情にならなければならない。ポーカーフェイスもまた、このシキタリなのだ。御者が馬車の客室の扉をノックしたので、男は顔があまり見えないように、大きなツバを持つ帽子を深くかぶり直し、扉を開けた。

「どうした？」

扉の前に立つ御者の顔は、申し訳なさそうにかしこまっている。

「何でもこれからお偉い方が出発されるそうので、それが終わるまでここで待てとのことらしいです。」

御者に落ち度は無い。忠実に役目を果たしているに過ぎない。しかし、男の苛立ちを受け止めるのは、今は御者しかない。

「どういふことか説明しろ！」

男の怒声に対し、御者は縮み込んで黙るしかなかった。仕方なく、男が自ら出て行って門兵を詰問しようかと考えた矢先、正面の門が轟音と共に開き始めた。勝手口よりも数倍も巨大な正面の門は、凄まじい軋み音と地面から埃っぽい空気を巻き上げながら、ゆっくりと開いていく。この開閉も人力で行っているというから、その人数は十名を下るまい。この夜中にご苦労なことだ、と男は半ば諦め顔で事の成り行きを見守っていた。

巨大な切り石を並べた地面に鋼鉄製の太いビスが固定されていたが、それに門が真夜中には実に不似合いな轟音を伴って衝突し、開門作業が終わったことを皆に知らしめた。露になった城の中には三台の車が並んでおり、開門と同時に外に出て来た。一台の高級車と、大型の荷物車が二台。可笑しな話である。勝手口を通るにも馬車を使えとうるさく格式に拘るかと思えば、正門から自動車が出てくる。

男が訝しげな視線を車に投げ掛けた時、車が停まって中から一人の青年が出て来た。端正な顔立ちとすらりと伸びた体軀、育ちの良さ、と野性味を上手くバランスさせたような人好きのする容姿を備え、そつでありながらも目の奥にだけは影を持って複雑な人間性を感じさせる。胸元のネックレスにあしらわれた輝石が眩しい程の光を放っていたが、青年の表情とは印象的な好対照を成していた。その青年が大声で門兵に話し掛けはじめた。

「こんな時間にすまないと思っっている。」
門番や門の開閉を勤める門兵達が恐縮している。

「今までも世話になつてばかりだったが、今日でそれも終わりだ。これまでご苦労だったな。」

門兵達は深く頭を垂れて挨拶した。そして青年は、傍らに停まっている馬車に気付き、歩み寄つて来た。男は内心の慌てた様子をおくびにも出さずに青年を馬車の中で見据えたが、帽子の大きなつばが顔や表情を青年に悟らせはすまいという安心感もあつて、それは至極自然な振る舞いに見えた。

「客人、お待たせして申し訳ない。私にとっては、いや王国にとつては大切な儀式なのだ。ご理解願いたい。」

暗闇の中ですら、すがすがしいばかりの笑顔を湛えた青年は、それだけ言つとその場を立ち去つた。男は極度に緊張していた。結局、何ら言葉を返すことすらできず、僅かに頷いて見せるのが精一杯であつた。男はその青年を知っている。彼を知る多くの人間と同様に、話したことは無いし実物を見るのも初めてだが、知っているのだ。

彼は、ルナ皇太子、いや、元皇太子である。王国の英雄として国民から強く慕われていながら、政治のゴタゴタで廃位された悲劇の王子。先頃のドーバー戦役において、王国を勝利に導いた英雄なのである。しかし、同じくドーバー戦役の後始末の為に、辺境に追放されることになつたと聞いた。まさに今、ルナは城から追放されて行くに違い無い。しかし、皇太子を廃位されたとは言え、王子の長兄であるルナが城を立ち去るにあたって、何とも寂しい陣容ではない

か。敢えて真夜中を選んだのも、それが追放というものなのだろうか。ルナの顔も実績も評判も、そして追放に至る陰湿な経緯さえも、男は知りつくしていた。ところが、そんなものとは無縁の世界で、たった一言声を掛けられただけで、聞く者の心を掴んでしまうあの魅力とは、いったい何なのだろうか。王族とはそういうものなのだろうか。男がそんなことを考えている間に、三台の車は走り去った。この時のルナと男の接触が後代に及ぼした影響は計り知れないが、未だそのことに気付く者はいない。

< 続く >

ルナの航跡 2

《序 章》（2 / 2）

ルナが立ち去ったことで、正面の門が閉じられた。ようやく男の入城手続きの再開である。門兵が馬車の客室を確認するために歩み寄って来た。

「失礼致します。他に同乗されている方はおられませんね？」

男は無言且つ無表情で門兵を見据え、問題が無いという意味を表明した。

「失礼致しました。ブリテン王宮へようこそ。」

門兵は丁寧な馬車の扉を閉め、勝手口の門を開けた上で、御者に進行を促す合図を送る。ゆつくりと動き出した馬車は、厚さが二メートルはあるうかという壁に開けられた門を潜って入城した。そこには広大な芝生の空間が広がっており、敷地の内部に向かう石畳の道が何本も延びていた。季節が良ければ芝生は青々と地面を覆って、石畳の道とのコントラストが風情を華やかに彩ったことだろうが、今は薄茶色に染まって、寒々しさを一層引き立てていた。そんな風景の中を、馬車は同じ速度のまままで宮殿に向かう道を進んで行った。「帝国の皇宮程ではないな。」

初めて見る王宮に対する男の感想であった。いや、精一杯の抵抗であった。偶然にもルナという青年に遭った。それは男にとつて初めて皇帝に謁見された時をも超える衝撃であった。魅力的で、威厳に満ちていて、なのに距離感を感じさせないその様子は、皇帝すら凌駕する強烈な印象として男の心に刻み込まれたのである。人との関わりに無関心で癩癩を起こすこともあるというルナに関する一部の評判は、全く信じられないか、それさえも魅力としてしまうだろうと思われた。しかしながら、これから引き起こす事象を考えると、ルナに心酔してしまうのは望ましくない。そこで、帝国が王国より

も優っている点を探して、それを心の支柱にしようとしたところ、皇宮が王宮よりも規模において勝っていることを見出し、自らを戒めるために敢えて声にしたのであった。

元はと言えば、この城の原型がこの地に構築されたのは千年以上も前になる。しかし、帝国の文化・文明圏から言えば辺境中の辺境であるため、城とは言ってもそれは簡素で粗末なものでしかなかった。その当時、既に豪華で巨大な建築物が帝国の版図を埋め尽くしているかに思われていたが、この地はまるで繁栄を拒絶しているかのように辺境であり続けた。故にひっそりとしてはいたが、戦略上の要衝でもあるため、忘れられるでもないが栄えるでもない、といった微妙な均衡が保たれて来たのである。

そんなこの地に転機が訪れてから、ちょうど百年が経とうとしていた。帝国の王統が分裂し、一方がこの地に居を構えたのである。双方が自らの正当性を主張するという、二千数百年に及ぶ帝国の歴史の中で幾度となく繰り返された出来事である。ただ、『王家の秘蹟』と呼ばれる皇位を継承する儀式が導入されて以降は、皇族が袂を分けて並列したことはなく、初めての事象という唯一性が分裂状態を長期化さしめていた。

皇族が住まうには似つかわしくなかった城は、大規模な宮殿を擁する立派なものに増改築され、一個軍団の軍団基地としてのみ機能していた町は、皇族の流入に伴って急激に増加した人口を支える大都市へと変貌した。そして街の人々はいつしか、城の主が統治する国を、その版図の大部分を占める島の名に因んで、『ブリテン王国』と呼ぶようになった。当初、支配階級を形成する城の住人達は、帝国の亜流のようなこの名に抵抗を見せたが、自らこそが正当であることを主張するために、まずは帝国との差異を明確に打ち出す必要に迫られており、止むを得ずこの名称を受け入れたと言う。以来、ブリテンの皇族はブリテン王家を名乗り、現在に至る。

城に関する記憶を呼び起こしていた男は、馬車が停止したことで一旦思考も停止させた。いよいよ、なのである。脈が高鳴るのを感じ

じた。汗が手を覆い、脇を流れ落ちるのを感じていたが、表情を崩すわけにはいかない。涼しげな顔をして馬車を降りた男は、そこで宰相に迎えられた。

「ご苦労。陛下は既にお休みになられている。」
それだけ言つて宰相は歩き始め、男が後を追つた。これから一大事を起こす作戦を考えると、極めて平穩である。真夜中過ぎでは、稀に哨戒している憲兵がいる程度で、彼等とて宰相を認めては、略式の敬礼をするだけでその場を立ち去る。他に城内で男を見たのは、門兵と御者しかない。いずれにせよ、帽子の男、程度にしか記憶されていないだろう。狙い通りである。

この作戦を説明された時、男は時間帯に疑問を持つた。真夜中には余りに怪しくないか、と。宰相が言うには、日中の国王は王室にいて、出入り口には親衛隊が控えている。宰相と言えども、部外者を王室に入室させるに当たつて、親衛隊の追求を拒むことはできない。例え少々疑わしくても、親衛隊に出くわさないことが最も重要だと説かれた。そういうものなのだろう、とその時はやり過ぎしたが、今は気が気ではない。憲兵とすれ違つた度に男の緊張は高まり、目深にかぶつた帽子の中から、今にも冷たい汗が流れ落ちそうであった。

また男は、ルナに遭遇したことを宰相に告げるべきかどうか、迷つていた。結局それが告げられることは無かつたのだが、あるいはそれが男のルナに対する心情を物語つていたのかもしれない。

そんなことを気にする様子も無く、宰相は黙々と歩き続ける。男も後を追う。そんな無言の数分が過ぎた後、宰相の私室に到着した。ここで一度だけ振り向いた宰相が、顎を振つて男に入室を促した。

宰相の私室には、王の私室と繋がっている専用の扉がある。緊急時に王と宰相の連携が保たれるための設備である。その扉を使うことが、親衛隊に会わずに王と男を接見させる唯一の方法なのだ。この扉の存在を知つた時、男は安堵の溜息を漏らしたものだ。ところがどんな設備にも、それが元来持つ能力とその運用は必ずしも一致

しない、という宿命がある。この扉は『緊急時に運用される』設備なのであって平時には閉ざされている、という不文律があった。つまり、宰相が扉を開くということは、それだけで王に非常事態の発生を告げるに等しい行為であり、王を警戒させてしまうだろうという危惧があった。親衛隊を避けるという意味以外にも、深夜を選んだのには訳があったのである。王が眠りに落ちてから、こっそりと忍び込もうというのである。最後の詰め部分が、何とも稚拙な作戦と言わざるを得ない。それがこの宰相の陰謀謀略における限界なのだろう。元々は人がいいということなのかもしれない。

人の気配に王は目を覚ました。王家の人間たるもの、人の気配をよむにはもとより長けており、それが殺気を伴ったものであれば尚更である。あの扉が開いたからには、この殺気を持って侵入して来た者は宰相か、あるいは宰相が手引きした何者かである。瞬時にそこまで見通した王は、同時に既に何をしても手遅れであることをも悟った。寝台に横たわったままの王に近付いた宰相は、王が目を開いていることに驚いたようである。

「未だお休みではなかったのですか、陛下。」
宰相の顔を見上げ、ゆっくりと上体を起こした王は何も語らない。

「日中の激務をお考えください。夜はゆっくりとお休みくださいませんか……。」

絡んだ痰を切る王の咳払いが宰相の言葉をそこで遮り、静かに話し始めた。

「そもも言っておられん。奇妙な時間に奇妙な所から、奇妙なヤカラが舞い込んで来ることもあるのでな。」

不敵に笑みを湛える王の視線は、宰相の後ろに控える男を捕らえている。宰相も男も、あからさまな嫌味を言う王に対し、小細工することをやめ、目配せでその意思を確認した。ところが、切先を制したのはまたも王であった。

「秘蹟を放棄したのが、そんなに気に入らないのか？」

見当違いである。確かに、『王家の秘蹟』によつて皇族の末裔だけが持ち得る力、それを放棄した王の真意は量れない。しかし、宰相がここを訪れた理由は他にあつた。

「陛下、恐れながら議論は致しません。」

緊張はしていても、確固たる意思を湛えた瞳が王を見据えた。そして宰相の後ろの男が、目深に被つた帽子をゆつくりと取つた。王は、男の素顔を見て初めて絶句した。

「お前は…。」

男の顔は王と瓜二つ、いや、王そのものであつた。

「影武者、という訳ではございません。お分かりですね？」

宰相がこれまで如何に周到に準備を進めて来たのか、それを男の風貌が物語っていた。あらゆる抵抗は意味を成さないに違いない。

「もしも影武者であつたのなら、完全にその役目を果たせたであろうに……。」

王が宰相に掛けた最後の言葉であつた。そして宰相は、そのまま王を連れてその場を去つた。そして王の寝室には、宰相が連れ込んだ男だけが残つていた。

この時には、『王家の秘蹟』の玉石がその活動を停止していたが、それに宰相が気付いたのはこれより一年近く先のことであつた。

<続く>

ルナの航跡 3

第1章《帰還》（1/5）

【現代 A・U・C 2688年 春】

狭い部屋の中で、皆がスクリーンを見つめていた。そこには、この国が置かれている状況を如実に示すニュースが流されている。キヤスターの男は涼しげなチュニカを着て、視線を原稿とカメラの間を相互に行き来させながら、あくまでも淡々と説明していた。

「皇帝から提案された我が国王陛下との会談について本日、王室から正式なコメントが発表されました。」

そこで一呼吸置き、やや物々しげな表情に切り替えて、発表文の朗読に移った。

「先日、帝国皇帝を名乗ってローマを占拠している者から、我が国王陛下に対して会談が申し込まれたが、我が国としては、不正・違法に我が領土を支配しようとするあらゆる者と譲歩する考えは無い。遠からず我々は彼等を裁き、陛下は首都ローマに凱旋されることである。」

短い発表文を読み終えた男は、国営放送のキヤスターらしく解説を始めた。

「不正に我が領土とローマを占拠しておいた上に、こちらに謝罪しに来るのであればまだしも、陛下を呼び出すとは不届きにも程があると云うものです。」

王室の発表には皆が興味を示していたが、予想通りのありきたりな解説が始まるや、誰もがスクリーンから目を離してしまった。

そこでニュースの上映は打ち切られ、この日の本題であるフィルムがスクリーンに映し出された。写されたフィルムは、大昔のノンフィクションである。暑くも寒くもない季節の典型的なこの日、部

屋の空調は止められており、流れる映像に併せて左右のスピーカーから響く音響が淀み無く耳に届く。フィルムを見るならこの季節に限る。何しろ、この部屋の空調のやかましいことは凄まじく、特に冷房に至ってはスピーカーの性能的限界までポリウムを上げないと、聞き取れない台詞が出て来てしまう程なのだ。そういう意味でこの日は好条件に恵まれていたのだが、フィルムの内容が頂けないというのが部屋にいる大多数の者の本音であった。そして、映像の中で進んでいく物語は猛暑の季節であり、観ている内に実際よりも部屋が暑く感じられてしまうのだが、これ位の暑さなら空調の音よりもマシか、という不愉快な選択を視聴者に強いてもいた。そんな中、大昔を再現させたフィルムは、いよいよ佳境に入ったようだ。

【A・U・C 709年 夏】

長く狭い石畳の道を、数名の男達が歩いて行く。丘の上の議場を目指して。既に夜明けから数時間が過ぎて気温が上昇しており、蒸すような暑さと石造りの街に特有の誇りっぽさが人々を包み込んでいた。はるか遠方より豊富な水をこの街に引き入れている水道は、浴場というこの時代としては奇跡的な設備を実現させていたが、それは、この暑さにあっても街が汗臭さに覆われることを防ぐ、という恩恵を人々にもたらしてもいた。

人々は時代の権力者である男とその取り巻きを見るために道端に集まって来ていたが、人垣ができる程のその密度の高さは、夜明けから昼食の間に公の活動の殆どを行なう習慣を持つこの国にあって、男達への民衆の興味の強さを物語っている。人々は不安と希望が入り混じった複雑な視線を男達に投げかけているが、男達の未来への希望と勝者の誇りが周囲の空気を張り詰めさせており、その静けさは、彼等の話す声が足音とともに議場まで届くのではないかと思わせる程であった。

「大丈夫だ。ポンペイウス派にもう力はない。」

「しかしディクタール（独裁官）、彼奴等のオリエントでの影響力は見くびれません。オチデントにおいてでさえ、イスパニアには支持基盤があります。エジプト王家はあなたが抑えましたが、そのやり方に共和派は強く反発するでしょう。」

「もつともな話だ。まず、オリエントの話が深刻だ。我々の覇権に関わるのでな。しかし、対策の準備は進めている。オチデントは既に手を打ってある。エジプトについても考えがある。当面の間、諸君は共和派工作だけを考えれば良い。共和派に早くケリを付けて、オリエント対策を完遂させねばならん。」

「市民会からの支持は磐石です。元老院とて……」
独裁官が話を遮った。

「もつ良い。私が勝つことを私が保証しよう。諸君には共和派工作について個別に考えてもらいたいことがある。」

既に頭髪は残り少なく体格も標準的な年齢五十を数える男は、戦場では絶対的な將軍として圧倒的な戦績を残した。また、この時代の男らしく髭を蓄えていないので、細面な輪郭が露になっていたが、その顔つきは美男子とは程遠い。にも関わらず、この世界帝国の首都において、彼を上回るプレイボーイはいないらしく、貴族階級の婦人の多くがこの男と関係していると噂は絶えない。遠目に見ているだけでは、この男のどこにそれだけの才覚が備わっているのか、分かりはしないだろう。眉間に深く刻まれた皺だけが、思慮深さを物語る程度なのだ。しかし、彼と会話してみるとその迫力に誰もが怖気づき、同時にその魅力に引き込まれてしまうというから不思議だ。そんな最高権力者から頼みごとがあるという。取り巻きの一人が、恐る恐るその内容を確認しようと言葉を発した。

「個別に、と申しますと？」

ただ権力者にへつらうのではなく、役割を与えられれば何を置いても成し遂げようという意思を湛えた目を確認した独裁官は、順を追って話しを続けることにした。

「どこよりもここローマが危ういことには気付いていることと思う。」

元老院は一枚岩ではない。そこで……」
幾重にも街路地が交差する所に差し掛かった時、何者かが男達に突進して来た。手には短剣が握り締められて敵意に満ち満ちていたが、独裁官を守るべき取り巻きも彼らを見守る市民も、標的が独裁官であることは明らかなのに、彼が倒れ込むまで身動き一つできなかった。日陰でさえ輝くナイフの切っ先が切り裂いた男の腹部から流れ出す血を見て、近くの市民が悲鳴を上げた。それは連鎖的に広まって行くかに見えたその時、静寂をもたらす声が独裁官の口から辺りに響いた。

「賊を捕らえろっ！ 大事無い、諸君。私はころんただけだ。彼の容態を見てやってくれ。」

路面を血で染めたのは、独裁官ではなかった。独裁官は、幾つかの擦り傷と軽い打撲を被ったが、それは彼を亡き者にしようとした刺客の思惑とは程遠いものでしかなかった。刺客以外、誰も動けなかったように見えた一瞬の出来事の中で、取り巻きの一人が咄嗟に身を呈して独裁官を守っていたのだ。哀れにも彼には既に意識も無く、強力な権力者を守ったという荣誉と引き換えに死を賜ったのである。彼の犠牲は、彼の血縁や縁故の者達の未来を権力者が明るく照らすであろうことを約束した。不安定なご時世にあつて、それは彼の望む姿だったのかもしれない。実際のところ、咄嗟のことでそこまで考えての行動ではなかったであろうが。

「三人まで捕まえました。まだ二、三人いるようですが、逃がしはしません。」

取り巻きの一人が、市民に袋叩きにされてボロ雑巾のようになった刺客を引き連れて来た。

腫れ上がり、よく見ないと誰だかわからない刺客達の顔を、独裁官は一人づつ見つめた。こともあろうか、その中に腹心の部下が含まれていることに気付いた時、独裁官は思わず呟いた。

「ブルータス、お前もか……。」

独裁官は、自分の身代わりになってくれた者の死体と、捕まえた刺客達を議場に連れ込んだ。

「元老院議員諸君、幸運にも私は生きている。彼の犠牲によって。大袈裟に死体を指差し、暫しの黙祷の後、刺客に振り返ってから独裁官は続けた。

「そして、彼を殺し、私を殺そうとした者どもがここにいる。彼等はいかなる信念に基づいているのだろうか？」

両手を広げ、周囲を囲む議員に問い掛け、絶妙のタイミングで自らが応えはじめた。

「どのような信念にせよ、彼等の信念は強固だろう。」

そこで独裁官は刺客達に数歩近付いてから、おもむろに共和派議員達の方に振り向き、あくまでも冷静な声で語りかけた。

「しかし、私の信念は誰よりも強くて固い。そして、ここにいる刺客達を動かしたヤカラがいるのは明白であり、それが誰であるかを私は知っている。私は、決してこのままにすることは無いだろう。」

共和派の議員の中には、緊張の余りに卒倒する者が出始めた。独裁官は暫くその様子を眺めていたが、自派と共和派を問わず議員全員に告げた。

「但し、私は以前の独裁官ではない。私なりのやり方で対処したいと思う。諸君の協力をお願いしたい。」

絶妙である。共和制の急進派は殲滅するが、併せて元老院との協調も匂わせたのである。

再び死体の方を見つめ、独裁官は締めくくった。

「本日は彼への哀悼の意を込め、これにて閉会することとする。」

散会する議員達は家路に付くが、中には拘束され、生き地獄へ連れ去られる者もいた。議論が白熱することはよくあることで、そんな時は議場が体臭に満ちるものである。しかし、この時は独裁官が一方的に短時間の話をしたに過ぎなかったのだが、議場は蒸していた。それは普段とは異なり、冷や汗によるものであったに違い無い。

そこでフィルムが終わり、映写機のライトがスクリーンを直接照らしはじめ、その眩しさに見る者皆が我を取り戻した。いつものように、映写機のカタカタという音と皆の口臭に部屋が満ちていることを嫌が上にも認識させられる瞬間である。部屋の照明が付けられ、階段状に設置された木造の机に寄りかかっていた体を起こし、大きく伸びをする者、欠伸を噛み締める者、それぞれの動作が露になり、皆の意識が現代に帰って来た。決して楽しげでもなく、集中力に満ちた雰囲気でもなかったが、そんなことはものともせず、壇上に初老の男が悠然と立ち上がった。このフィルムを写した張本人であり、部屋にいる大多数とは異なり、映像を堪能した男である。

<続く>

ルナの航跡 4

第1章《帰還》（2 / 5）

部屋の最前列にある壇上に立ち上がった初老の男は、ゆったりとしてはいるが確かな動作で、映写機のライトを消し、スクリーンを巻き上げてから静かに話しはじめた。

「前半のニュースについては、私が解説するまでもありませんね？」
初老の男は部屋を見渡し、異議のある者がいないことを確かめてから続けた。

「後半のフィルムには、有名な『ブルータス、お前もか』の台詞が出てきました。では皆さん、この時のカエサル、そう、独裁官ですね、彼の心境を代弁してみてください。」

この初老の男は講師であり、部屋にいる他の者達は生徒である。八名の生徒は漏れなく退屈そうにしており、誰も声を上げようとしなかった。未だ少年の域を出ない生徒達にとって、それはよくあることなのだ。それでも初老の男は、満面の笑みとともに我慢強く少年達の反応を待ち続けた。仕方なく、リーダー役の少年が両手を机に打ち付けながら立ち上がった。老齢期に入った男は、我慢比べで少年達に引けを取る分けが無いと考えており、それが裏付けられた満足感から笑みのしわを一層深くした。

「老師、あなたも生まれていない二千年前の男の気持ちなんて、俺達には計り知れないね。」

少年達からかすかな笑いが起きた後、少年に老師と呼ばれた初老の男はいつもの説教を始めた。男と少年の勝敗関係が逆転してしまったので、講師の威厳を取り戻さねばならなくなったのだ。それには説教が最も効果的で、手っ取り早い。

「あなたは王子であり、将来ブリテン王国を司られるお方です。皆さんは王子を支え、ともに国を運営して行かねばなりません。人心

を掴むために、深い教養と鋭い洞察力は欠かせないものです。」
いつも繰り返し返される説教に、少年達は笑顔とも泣き顔ともつかない微妙な表情を浮かべている。

「歴史には興味が湧かないかもしれませんが、過去を知ることが如何に重要か、今一度お話しねばなりません。王子が授かった王家の潜在能力も、知識の裏付けがなければ開花しないか、あるいは開花しても無用の長物となることでしょうか。」

その時、教室に若い男が勢いよく入って来た。開いた戸からは、廊下の新鮮でやや涼しい空気も同時に入って来たので、少年達の不快指数は若干改善されたようだ。そして、戸の開け閉めの乱暴さ、遠慮の無い足音の大きさ、不躰な振る舞いながら妙に人好きのするその若者は、少年達から笑顔で迎え入れた。

「ルナ！ お久しぶりです。」

ルナという若者が笑顔で応える。

「いやあ、王子殿、ご無沙汰ですな。」

「お戻りになるとは聞いていませんでした。どうされたのですか。」

「難しいハナシはあとにしよう。まずはハナタレ王子がどれくらいの男になったか、それが見たくてここに参った。」

王子と取り巻きの少年達の顔が少し曇る。

「ルナ、きつと私はあなたをがっかりさせてしまつかもしれません。ここでの暮らしは相変わらずで、王は私を哲学者にでもしたいと思っておられることでしょう。戦闘訓練をやることもあるのですが、飛行機に乗ることはまずありません。」

「落胆するな。王族たるもの、文武を両立させねばならん。文官と武官の両方を統率せねばならんのだからな。君達は政治家の卵でもあるのだから、文を優先させるのは分かるだろう？」

「あなたが文官を統率？ ドーバー戦役の英雄であると同時に、破天荒の代名詞と言われたあなたが？」

あっけに取られた表情に変わった少年達の口元は僅かに笑っていたが、ルナもテレ笑いを隠さない。

「馬鹿にするもんじゃないぞ。できねばならんことをちゃんとできる奴なんて、そうはいないものさ。」

「ここでの生活が、あなたのような男への道程だと？」

「そういうことだ。俺を育てた時の反省がたつぷり盛り込まれているはずさ！」

楽しいな会話を初老の男が遮る。

「ルナ殿、いや、ブリタニア辺境伯、今は授業中ですよ。」

「老師、あいかわらずですな。三年ぶりですよ。無礼はご容赦願いたい。」

「いいでしょう、ただ、あなたからも王子に言い聞かせて頂きたい。私の講義に全く興味を示されない。」

「それはいけないな。今日のフィルムは、カエサルが皇帝への道を確実にした日の出来事だろう？　王子は彼の正当な後継者なんだからな。」

「そういう意識を王子に是非とも植え付けて……。」

「お任せください、老師。私からトクとお話しましょう。では諸君、俺の話聞きたい者は裏庭に集合してくれるかな。」

あつという間に全員が部屋から出て行った。初老の男は、ひっそりとした部屋で後片付けを始めた。

「ルナ、遠路ご苦労であった、よう参った。」

「二人つきりなんだ。堅苦しい挨拶はやめようぜ、国王陛下。」

普段は側近が控えている王室の中は、二人だけでは閑散とした雰囲気。王は、一段高くなった王専用のソファーにやや太った体をあずけながら、気さくな表情で続けた。

「オヤジでいい。……王子とはもう会ったのか？」

「さつきね。あいつの軟弱ぶりも、ちょっとはマシになってたんで安心したよ。不満だらけのようだったがね。」

「血は争えん。貴公もあれくらいの頃から手が付けられんようになって、苦労させられたわい。」

ルナの目から人懐っこい色が消え、トーンダウンした声に変わった。「だからって、それで捨てたわけでもあるまい？」

「その話は……」

王が言葉を詰ませる。皇太子だったルナを廃位し、辺境の地、ブリタニアに送ったのは、最終的にはこの王が決めたことなのだ。事実上の追放である。

「今回呼ばれた理由は察しが付いている。だからこそ、その話抜きには進まないと思うんですがね。」

誰に対しても臆することなく話すルナだが、相手との心理的距離を置きたい時に限って口調が丁寧になるといふ癖がある。そして今、その癖が出始めていた。

「良かるう。ただ、お前を人払いした部屋に招き入れた意味も考えて欲しいものだ。」

「最初からその気だったってこと？」

王が言っているのは、ルナのブリタニアへの追放は一時的なもので、時が経てば再び迎え入れるつもりだった、ということなのだ。そしてそれが今だ、ということなのだろう。それを理解したルナは、いつも通りの口調に戻ったが、その表情までを緩めるにはブリタニアの三年間は重過ぎた。そして、伝統ある王国で政務を執って来た王に、その重さが分かるはずもない。

「お前を認めない者など、この国にはおらん。仕方が無かった、分かっているはずだな？」

「分かっているからこそ、俺も大人しくブリタニアに出て行っただがね。」

この国王に、いや、父親に自分が経験して来た苦勞の一端でも理解してもらうためには、何から話せばいいのだろう、とあいかわらず難しい表情で考え込むルナとは対照的に、王は再び父親の顔に戻って、立ち上がりらばかりの勢いで手を打った。

「理解している。これでわだかまりは解けた。」

「簡単に言うが……」

「止めよう。これ以上この話を続けても双方得るものは無い。」
王は目に涙を浮かべ、視線はどこか遠くを見ているようだ。ルナは、対面の男が王として振舞っているのか、父親として愛そうとしているのか、計りかねていた。

「ドーバー戦役における貴公の働きが思い出される。遅しく思う。貴公の帰還を歓迎するぞ、ルナ。」

物陰から、王の言葉を待っていた重臣達が、出てきた。

「ルナ辺境伯、我々も歓迎致しますぞ。」

「よくぞお戻りになられた、英断でございますな。」

「これで我がブリテン王国の大陸への地盤は成ったも同然。めでたいことじゃ。」

あらぬ方向から王の側近達が話し掛けて来たので、ルナは少し驚いた。

「何だお前達、聞いていたのか。」

口元に笑みを蓄えてはいても目が笑わない側近達、言葉使いとは裏腹のその慇懃無礼な態度に腹立たしさを覚えながら、ルナは王に嫌味の一つでも言ってみようとした。

「形だけの人払いとは姑息だぜ、国王陛下。」

「まあ、そう言うな。政治とはそういうものだ。王が臣下以外の人間と話す時の礼儀の一つだ。」

「臣下以外ね、それでわだかまりが解けたとはお笑いだか……」
苦笑を浮かべながらルナは独り言のように呟いた。

「三年前になるか、ドーバー戦役……。」

< 続く >

ルナの航跡 5

第1章《帰還》（3 / 5）

【三年前 A・U・C 2685年 秋】

当時、ブリテン王国は、海峡を挟んだ西ケルト公国と北方の神聖同盟の連合軍と衝突していた。

海軍力に守られた王国は、裏を返せば海軍が突破されれば裸同然とも言える。大陸側には、直接ブリテン王国に到達できる航空兵力が整備されており、王国が誇る海軍は頭上を飛び越えて行く敵機に何もできない。本土を爆撃され、迎撃するにも王国の空軍軽視の風潮が航空機の性能差を呼び、戦意は低迷していた。

そこで王国の海軍では、やりたい放題の敵に対して一矢酬いるための作戦を展開しようとしていた。即ち、狭いドーバー海峡を決死の艦隊が渡り、大陸側の湾岸施設と都市を艦砲射撃で撃滅しよう、というものである。

如何にも幼稚なこの作戦は極めて真剣に検討された。見つかりにくいように作戦は夜間に実行されるため、夜間操艦の特訓が連日連夜繰り返され、艦の高速化のための改造に至っては、水や空気の抵抗を減らすための形状変更から、燃料の改質まで行なわれた。そして王国の艦隊は、決死の覚悟でドーバー海峡を渡り始めたのである。

「艦長！ 航空機編隊確認、数およそ百！」

「敵か！？」

「……神聖同盟のカラーを確認！ 敵機です。大陸に向かって飛行中。帰還するものと思われませう。」

「爆撃の帰りで、荷物（爆弾）は持っていないということか……。動きに変化は無いか？」

「敵機進路変わらず。二分でレーダー域から出ます。気付かれ無かった模様。」

「目視監視員と探索距離がどっこいどっこのレーダーなんか停める！ 逆に探知されるリスクの方が高い！」

「レーダー、停止しました。」

「よし。本艦進路そのまま。艦隊に周知！ 目標を射程に捕らえるまで、まだ暫くかかるのだからな。こんな所で見つかる訳には行かん。」

艦長の顔が安堵で緩んだその時、新米の監視員が悲鳴に近い声を上げた。

「他の航空編隊確認！！ 機数約二十！」

「何だと？」

先任の監視員が、取り乱す部下の監視員と、思わず立ち上がった艦長の双方を制しながら叫んだ。

「タイガー・シャーク型を確認。友軍の編隊です。」

友軍機を新手の敵機と間違えて悲鳴を上げてしまった新米監視員は、バツが悪そうな表情を浮かべるだけだったが、艦長は未だ座ろうとしない。

「まだ早いぞ！ どの部隊だ！？」

「確認できません。」

艦隊が艦砲射撃を行なうにあたり、敵機から攻撃されるのは間違いない。艦隊が攻撃を開始するまで、つまり湾岸施設が艦の射程に入るまで敵に発見されなかったとして、湾岸防衛を担う敵航空機の第一陣がやって来るまで長くて二十分。そこで艦隊は引き上げるわけだが、敵航空機の攻撃の前に甚大な被害を被るだろう。対応策として、本土からナケナシの友軍航空隊が、敵機を引き付けるためにやって来る算段になっていた。当時の王国としては、改良型の最新鋭機群がドーバー海峡を渡って来るわけだが、その航続距離は現在と比べると未だ短く、帰還することを考えると大陸付近で滞在でき

る作戦可能時間は二十分が限度といったところ。友軍航空隊が敵航空隊を引き付けているその間に、艦隊は可能な限り退却しなければならぬ。お粗末な作戦と言わねばならぬだろう。何しろ、二十分で艦隊が移動できる距離は、航空機からの避難としては余りにも少ない。それは友軍航空隊が、その二十分の間で敵航空機隊に艦隊の追撃を諦めさせる程度の打撃を与えねばならない、ということの意味する。その実現性は誰がどうやって検証したのだろうか？ この作戦の危機レベルは、『困難』を越えて『無謀』と言ってよかった。その上、艦隊が未だ大陸に向けて航行中のこのタイミングで友軍航空隊が来てしまつては、敵航空隊が艦隊攻撃に到着する頃には、友軍航空隊は本土に帰り着いていることだろう。航空戦力の援護が皆無の艦隊が辿る運命を予想するのはたやすい。この時、艦長の脳裏に『撤収』が選択肢として追加されたに違いない。

落ち着きを取り戻した新米の監視員が状況の変化を告げた。

「友軍機、敵編隊に向かいます！」

艦隊指揮官の威厳を保ちながらも明らかに血の気が引いた顔の艦長の口から、誰にもなく言葉が続く。

「何を考えているんだ！ 大陸には距離があつて未だ我が艦隊は攻撃にかかれぬぞ！ 今敵航空隊に見つかつてしまつたら……！！」

艦長は知らなかつたが、この二十機のタイガー・シャークは俺が率いる編隊だつた。王国の航空兵力にあつて、俺が率いるこの編隊だけはあらゆる意味で例外だつた。俺が皇太子だつた当時に、特別に設えた空母戦闘機群。王家の血を引き、王家の秘蹟を受けた俺が操縦する戦闘機は、常人からすれば鬼神の動きに見えたに違いない。我が王家が正当な皇帝一族の末裔であることが、この能力からも疑いようがない。その俺が鍛えに鍛えた編隊なのだ。数の差は勝敗を決しない。兵法も俺だけは避けて通る。航空機の性能もいい線を行っている。個々のパーツの基本的な性能は、残念ながら大陸には未だ敵わない。だが、目的さえ特定すれば、性能差はカバーできる。

航空戦用に特化した機体には、それに不要なものは一切搭載していない。だから俺達の機体は、外見はタイガー・シャークに似ているが、全くの別物と言える。プロペラの形から違うし、ドッグファイトの高G用に燃料供給のパイプ径まで変えてある。誰が乗っても段違いの航空戦ができるはずだ。増してやこれに特化した俺のチームは、王国にあつて敵が遭遇したくない唯一の戦隊だろう。無謀な作戦ではあつても、皇太子として俺はこの作戦を成功させなければならず、編隊を率いて推参したのだ。

既に東の空はかすかに白んでいるが、まだまだ夜明けまでは時間を要する頃、僅かに新月の朧光のみがプロペラの回転を仄かに認識させてくれる。首を後方に捻じ曲げて僚機を確認するも、極度に減灯した翼端灯がうつすらと見える程度だ。が、精鋭を以つて名を知られた我が隊は、危険を伴う夜間の隠密飛行などお手のものだ。闇闇に沈んでいる海面を見ることは叶わないが、今頃は王国艦隊が大陸沿岸部に取り付く頃だろう。

「『ハモンドオルガン』から『リッケンバッカー』へ。神聖同盟航空隊を二時の方向に機数約百を認む。距離三万五千。」

「『ハモンドオルガン』了解。」

索敵機『ハモンドオルガン』から予定通り無電を受け、早暁の方向に隊を導いていく。あと二、三分もすれば接触する距離である。

戦闘が始まるまでの僅かの時間。幾度出撃しても慣れることの無い痺れるようなひととき。このタイミングでは無駄と分かつてはいるが、改めてブリーフィングで計画した敵航空隊殲滅の段取りを反芻した。

東に飛んだことで空が少し明るくなり、群青色から緋色へ変わる曖昧な空の狭間にまるで熱帯魚のようにキラキラと光る一群が見えた。全百機で組成された神聖同盟の雷砲艇二十個小隊、かなりの規模だ。土手っ腹の太い機体は距離の間隔を鈍らせるが、距離は残すところ八千くらいと読んだ。護衛の機銃艇が僅かしか付いていない

のが気になるが、目下の作戦運用はこの雷砲艇の殲滅にある。

俺は敵機の識別標が視認できる距離に肉薄したところで隊を散開させた。

「全機散開！」

右翼に待機していた三番小隊が大きくバンクを切って編隊後方の小隊に突入、展開していったのを目の端で追うのと同時に、こちらもフットバーを思い切り踏み込んで急上昇に転じ、そのまま桿を右舷にひねり倒して半宙返りを切って眼下正面に敵一番編隊を捉えた。左手にはスロットルの把手が握られ、リニアローターエンジンにいつてもムチを呉れられるべく待機している。距離は既に七百を割り込んだか、それ位だろう。照準器の照星が銃撃可能を告げたその刹那、赤ブースト位置にスロットル把手を放り込む。ひといきに回転計の針が跳ね上がり、強力なトルクにぐいぐいと機体が引き込まれていく。

もう一方の桿の先端にある発射ボタンのセーフティを解除してはいるが、一撃必中させるにはまだ我慢だ！ とたん、弾幕の束がおおきくかぶさってきたが、鍛え上げられた駿馬のごとくしなる機体がこれをすり抜け、最初の一闪を神聖同盟の雷砲艇に浴びせた。風防のすぐ脇を光条がかすめ、そのたびに悲鳴のような銃弾の切裂き音が耳を貫く。視界のさきに目をやると、薄紫色のケムリの尾を引いてこちらの放った機銃の弾着が、まるでネズミが這うように敵機の胴をなぞっていくのが分かる。一瞬の沈黙を置いて、爆音をとどろかせ、どす黒い煙の広がりとともに四散した機体が海面から飛沫を上げて呑み込まれて行った。

あっけないものである。

< 続く >

ルナの航跡 6

第1章《帰還》（4 / 5）

「艦長、空戦が始まったようです。墜落していく火の玉が目視できません。」

血の気が引いた艦長の顔が引きつっていく。

「そもそもかなう敵ではない……。増してや今、敵機は爆撃帰りで爆弾も燃料も少なくて軽い。機動力で勝ち目は無いだろうし、数も五倍だ！ 友軍航空隊は全滅するだろう……。我々も作戦を中止して引き上げるか!？」

艦長の独り言を監視員が遮った。

「航空機編隊接近！」

とうとう耐え切れず、艦長はわめき出してしまった。

「最悪だ！ 友軍の支援航空機が全滅した上に我が艦隊も敵編隊に発見されてしまった！ 未だ攻撃前なのに!!」

しかし、淡々と監視員が続けた。

「タイガー・シャーク型です。機数二十、友軍航空隊は全機無事なようです。」

先任監視員が付け加える。

「発光信号確認、あ、大陸を背にしていますので、敵には見えません。」

状況が把握できない様子ではあるが、何とか指揮官の顔に戻った艦長が命令する。

「発光信号、読め。」

「はっ！ 敵機は全機殲滅した。作戦の成功を祈る。ルナより。」
以上。」

「ルナ皇太子か！ 敵機を全滅させた？ いや、あの方ならやりかねん。……そうか、二十機のタイガー・シャークは、ルナ皇太子殿

下直営の空母戦闘機群だったのか……。殿下はこの作戦に批判的で、参戦されるとは聞いていなかったが……。」

この作戦に俺は反対していた。大陸に向かう艦隊は、友軍航空隊による若干の援護が予定されていたとは言え、決死行を越えて特攻に近い任務を負うことになる。敵に与えられる打撃は微小だろうし、特攻のような神聖同盟への攻撃が、『反撃』したという実績に基づいた国威掲揚効果を上げられるとは思えない。兵力は蓄えていて始めて抑止力を発揮するのであつて、消耗を前提とした作戦から得られるものなど何も無いのだ。むしろ、兵員の消失が社会に与える悲しみや痛みが、国力を損なわせると考えるべきなのだ。しかし、作戦は強行されてしまった。決定したことであれば是非も無い。俺がすべきことは、作戦を成功に導くことであり、要員の損失を最低限に押さえることなのであつて、そのために最も効果的な形で介入したのだ。

我が編隊が殲滅した敵編隊は、敵の湾岸航空隊だった。それが全滅してしまったため、我が艦隊が艦砲射撃を始めた後、敵の航空機隊は三十分以上も来なかった。本土から来た我が方の艦隊を支援する航空隊は、敵の航空機がいないため、地上への攻撃に参加した。爆弾は搭載していなかったが、要所要所への機銃掃射が有効に働き、地上施設から艦隊への攻撃を効果的に抑止した。予定を大幅に超えて艦砲射撃した艦隊は、やっとたどりついた敵航空機隊を確認するや、退却し始めた。その時、友軍の支援航空機は既に帰還していたが、補給を終えた我が空母戦闘機群が迎撃にあたった。その結果、我が艦隊はほぼ無傷で帰還したのである。

ルナのこの戦果を以って停戦交渉が始まり、王国は有利に条約を締結するに至った。何しろ、神聖同盟側が湾岸地域に展開していた航空戦力は壊滅状態に陥り、湾岸施設も大打撃を被ったのだ。対して王国側の戦隊が受けた被害は最小限。これは、防衛能力の低下し

た西ケルト地方に、王国は再攻撃を仕掛けることができることを意味していた。神聖同盟としては協定に持ち込まざるを得ず、王国の要求をことごとく飲むしかない状態だったのだ。その功績は少なくとも民衆にはルナだけのものと映り、元々の作戦を立案した宰相を初めとした行政府や軍の評判を著しく貶めるといふ結果を招いた。元々名声に無頓着なルナが、宰相や軍の統帥が自らを辱められたと受け止めたことに気付かないのは、若さ故と言うには大きな禍根を残してしまったと言える。

「懐かしいね、全く。あれ以来、俺は皇太子を廃位され、『辺境伯』になったのだからな！」

圧倒的に有利な条件で結んだはずの講和において、ルナの廃位は不自然に見えた。そんな思いから強い口調で迫るルナの議論を、王は正面から受け止めようとはしなかった。

「思い出話をしている余裕は無い。お前が思っているより事態は逼迫している。これからのことを話そう。そのための人間は揃っている。」

それでもルナは引き下がらない。彼にも意地があり、責任もある。

「思い出話をしているわけじゃない。この三年間を水に流すつもりはないんだ。」

「それもいいだろう。ただ、その話の決着は今でなくとも良からう？」

「俺の気持ちの問題を言っているのなら、その通りだ。」

「分かったようだ。我々は王族として、国政を優先させねばならんのだ。」

確かにドーバー戦役は王国の大勝であった。その結果を導き出したのがルナであることも事実である。しかし、その事実が事態を難しくもした。王国艦隊から攻撃された西ケルトの湾岸地帯が被った打撃は、決して小さいものではなく、それも軍事施設だけが破壊されただけではない。無差別攻撃だったのだ。湾岸の港町と言えば、む

しる人々の生活が集まっていた地域である。また、西ケルトの人々の多くは、伝統的に王国への帰属意識を持っていたのだ。そんな所を無差別攻撃しておいて何のお咎めも無い、では国政が立ち行かなくなってしまう。ルナの廃位と追放は、こういった理由で実施されたのだ。この理由は表立って公表されたものではないが、少なくとも政治的に説得力のある内容であり、インテリ層だけでなく一般に受け入れられた認識であった。ルナにしてみれば、彼の部隊の戦闘相手は神聖同盟の戦闘航空隊だけだったし、湾岸施設を攻撃したのは艦隊であって、彼の部隊ではない。増して、そもそもあの作戦を立てたのはルナではなかったのだ。ルナは、格好のスケープゴートにされたわけであり、面白いはずもない。他に手があつたかというとならうし、落とすどころとして充分に理解できるだけに、理屈では割り切れない腹立たしさが余計に募っていたのだ。

「ご立派だよ、あんたは。」

やや諦め顔になったルナを王は怪訝に思い、もう少し話を続けることにした。

「王国の将来を憂いでいるのは、お前だけだとも思っていたのか？」

「そういうことじゃない。王国のことだけを考えているあんたが立派だと言ったんだ。」

「齒に衣を着せたような言い回しはするもんじゃない。お前の拘っているシコリを言ってみろ。」

「時間が無かつたんじゃないのかい？」

「そうだ。だが、国家の一大事、邪念を取り払わねば勤まるまい？ここで再びルナの頭に血が昇った。」

「邪念だと？　じゃあ言わしてもらうが、俺を帰還させて、皇太子はどうするつもりだったんだ？　俺と王子で、兄弟同士に殺し合いでもさせるつもりか？」

額から随分と窪んだ王の眼が笑い始めた。

「それを心配していたのか、お前は。皇太子に戻りたいのか？」

「そんなつもりは毛頭無い。ただ、民の声がどう出るか。下手をすれば俺達の意思とは別のところで争いになるかもしれない。」

王の眼は引き続き笑っていたが、それがルナには面白くない。

「他にも問題がある、ブリタニアだ。あそこの政務を放置するわけにはいかない。俺が元首なのだからな。あんたがブリテンのことを考えるように、俺はブリタニアのことを考えているんだ。分かるか？」

「それで、どうしろと言うのだ？」

王は冷静に微笑み続けているので、ルナの癩癩は行き場を無くしつつある。

「……俺だって状況は理解できるつもりだ。ただ、少し時間をくれ。ブリタニアの処置は今晚中にやっておく。他のことは……今じゃなくともいい。」

王が笑みを一層深くした。

「ブリタニアの三年、無駄ではなかったではないか。お前ももう立派な政治家だ。」

「俺が政治に興味が無いのをあんたは知っているだろう？ 皇太子にだってなりたくてなかったわけじゃなかったんだ。それを無理やりならしておいて、挙句に……」

ここで王の顔が父親から国王に変わり、その威厳が話をルナのブリタニア追放に戻るのことに拒絶した。

「ルナ、王として貴公の協力に感謝する。明日までにこちらでも準備を進めておけることはあるか？」

話は終わったのだ。それを理解したルナは、王国の属国元首として襟を正した。

「俺の空母戦闘機群、ドーバー戦役以来解散していると聞いているが、パイロットからコックまで、もう一度揃えて欲しい。」

「たいそうなことをあっさりと言う。」

「無駄にはならないと約束する。」

「やってみよう。」

王とその側近達を残し、ルナは自室に下がっていった。

<続く>

ルナの航跡 7

第1章《帰還》（5/5）

ルナにあてがわれた部屋は、王室のある主塔の隣に建つ副塔の中にある。部屋に戻る道すがら、王に侍る不愉快な側近達への怒りが込み上げてきていた。王も王である。人がいいのか、あの側近どもを調子付かせているのは相変わらずだ、とその怒りは王にまで向けられようとしていた。いや、王に言いくるめられた気恥ずかしさが、誰かへの八つ当たりになっっているのか。そういったことを振り払うために何か他のことを考え、心を落ち着ける必要があった。これから、様々なことを考えねばならないのだ。そんなルナの心に、王家の秘蹟を受けたあの夜のことが浮かび上がって来た。今歩いている回廊が、あの時のように静まりかえっているからだろうか。少年から青年に成長しようという頃、今の王子より少しだけ年上だった時のことだ。あの時も、暗い王宮の石造りの回廊を歩いていたことを思い出す。

老師がノックする音で、当時のルナは目を覚ました。あの老師はいずれ、今の王子も神殿に連れて行くのだろう。ルナは、そろそろ秘蹟を受ける時期に来ていることを王家の血が教えるのか、薄々感じてはいたので、今がそうなのだろうと思った。果たしてその通りであり、老師に勧められるままに着替えを済ませ、老師とともに神殿に向かった。この儀式のためだけに用意された衣装は、やけに薄く、軽く、ルナの体が透けて見えるかのように気恥ずかしさもあつたが、老師以外に誰がいるわけでもないもので気にしないことにした。冷気が立ち込める夜中に肌寒さも感じたが、それも気にする程のことでもない。回廊の所々に設置してある明かりを薄っすらと霧が覆い、幻想的な雰囲気王宮の歴史を物語っているかのようにあつた。

そんな薄暗い石造りの回廊を二人は一言も交わさずに歩き続けた。その間、ルナの心には喜びも恐怖もなく、他人事のように冷静な心持で今後の経緯を受け止めようとしていたものだ。程なくして達した神殿の入り口には、強面の神官が立ちはだかり、老師の入殿は頑なに拒まれた。そして、そこから祭壇があるであろう一画までは、老師に代わって強面の神官がルナを導いた。しかしながら、目的地である祭壇の区画には、その神官さえも入ることが許されていないらしく、彼は扉の前で立ち尽くしたまま動かなくなった。

暫くすると、中から小さな声がルナを誘った。大きい割に軽い扉を開けて一人で中に入ったルナは、少しばかりがっかりしたのを覚えていた。そこには、たった一人の神官、強面でもなく大柄でもない、外見上は普通の女性だけがいた。多くの召使がいるわけでもなく、彼女とルナだけの祭壇。その祭壇も小さく、暗い室内にひっそりと佇んでいるだけであつた。その頂きには、絶えることのない蠟燭の炎に五つの玉石が照らし出され、僅かに振動していた。その蠟燭の揺らめく炎は、傍らの神官をも照らし出していたが、年齢は三十歳前後だろうか。ルナ同様に透けるような薄着を纏った色白の神官は、とてつもなく艶かしく、そして美しかった。主神官に選ばれてから何年たっていたかは知らないが、それ以来他人と接することを禁じられ、生娘のまま完全な孤独の中で生きて来た女。暫くは、言葉の発し方すら忘れたかのように沈黙が続いた。

不気味で神々しい光と静かだが途切れることの無い振動音を放つ玉石は、その昔、遙か東方の大国から帝国にもたらされた。彼^かの国では、はるか昔に天帝から地上の統治を任せられた王が、その靈力を五種類の輝石に封印して玉石とし、後継者にその任務と靈力を五種類に分けて継がせていたと言う。

この世の全てが己に支配されることを当然と考えていたその国に、ルナの先祖達は強い冒険心に支えられて想像を絶する苦難を乗り切つて辿り着いた。香辛料や衣料といった特産を目当てに、ルナの先祖を追う商人も後を絶たなかったという。それらの交流を通じて、

帝国の規模や文化レベルまでもが東方に伝わった。その結果、自ら以外は全て蛮族であると断じていたその国としては唯一の例外として、帝国を己と同等の王国として認知せしめることに成功し、対等の交易を成り立たせた。そしてその証としてその国の王は、靈山に祭られた五種類の玉石の中から各々一つづつを帝国の使者に託し、敵かにそれは持ち帰られたのである。

帝国ではかつて、幾つかの例外を除いて能力と運で皇帝が選ばれていた。支持者は、軍団であったり、市民会であったり、あるいは元老院であったりと様々だったが、あくまで民に選ばれた皇帝であったのだ。しかし、千五百年前に、この玉石の来朝とともに血族による世襲に変わっていったと聞く。後年、理想的なモデルとして認められた民選前提の能力主義による皇帝輩出システムは、派閥の形成とそれらの勢力抗争に繋がり、更に勢力分布の細分化と抗争の頻発を経て、統治者を排出する制度としての限界を露呈していたのである。その数百年前に流行った、オリエントを起源とする古代宗教から分岐した新興の一神教の結末に似て、理想の現実への投影は人それぞれであるという人間の性故に、皇帝制や神の唯一性といった根本的な形式を維持するためには、その運営方法を変えて行かざるを得なかったのだ。以来、皇族の血統は守られており、その末裔にルナがいた。しかし、近年のブリテン王国と帝国の並立によって、皇統は分裂状態に陥っている。

この秘蹟を受けることで玉石の持つ五種類の靈力を体内に宿すことができるが、その実体は、五つの玉石が五感の一つ一つを研ぎ澄まし、それらの集大成として得られる第六感によって、常人を遙かに超える予想能力、常人には予知として受け止められる、^{イニシエ}が得られる。古の人々は、自然と会話する力、あるいは自然を操作する力を持つ者として、王族を崇めたという。なぜなら、秘蹟は誰にでも有効なのではなく、王族の後継者だけにその能力をもたらしただけだ。その理由を追求しようという者も当然いたし、今でもないわけではない。未だ解明されたわけではないが、生態科学や遺伝子

工学の分野で王国が他国から抜きん出ているという事実は、王族だけに『秘蹟』が具現化するという現象から導き出される好奇心に応じた、当然の帰結と言えるだろう。しかしながら、あらゆる因果を解き放つことが必ずしも良策とは限らない。結果を受け入れることで成り立ってきた歴史は、原因を突き止めることで覆される可能性を秘めており、それなりの危険を伴うものなのだ。それは、研究者のみならず、人類としてその結果を受け止める覚悟が必要、ということの意味する。それを知ってか、今でもそれは『秘蹟』として受け継がれている。

やや神秘的な要素として畏怖されていたこの能力は、航空機が登場するに至って驚異的な操縦能力として開花した。航空機を操るにあたって、視覚だけでは捉えられない自然の息吹を捉えられる力を得た者は、人の限界を超えた存在と成り得たのだ。そして、何らかのイベントや王室のアップールの度に航空機によるパレードが催され、王族が驚くべき曲芸飛行を先導することで、その能力は人々に示されて来た。そんな王国にあつて、どこよりも航空兵力の整備が遅れたというのは、どういった歴史の悪戯か。

五つの玉石を神官と交互に体内に抱くことから儀式は始まった。それに続く様々な行ないは、恐らくは不要なものが殆どなのだろう。神官につられるように全裸になったルナは、それから丸々三日間に渡って密室での体力の限界と対峙し続けることになった。男であることを思い知る儀式と、それを忘れさせるような儀式の果てし無い繰り返し。秘伝を凝らした毒々しい飲み物と、ルナと神官から絶えず零れ落ちる体液の匂いが神殿を満たし、そして絶頂の度に腹から搾り出される声が反響する。頹廢的であり淫靡に過ぎる行ないが続いたが、それらが無駄と決め付けるには伝統の力は重過ぎ、神官とルナの間を行き来する濡れた玉石が無言の内に行為の継続を強要した。そして、耐えに耐えた結果、それは来た。傍らの神官は、玉石とルナが入りする度に霊力を吸い取られていたのだろうか、既に力尽きて横たわっている。もう生娘ではなくなっただけだが、滑る

ような木目細かな素肌をまさぐりながら、ルナは開眼した。あの時の感覚は、どう言い現せばいいのだろう。色々なことが分かるようになった、としか言いようがない。空気の流れからさえ意思を感じるといったもの。その能力の使い方もわからないまま、妙に嬉しさとの底から湧きあがるような力がこみ上げたのを覚えている。あの時はそれ以上のことを考えはしなかった。玉石には、王族を目覚めさせる以外にも強大な力が備わっていることに気付くには、未だ暫くの歳月を要した。そしてこの数年後に玉石が一旦停止してしまい、それを再び発動させるのがルナであるということは、この時のルナが知る由も無かった。

思いに耽っていたルナは、そこで自室の前に辿り着いた。その時には王の側近への苛立ちも収まり、心は平静を取り戻していた。そろそろこれからのことに気持ちを切り替える時だ。

ルナは軽く深呼吸をして、力強くドアを開け、毅然とした表情で誰もいない部屋に入った。

<第1章終わり、第2章に続く>

ルナの航跡 8

第2章《陰謀》（1/4）

朝日が眩しい。晴れ渡ることが少ないこの国にしては、めずらしく透き通るような青空が広がっていた。

ちよつとした仮眠から覚めたルナは、手入れの行き届いた木々や花々が放つすがすがしい空気を胸一杯に溜め込んでから、現状の分析結果を今一度反芻した。夜明け前まで整理し、仮眠中に夢の中で纏め、起きてから確認する。いつものやりかたである。

王国の状況と、俺が置かれた立場と、切り離して整理しなければならぬ。多くの為政者が、自分もしくは自派の価値観だけを押し通し、国もろとも破滅した轍を踏まないために。

俺がドーバー戦役を戦った時と現在では、確かに状況は違っている。ここ数年、王国の航空兵力は質・量ともに大幅に向上した。王国自慢の海軍は、航空機の重要性をやつとのこと認め、航空兵力も対空戦力も格段に充実したようだ。本土防衛も、対空・対海とも整備され、磐石の態勢が整えられたかに見える。しかし、それはあくまで防衛という観点であり、こちらから打つて出るという発想は、相も変わらず皆無と言って良い。

恐らく、神聖同盟側が海峡を渡って来るのは時間の問題だ。王と帝国皇帝との確執が表面化した以上、帝国の守護者を任じられている神聖同盟は、王国に侵攻する大義名分を手に入れたことになる。

現在の神聖同盟は、ドーバー戦役で王国が攻撃した西ケルト公国領土を再び傘下に収めており、その他にも全方位的にかなり拡張している。その版図と人口、工業生産力を含めた経済力は、南方の帝国に匹敵し得るレベルだろう。対して王国の国力は半分以下と見なければならぬ。

それでも一時的になら、現在の王国の戦力なら、すぐに戦時体制に入って全力で防衛する決断さえくだせれば、暫くは守ることができらるだろうし、王室が戦時体制を宣言するのに躊躇することはないだろう。しかし、防衛だけでは戦闘が長期化するのは必至で、長期化すれば王国の国力は疲弊し、王は皇帝との和解を強制されることになるに違いない。不平等な和解を押し付けられるだろうから、条約破棄を掲げた王国の好戦派がすぐに勢いを得て、戦端が再び開くことになるだろう。そんなことをしても、所詮は消耗した王国に勝ち目は無く、結局は何度も侵攻が繰り返される羽目に陥るのだ。そして、繰り返される度に和解の条件が厳しくなっていくのは目に見えている。それは、王国の存続に関わるということだ。もって二年。帝国の出方によっては、一年で王国の主体性は消滅してしまうかもしれない。

俺を召還したということは、その問題に王は気付いている。防衛至上主義的な考え方から、打って出る方針に切り替える必要性を感じているのだ。確かに、この手の発想転換は、俺のお家芸みたいなものだ。空軍の充実と爆撃機の増備。まずはそこから始めねばならない。工業基盤も技術力も不足は無いはずだ。後はこういったことを実現して行くに当たって、どの程度の権限が俺に与えられるか、レベル別に幾つかの選択肢を用意しておけばいい。いずれにせよ、今一度俺の偉大さを王と臣民に示すことができるだろう。

問題は、その後だ。ドーバー戦役後の終戦協定では、唯一王国が譲歩した条件が、俺の排斥だった。皇太子を廃位されてブリタニア辺境伯に任ぜられてしまった。帝国まで含めた様々な思惑が錯綜した結果だろうが、結局はそれだけ俺が恐れられていたということだ。その他のこまごました要因など、考えてもしょうがない。

しかし、まさに孤島と呼ぶに相応しいブリタニアという辺境に飛ばされた俺には、生き続けること自体が課題になってしまった。あれから三年の間、国作りに明け暮れてやっとそれらしくなって来た。そこから学んだことだっていっぱいある。あの時に、今の俺くらい

の器量があればもつと上手くやれたのだろうか、それはいい。俺は変わったのだ。今度は俺が王国を変えてみせる。

現在の王子との間に問題はるか。いや、無い。少なくとも暫くは。俺には『皇太子』に未練は無いのだし、奴との確執が生まれて、足元から俺の思惑が崩れ去る要素は無いはずだ。俺から奴を皇太子に推薦したつていい。そもそも俺達の仲で、兄弟が衝突するというナンセンスを想定すること自体が全く不要だ。

ドーバー戦役で一時的に王国に帰属したとは言っても、近年の歴史において大陸の西ケルト地方が王国の版図から外れて久しいと言わざるを得ない。しかし、かの地は文化的にも民族的にも王国の一部だ。きつと取り返してみせる。『皇太子』の肩書きよりもそっちの方が重要だ。そうしなければ、王国の継続は難しいだろう。逆に、西ケルト地方を取り戻せれば、神聖同盟など目ではない。南方の帝国だって、王国との融和路線をより一層加速させるはずだ。

控えめなノックが、ルナの思考を遮った。

「入れ。」

ブリタニアから連れて来たルナの側近が入って来た。

「ブリタニアへの連絡は済ませました。後は、ルナ伯爵自ら公式の通信を行なって頂きたく。」

伯位についても、考えなければならぬ。官僚組織の肩書き、例えば宰相か、と並列させるか。それとも単なる官僚となるか。王子との関係を考えれば、伯爵として宰相を務める方がいいだろう。伯爵以上の肩書きを狙っているといったあらぬ野心を勘ぐられるのは得策では無い。

「原稿がございます。」

再び側近に思考を遮られ、不愉快な声色で原稿を取り上げ、ブリタニアへの回線を開いた。数秒の雑音と、回線を切り替えるプチっという音が何回か響いた後で、ブリタニア辺境国の統領が応じた。

「ルナ様、ご連絡をお待ちしておりました。」

「王はこの度、大陸側からの侵略に備え、具体的な行動を起こすと仰せだ。我が国も属国として、全面的にこれを支援する。ついては、私はここに残り、お役目を授かることになった。」

「ご決断、拝聴致しました。ブリタニアの統治は、統領である私目にお任せください。」

「頼む。また、兵をよこしてもらおうことになると思う。第一連帯を丸ごと移送する準備を進めてくれ。」

「かしこまりました。それでは早速準備に取り掛かります。……が」

「案ずる事は無い。王の私への信頼はゆるぎない。三年のブランクなど、親子には関係ないことが分かった。」

「それをお聞きして、安心致しました。陛下によりしくお伝えくださいませ。」

「よろしくはからおう。下がってくれ。」

通信が切れ、側近が話しはじめた。

「陛下の所にお出ましになられるので？」

「そうだな、三十分後に伺おうと思う。王室につないでくれ。」

「は。」

ルナは退出しようとする側近を身振りで近くに呼び寄せ、ブリタニア統領と側近との事前連絡の首尾を確認した。

「ブリタニアに動揺は無いようです。統領にお任せになり、任務の遂行だけをお考え遊ばせ。」

「分かった。」

ルナが王国に招聘されるということは、ブリタニアには元首が不在になるということなのだ。何らかの動揺があっても不思議ではない。それは、国政の混乱という形を取るかもしれないし、志の高い政治家であれば国そのものの奪取を考えるかもしれない。ブリタニアの統領はルナの腹心であって最も信頼できる人間だが、何人なんびとに対しても疑念を以って臨むことが国政を預かる者には必要なのだ。

それは王家の者であれば尚更で、本質的に王族が孤独であるという所以である。ルナは、側近に統領の動静を探らせていたのだが、側

近は統領に心配は無いとの結論に至ったようだ。本心ではルナもそう思っていたし、彼に任せておけば、国が混乱することも無いだろう。ルナは満足の笑みを浮かべて側近を下がらせた。そして、側近が部屋から出て行ったのを確認して、荷物から緊急用の携帯通信機を取り出した。部屋に誰もいないことを改めて確認しなおし、通信を開いた。

< 続く >

ルナの航跡 9

第2章《陰謀》（2 / 4）

「どうだ？」

側近からだけではなく、斥候からも報告させるのである、ルナは可能な限り、二系当の情報源を持つことにしていた。勿論、各系統の者同士は互いの存在を知らない。一方の情報源である側近は貴族であり、もう一方の斥候は市民の中から拾った。階級社会においては両者に直接の接点が無いため、思わぬ処で両系統の情報源が錯綜することも無い。互いが完全に独立した情報源である。

「ブリタニアは問題無いぜ、ルナ。統領の正直さ加減は馬鹿が付く程だな。それより、王室の動きの方が気になる。」

単なる緊急用の通信機だが、実はルナ専用の秘密の暗号通信装置を兼ねている。弱い国力では、各国に出せる斥候は少ない。それだけに、極めて優秀なスタッフを集める必要がある。そして、三年かけてやっと構築した情報網の中でも、ルナ子飼いの最も優れた斥候が訴えて来たのである。ルナとしても心して聞かねばならない。

「この時期に帝国との確執を表面化させるのは、どういった見だ？ 王がローマに出向いて皇帝と話をするだけじゃないか。」

王と皇帝の確執が表面化した事の発端は、皇帝が王をローマに呼んだが、それを王が拒否したことによる。斥候はそれに納得がいかないようで、更にルナに詰め寄る。

「皇帝が王をローマに呼んだのは、帝国の主流派になった王国との融和路線に則ったものと誰もが思っている。なぜ拒否する必要があるんだ？ 何か他に理由があるんじゃないか？」

「そうは言っても、王国としては我が方が帝位の正当な継承者を自認している。こちらから出掛けられないのは理解できるし、充分な拒否理由になるだろう。」

「今でもそうだと思うのか、ルナ？」

「継承権のことか？ それとも王が出掛けるハナシか？」

「後者だ。王が行くんじゃなく皇帝に来てもらわないと、体面上の問題があるか？」

「それもある。」

「王が出掛ける理由なんて、いくらでも作り上げられるだろうさ！」

「いや、それだけじゃない。王と皇帝が会ってしまったては、王としては皇帝に王家継承の証を示せと言わざるをえない。そうやってしまったら事態は取り返しが付かないレベルまで悪化してしまう。」

「つまり、帝国側も、来ないのを見越して呼んだとお前は考えているわけだ。」

「もつと言つと、神聖同盟側の圧力で、王国の孤立化に帝国が加担させられたと見るべきだろう。」

「それがお前の考えか。お言葉ですがね、そのご意見には賛同しかねる。俺の情報から判断するとね。」

「ちょっと待て、ブルータス、どういうことだ？」

「帝国では皇帝も元老院の主流派の意見を取り入れていて、敢えて今王国との確執を表面化させても何もメリットは無いだろう？ つまり、これは王国側の問題と考えるべきなんだよ。」

ルナは、子飼いの斥候であるブルータスの言うことを聞くことにしている。彼にはそれだけの価値がある。沈黙によって彼が話しを続けることを促した。

「お前はさつき、王と皇帝があいまみれば、皇帝に王家継承の証を示すことを求めざるを得ない、と言ったな？」

「それで？」

「皇帝だって同じってことさ。」

「なるほど。王も証を示せと求められるわけだ。示してやればいいさ！」

「そんなに単純じゃない。皇帝は薄くとも王家の血を引いているのは間違いない。王家の秘蹟を施されさえすれば、継承の証は示せち

まうのさ。」

「秘蹟を施すことなど不可能だ。王国の神官から選ばれた、たった一人の生娘だけが伝えられるもので、何人なんびとであろうとやれはしない。だからこそ秘蹟なんだ。」

「どんな秘密だつて漏れるものさ。」

ルナの頭脳に、『王家の秘蹟』を受けた夜の記憶が生々しく蘇って来た。そして、自分が開眼した後、色白で美しかった彼女は引き続き神官を勤めているのだろうか、というこの時に相応しくない疑問が頭をもたげた。そう思うと何とも不自然な嫉妬心が沸き立つのを感じる。いや、秘蹟を施す神官の条件は『生娘』だ。誰かに引き継がれたに違い無い。そう考えることで、何とか意識をブルータスに戻した。

「ブルータス、確かなのか？ 皇帝も王家継承の証を示すことができると言っただな？ それでは皇帝と王が双方ともに正当性を帯びてしまっじゃないか！」

「おめでたい奴だと言わせてもらっぜ、ルナ。そういうことじゃないだろ？ 皇帝が本当に王国との共存共栄を望んでいると考えているのか？」

「違つと言っなら、根拠は何だ？」

「唐突に過ぎるってことだ。王国と帝国がともに正当性を主張して百年だぞ。基本的に敵対して来た相手と呼ぶには、事前にもっと地ならしするぞ。」

「王国を帝国に統合するつもりなのか、あの皇帝は！」

「そう考えていいだろう。だから、皇帝が王をローマに呼ぶには、皇帝が有利に立てる何かがあるはずだ。それも決定的な何かがない。逆に言つと、王にはローマに絶対に行けない理由があるということだ。」

「皇帝が王を呼んだのは、皇位継承者として王が不適切だということを知らしめるため、ということなんだな。」

「そうだ。それには、王が王家の証を示すことができない、という

のが最も効果的だ。だからこそ、王はローマ行きを拒否せざるを得なかつたんだ。」

「秘蹟を無効にする方法があるって聞いたことがある。王は王家の証を放棄したんじゃないのか？ それならその事実を主張すればいい。」

「何のために放棄するんだ？ 例えそうだったとして、正当性を放棄した王が皇帝と同列のまままででいられるか？」

「そもそも現在の皇帝一族は、秘蹟が神秘的だからこそ、それによる皇位継承の正当性を否定した一派の末裔じゃないか。それが今になって証を示せだのと言うのは変なハナシだぜ！」

「民衆もそう思つかない、ルナ？」

冷静なブルータスに、ルナは言葉を詰まらせるしかなかった。

「王家の秘蹟を施されたのは、今やお前と皇帝しかいないってことなんだよ、ルナ。」

ブルータスの言っていることは、王が正当な王位継承者では無いことを意味する。しかしながら、ルナは秘蹟を施され、証を示す能力がある。この話が事実だとすると、王はルナの実の父ではないことになる。王がすり変わったのだ。本当の父、本当の王はどうなったのか。今の王はいつたい誰なのか。秘蹟を盗むことができるのはいつたい誰なのか。数々の疑問が一拳にルナの頭を占拠していった。

「王が……」

「とてつもない大きな陰謀が渦巻いている。俺達の王国を取り返そうぜ、ルナ。」

「……王子はどうなんだ？ あいつは本当の王子なのか？」

「それについては未だ確かな情報がない。」

「そうか、わかつたら知らせてくれ。俺は、当面、何も知らない振りをすることにする。」

「それが賢明だな。」

通信を切った。想定外であった。あまりの事態に動揺している。そんな自分を可笑しくも思う。鬼神を自認している自分が、何と人間

くさいことか。しかし、感傷に浸っている場合ではない。これから
当の王がいる王室に出向こうとしている時に、動揺を誰にも悟られ
てはならないのだ。

ルナは、珍しく汗にぬれた衣服を正し、身だしなみを整えて王室
に向かった。

< 続く >

ブリタニアの町は賑やかであった。ルナの側近や斥候が言っていた通り、この国に心配は要らないようだ。既にルナが不在でも、自力で運営できる力を人々が身に付けていたのだ。また、宰相を統領と呼んではいるが、基本的には王国の統治システムを真似た行政府には、安心して任せられるスタッフが揃っていた。

素朴で質素ではある。確かに未だ貧しくもある。しかし、王国のみならず、神聖同盟は言うまでもなく、帝国を含めてみても、ブリタニアの人々の方が満たされており、栄えていると言つていいだろう。人々は自由と平等をどこの国や町よりも享受していた。享受するだけの基盤が育まれていたのだ。自由とは他人の権利を奪わないもの、権利とは持てる義務を果たして得られるもの、平等とは努力する自由であつてその結果として得られるものが公平であるということ、といったことを理解できるだけの能力が備わっていなければ、これらの要素は人々の活動を阻害こそすれ、発展させはしないものなのだ。辺境であり小さくはあつても、結果的に共同体社会を運営して来たブリタニアの人々は、未だ野蛮な神聖同盟や、成熟してしまつて本来の意味を履き違えてしまつている王国や帝国の人々よりも、むしろ社会性に富んでいると言える。人々には活動の自由があり、社会は自由な活動の機会を平等に与えている。社会が正常に進歩し、栄えていくための環境が整っているのだ。彼等は、突き詰めると矛盾するかに見える『自由』と『平等』は、陳腐ではあるが『愛する心』によって両立する、ということを経験的に知つていたのだ。このまま成熟が進んで行くと、伝統を持つ国々のように『自由』の主張が『平等』を阻害する関係に陥つて行くのかもしれないが、

幸運にもこの国は未だその域には達していない。厳しい自然環境と辺境故に乏しい経済基盤が、彼等に生き抜く術を教えたのか、墮落や衰亡とは無縁なように見えた。それらが相まって、ブリタニアは歴史的発展を遂げており、活気に満ちた町からは、隣国でこれから戦争が勃発するかもしれないといった危惧は微塵も感じられなかった。不安が皆無の世は没落を招くが、ブリタニアにそれが無いわけではない。しかし、ブリタニアにある不安要素とは、王国が抱えているような戦争といった破壊方向のものではなく、成長方向の勢いに乗り遅れまいとする、人々を発奮させる類のものなのであった。ルナがどれくらい意識していたかは不明だが、理想に近い状態にブリタニアはあつたのだ。かつて、後年に賢帝と呼ばれる皇帝が北方の蛮族とブリテン島で戦っていた時代、その蛮族ですら立ち寄りなかつたこの地は、その後の長い空白の時代を経て、空前の繁栄に向けて邁進していたのだつた。このまま行けば、ブリタニアの事例はこの時代の成功例として、歴史に名を留めたことだろう。しかし、歴史の難しさは、関わり合うあらゆる要素に後押しされなければ、本当の成功には至らないという所にある。勿論、衰退しない成功や繁栄という事例は、今のところ存在しない。数世代に渡る繁栄を歴史は成功と見なしていると言つていいだろう。この後に続くブリタニアの歴史は、ルナを取り巻く環境がわずかに違つていれば、悲劇を回避できたのかもしれない。歴史上に刻まれた多くの事例と同様、あと少しで一部の例外だけが手にすることができる成功例と成り得たはずだ。そうはならなかつたのだが、人々は、現実の厳しさを後どれくらい思い知れば惨劇を繰り返さなくなるのか。それは類稀な強運だけが導くことができる要素なのだろうか。そんな強運の持ち主だけが優秀な為政者と言うのであれば、ブリタニアにとってルナは、その資格が無かつたということなのだろう。

王室の憲兵が、ルナの到着を告げた。

「暫し待たせておけ。すぐに呼ぶ。」

「は。」

王に侍る側近は二人。宰相と軍の統帥の二名である。彼等を諭している王は、ルナをあまり待たせたくない思いから、一気に核心をついた。

「貴公等は、何か勘違いしているのではないか？」

「心外ですな、陛下。我等一同、陛下と王国の将来のため、良かれと考えております。」

「それなら良いのだが、ルナがおらねば王国は存続すら危ぶまれる。」

「その点については我等とて同じ意見です。」

「国家の存続とは、目の前の危機だけを回避すれば良いというものでは無かるう？」

「仰せの通りです。さればこそ、ルナ殿の役割には限界があると申し上げているのです。」

「ルナはあれの完成までの繋ぎ役でしかない？」

「申し上げるまでもありません。リメス・ジンが全てを決めます。」

守り一辺倒だった王国の軍備は、リメス・ジンの実戦配備によって一気に攻めに転じるのです。そもそも……」

宰相の目が無気味に輝いた。

「玉石を再び発動させることが、ルナ殿を招聘した目的です。その意味で、彼は既に我々の目的を成し遂げたのです。」

「玉石は再び発動したのか！？」

「はい。先代の王が秘蹟を放棄し、それ以来停止していた玉石が再び振動し始めたのです。玉石がルナ殿の帰還を感じ取ったのでしよう。確かに王家の血族、恐るべきと言えましょう。」

「後はリメス・ジンの完成を待つのみ、ということか。」

「つまりルナ殿を戦場に向かわせるのは、神聖同盟を撃退する為ではない。お分かりですね？」

「しかし、リメス・ジンの完成が遅れているのでは、戦線を維持す

るための方策が必要だろうか？」

「それは事実です。ですからこうして、ルナ殿を投入する作戦を考えるに苦勞しているのです。ルナ殿の排除と戦線の維持、両方を成し遂げねばなりませんからな。」

玉石が既に発動したのであれば、王は領かざるを得ない。そこに宰相がたたみかけた。

「陛下、我が一族は古くから王家に遣えております。軍の統帥としてそうです。陛下の一存に誤りがあつた場合、それを正すのも我等の役目。くれぐれもお忘れなきよう。」

言葉とは裏腹に、『正当なとりまき』のお陰で『偽りの王』が成り立っていると言っているのだ。これは、もう議論する気は無いという暗黙の、そして絶対の意思表示であつた。王はこう言うしかなかった。

「我々の利益が国益に適う。その考えは余とて同じだ。よし、これまでにしよう。」

「かしこまりました。リメス・ジンの開発は、遅れを取り戻しつつあります。既に試験飛行を行なつており、あれを投入する作戦の立案こそ急がねばなりません。それまでの繋ぎの作戦など、大きな失敗さえしなければ良いのです。戦線を維持さえすれば充分なのでから。」

それを聞いて王は思わず言葉を挟まずにはいられなかった。

「必ず勝てると思つた作戦でも、敗戦に帰すことはあるものだが……」

宰相は王の言葉を視線で一括し、王は額の奥の眼を一層細めて言葉の続きを失つた。未だ宰相には適わない。それを確認した宰相は、王室の重層な扉を開け、微動だにしない憲兵の横に控えていたルナに入室を促す視線を投げかけた。その目は相変わらず感情を現さなかった。

「ルナ辺境伯、ブリタニアの方は大丈夫ですか？」

宰相がルナを部屋に招き入れながら話を切り出した。

「問題無い。それより、空母戦闘機群のスタッフは集まりそうかい？」

それには軍の統帥が大儀そうに応えた。

「概ね揃う見込みだ。貴公にはこれから港に行つて頂く。数日中には連中も集まるだろう。」

ルナの視線は王に固定されており、臣下の話など聞いていないかのようなのだ。

「陛下。私は港に行くのですか？」

ルナの口調がまたしても丁寧になって行く。王も臣下の手前、ルナとの距離を置きたいのか、あいかわらず沈黙しており、軍の統帥が応えるに任せている。

「これは軍の作戦である。貴公は、命令に従つておれば良い。私が言うこと以上を知る必要は無い。」

悪意に満ちた雰囲気、ルナは耐え続けた。その状況を楽しんでいるかのような表情で、軍の統帥がたたみかけた。

「港から航空隊を率いて空母戦闘群に合流してもらおう。作戦の詳細は、現地でリモー提督から説明を受けるように。」

ルナは引き続き王に視線を固定しながら、言葉だけは軍の統帥に向ける。

「ブリタニアから兵を招集したい。受け入れ態勢を整えてもらえますか？」

視線を合わせようとしないルナに苛立ちを感じた統帥は、今度は慇懃に応えた。

「考えておきましょう。規模はどれくらいですか？」

「航空小隊ひとつだけだ。大袈裟に構える必要は無い。」

軍の統帥のみならず、宰相も鼻で笑う仕草を隠さなかった。田舎者を招聘して何をするおつもりか、邪魔だけはしないでもらいたい、と今にも言わんばかりである。

「はつきりさせておこう。」

王だけを見ていたルナだったが、宰相に視線を移し、そして次に軍の統帥を睨みつけてから続けた。

「王国には貴様の作戦が必要だ。俺には俺の直営の部下が必要だ。そして、貴様には俺が必要だ。異存はあるか？」

王族としての帝王学と、動物としての生存本能、両方を経験から兼ね備えたルナのの前には、王に侍る百戦錬磨の文官と言えども怯まざるを得なかった。

「よかろう、貴公の活躍を期待する。」

ルナは、宰相級の役職を想定していたが、これでは宰相はおろか、一介の部隊を率いる中級仕官並の扱いである。このような状況をルナは予想していなかった。考え直さなければならぬことが山とできてしまった。しかし、この方がやりやすいかもしれない。そう思い直すしかなく、もうここでの話は終わってしまったし、この空気も耐え難いものだったので、急ぎ港に出発することにした。

「それでは陛下、私はこれにて港に向かいます。」

王はわずかに頷いて見せ、ルナから視線を外して退室を促した。

「王国に栄光あれ。」

唸るように言ってから、ルナは退室して行った。ブルータスの情報が正しいとすれば、この王は偽者なのだが、真偽は分からなかった。三年前に別れた父親のようにしか見えない。しかし、過去にブルータスの情報が誤っていたことはない。あの王は親父と別人なのだ。目の前の男が父親かどうかさえ見極められなかった自分に情けなさを覚え、ルナの心は混乱を極めていた。

< 続く >

「水と油では何事もうまくは行くまい？」

ルナが退室した王室で、王がうんざりした声で臣下を再び諭した。

「十分に理解しております。しかしながら、理性では如何ともし難いこともあります。……本質とはそういうものです。陛下。」

狸である。この宰相が国を支えている。

「適度にな。……では統帥、軍の立てた作戦を聞こう。」

軍が立案した作戦であり、宰相が検証している。それをこれから王に諮るのであって、この場で作戦の内容を知らないのは王だけである。王を軽視している宰相達からすれば、これは単なる儀式に過ぎないと考えていた。しかし、この王は凡庸ではない。優れた指導者であり、秀逸な洞察力を持っている。また、為政者に不可欠な鋭いセンスも兼ね備えていた。惜しむらくは、臣下の力が強すぎることか。

軍事作戦を立案するのには向いていない宰相が作成した作戦ということから、作戦の内容は至極大雑把なものであった。リメス・ジンの完成が遅れ、大陸からの侵攻に間に合わない可能性が高まった。そこでルナを招聘して戦線を維持させ、その上更にルナの排除も同時に成し遂げる、という二つの目標を持った作戦なのだ。このように戦略的な作戦であればこそ、綿密に計画されなければならない。しかし、立案したのが所詮は文官で、更にはリメス・ジンを使った本格侵攻作戦までの繋ぎでしかないという思いから、大雑把で隙だらけの作戦計画でしかなかった。

鋭敏な指摘と質問、現実的な代替案、それらが王から発せられ、議論は紛糾したが、丸一日を要して作戦の大筋は纏まった。

皆疲れていたが、臣下は満足の笑みを浮かべていた。しかしなが

ら、王は悲痛な表情が顔面に密着して今にも崩れ落ちんばかりであった。ルナなら、厳しくはあっても何とか切り抜けられるように、微妙に作戦を調整したことに側近達は気付いていないようだ。こんな側近達や皇帝の思うままになつてたまるものか、という本心は誰にも悟らせずに、しかしそれだけを心の支えとして、疲れながらも彼は王の威厳をもつて宣言した。

「これで閉会する。ご苦勞であつた。」

「王国に栄光あれ。」

臣下が退室して行こうとした。

「私はカエサルではない……」

誰にともなく王が呟いた言葉を聞きとめた宰相が、怪訝な表情で振り向いた。

「カエサルはガリアを征服しましたが、今とはあまりに状況が違います。」

王は手を上げて承諾を現し、宰相が去つて行くのを見守つてから再び呟いた。

「状況ではない。能力を言ったのだ……」

今度は誰も聞いてはいなかった。

帝国の皇宮では、開け放たれた窓に夕暮れの市街から二千年の重みを載せて二百万人の息遣いが吹き込んで来ていた。フォルムや河畔の喧騒、議場の熱弁、縦横無尽に流れる水道の水の音、これらは永遠に変わることはあるまい。この二千年の間、帝国の首都は各地を転々としたこともあつたが、「カプトウ・ムンディ」（世界の首都）にはやはりここが相応しい。過去の皇帝には、北方の騎馬民族に蹂躪され、ここを追われた者もいた。しかし、新たに建設された街では、如何に豪奢であつたとしてもこの街の代わりを務めることはできない。カエサルが暗殺の魔の手から逃げ仰せ、元老院を押さえ込んで初代皇帝の座に着いたこの街。暑い時期が長く、埃っぽい

街ではあっても、ここを凌ぐ伝統は何処にも無い。少なくとも今の皇帝はそう考えていた。

自分が「カエサル・アウグストゥス」（皇帝）として認知された朝、ここに集まった数万の民衆や元老院の議員たちはあらん限りの声で「インペラートル」（総司令官）と叫び、それは大歓声となつて自分の体を包んだ。古代より続く、皇帝選出の儀式である。軽く片手を上げ、その重責と己の無能さ故にと、一旦は辞退してみせるといふ白々しい手順を経て、皇帝になったのだ。誰も反対しない、全員一致での皇帝選出。可もなく不可もない、言葉を変えれば誰にとつても無害な皇帝の登場を、皆が待ち望んでいたのである。あれから十余年、もはや飾り物とは言わせない実力を身に付けた。元老院の大部分は、自分への同調を最優先に考えるようになった。それだけに、ブリテン王国の連中は真にもつて疎ましい。彼等は自分を認めないだけでなく、自分を恐れない連中の拠り所になっている。小さな島に引きこもり、そこで正当な皇族の系統を名乗るブリテン王国など、認めるわけにはいかないのだ。そして、神聖同盟もまた増徴させてはならない。先代の皇帝が崩御し、自分が選任されるまでの数年間の空位期間、ここぞとばかりに暗躍した神聖同盟は、所詮は蛮族の末裔でしかなく、卑しくも帝国の運営に口を挟むなど、もつての他だ。帝国の一部に過ぎないということ、自分の配下に甘んじるべき者達であること、改めて分からしめさせる必要がある。人民からの皇帝職の委託という古代からの儀式の他に、自分は皇族の系統であることを示すことができる。極秘裏にはあるが、ブリテン王国の連中が言う『王家の秘蹟』も受け、その能力を得たのだ。なぜ皇帝である自分が、秘蹟を受けるということを元老院や神聖同盟の目を盗んでやらねばならないのか。秘密を守るために、必要最低限の者だけ、この策略に直接関わる者だけで進めることが必要なので、それも今は我慢しよう。ブリテン王国の王室を取り込み、傀儡の王を立てたのが自分であることに気付いている者は一人もいない。いや、この策略自体を何人も知らないのだ。最も疎ましいは

ずのブリテン王国を使う処にこの策略の妙がある。

実力が伴う皇帝の出現を嫌った帝国内外の連中は、間も無く思い知ることになるだろう。民衆から絶大な支持を受けている奴を除いては。何よりも腹立たしいあの男、ルナと言ったか、奴の存在を抹消しなくてはならない。奴が皇太子に任命された時、ブリテン王国はその儀式を大々的に放映した。普段は軽率な格好かパイロットスーツしか身に付けないルナが、紫色のトーガを難なく着こなし、民衆に視線を投げかけた時、自分までもがその威厳に萎縮してしまったことを覚えている。自分の皇帝着任時のような打算的な雰囲気はかけらもなく、心から奴の皇太子への就任を祝う人民の声。これが正当な皇族の迫力か。その上、神聖同盟を屈服させたドーバー戦役を奴が成功たらしめたという事実。帝国の元老院にすら、ブリテン王国との共存を言う者が数多く出る始末。危険極まりない男だ。ドーバー戦役の停戦条約に介入し、奴をブリタニアという辺境に追い出すことはできた。いや、当時は未だ奴を完全に駆逐するための謀り事を成す程の力が無かったために、抹殺することに失敗したと言うべきだ。ブリテンの民の間で、ルナ回帰の思いは未だ強いと聞く。如何に自分がブリテンの王室を押さえていたとしても、恐らく早晩あの男は戻って来るだろう。それを受け入れざるを得ない環境が整ってしまふのは、不都合極まりない。その前に事を成さねばならぬ。今度は違う。徹底的に蹴散らしてくれる。ただ殺してしまうだけでは不十分だ。奴の名声を貶めてからでなければならぬ。そして、ルナがいなくなつた後、ブリテン国王から、王位を自分に禅譲させるのだ。往年の帝国の回復、そして皇位の統一。この手で再び『パックス・ローマーナ』（ローマによる平和）を再現させるのだ。考えるだけでも血が沸くのを感じるではないか。それも、あと一息のところまで来ている。

今でも自分は、表面的には温厚な皇帝として通っているはずだ。既に元老院の基本戦略になつてしまったブリテン王国との融和路線、これに同調しているように振舞つても来た。ブリテン国王のここへ

の招聘も、融和路線に乗った共存のための話し合いをしようとしている、としか見えないだろう。しかし、ブリテン国王は今、ここには来られない。来朝を拒否するようにと言っている。従って自分に対する、平和を愛する皇帝、という民の印象は一層強められ、イメージを落とすのはブリテン国王になるはずだ。後は、ルナという王位継承権を持つ英雄さえいなくなれば、平和主義者という印象を持ち、そして王位を禅譲されて正当性も身に付けた自分を、民衆は熱狂して支持するに違い無い。心から「インペラトル」と叫ぶことだろう。そして、『王家の秘蹟』という神秘主義者の戯言を葬り去るのだ。帝国は、科学的で純粋な『力』によつてのみ支えられなければならない。一部の超人的血統や怪しい儀式が裏付けるものなど、必要無いのだ。だからこそ、自分の先祖は皇位を奪った。この国を正しい道に導くために。ブリテン王国の消滅を以つて、我が一族の思いは成就する。百年に渡る抗争に終止符を打つ時が来たのだ。

機は熟した。カエサルはルビコン河を渡る時に「賽は投げられた」と言ったというが、自分も今、後戻りができない局面に立とうとしている。歴史上、カエサルは初代皇帝とされているが、初代は唯一の存在なのでカエサルだけのものであつてもしょうがない。後年、歴史を記述する者どもは、初代と同等の尊厳を持つ大帝と自分を呼ぶことになるだろう。かつて、わずかにその称号を得た皇帝がいたが、自分も大帝と呼ばれるためには、この策略を是が非にも成功させねばならない。そして民は、須らく自分に跪くために生まれ出た存在、ということを知ることだろう。

数千年の歴史と現代が同居する世界最大の大都市の中心で、大帝の榮譽を夢見る皇帝のその口に、笑みがこぼれた。

自分以外の人間を利用することしか考えないことに、皇帝たる彼が何のためらいも感じないのは仕方の無いことであつたのかもしれない。そして、『王家の秘蹟』による皇位継承を否定しながらも、

結局は自らの血統による皇位の世襲に何ら疑問を感じていないという矛盾。これもまた人として止むを得ないのだろう。人とは自らに都合が良い思考から脱却できないものなのだ。しかし、利用される側の誰もが彼の思惑の一端を成すことにだけに満足するわけではない、ということもまた事実なのである。傀儡の王としてブリテン王国に送り込んだ者が、側近達との確執や、ルナの人間的な魅力、そして国王という甘美な響きによって、必ずしも皇帝の思惑だけに従って行動している訳ではない、ということなど思い至るはずも無い。傀儡の王のできることなど、些細であって取るに足らない、というのが皇帝の認識なのであった。この認識の欠如から、状況のチエツク機関の設置を怠ったというのは、彼の妄想を成し遂げる障壁と成り得るのだ。敵は言うもでもなく、味方も監視・監督する必要があるという事実は、古今東西変わらぬ真理である。

結局、最大の敵は常に内部に存在し、究極的には自分の中にあるのだ。それは『油断』と呼ばれ、全くの強敵である。誰もが腐れ縁を持つ相手だが。

<第2章終わり 3章に続く>

ルナの航跡 12

第3章《出撃》（1/5）

曇天に甲高いエンジン音を響かせながら次々に離陸して行くのは、最新鋭であるタイガー・シャーク2戦闘機の兄弟機だ。

ルナと配下の整備士が、ルナ戦隊に必要な能力をタイガー・シャーク2に持たせるべく改造した機体である。仲間内では、タイガー・ルナと呼ばれているその機体は、明らかにタイガー・シャーク2とは違っていた。外観はさほど変わらないが、エンジンは始動した時から別物の音を奏でる。ドライバー戦役時代の秘蔵っ子整備士、カク・サンカクがチューンアップしたそのエンジンは、芸術的な鼓動と、野獣のような力を発する。極端に気分屋のカクは、周りの人間がご機嫌を取っておかないと、彼が手掛けるモノの性能まで落ちてしまう。そういう扱いにくさはあるが、彼の腕は神がかり的であり、機嫌が良い時に改造したタイガー・ルナは恐ろしいまでに高性能化されていた。そして、カクは今とても機嫌が良く、整備としても万全を期した状態なのは明らかであり、それをエンジン音が裏付けていた。カク程は極端でなくとも、人というのは気持ちの持ち方で発揮される能力が段違いになる生き物である。最高の状態にチームを導くのは、隊長であるルナの重要な役目の一つであった。

隊員達の機嫌も上々のようだ。一昨日の夜、久しぶりに皆と飲み明かしたおかげだろう。ドライバー戦役の勇士とブリタニアから招聘した兵士の親睦を深め、信頼関係を築いておく必要があったのだ。軍用と商業用が併設された港を持ち空軍の基地も近くにあるこの街には、軍人や商人を初めとした、ありとあらゆる階層の人々とその生業が集まっていた。良くも悪くもこの街は王国の縮図と言える。ルナ達が繰り出したその店は、如何にもそんな港町にありがちな、雑踏の延長線上にありながら、何らかの分野で腕に覚えのある連中

が集まる、ちよつと淫靡で刹那的な酒場だった。

「あんだ、ルナ皇太子じゃないのかい？」

酒場の髭面マスターが、カウンター越しにルナに話し掛けてきた。カウンター席の椅子は高く、カウンター内外の者の視線に高低差が少ないので、マスターとルナの距離は不自然なまでに近付いていた。ルナはそんな状況が息苦しく、軽く手を上げてやり過ごそうとしたが、髭面は引き下がるうとしない。

「そうかい、あんだ戻って来たのかい。元皇太子。」

それには隊員達が応じた。

「マスターよお、誰だつていいじゃねえか。俺たちや酒が旨く飲めればそれでいいんだよ。」

隊員達には既に相当な酒が入っているが、軍人の本能なのか、何とかごまかそうとしてくれている。ルナが王国領土で大勢の隊員といることが知れば、王国は協定違反で追求される。いや、そんなことより作戦が控えていることが漏れることになる。そういう意味では、場末の酒場に繰り出したのは軽率だったのかもしれない。そんなルナと隊員達の危惧等知るはずもなく、髭面は陽気に話を続ける。「いやあね、俺だつて大将達には旨い酒を飲んでもらいたいわけさ。もしあのあんちゃんがルナなら、とつておきの酒を出さなきゃならんと思つてね。」

「何だよ、そのとつておきつて。俺達には出せねえのかい？」

何とか話を逸らせようとしているところに、格好の話題を持つて別の隊員が割り込んで来た。

「マスター、強え酒を二杯だ、あそこのカップルに。」

皆につられてルナも視線を動かした。古来より帝国の文化圏であるこの街には、基本的に石造りの建造物が並ぶ。しかし、庶民の階級には木造の独自の文化が育っており、洒落た木造建築が石造りの立派な建物の狭間を至る所で埋めている。この店もそんな木造の建物である。天井から吊るさされている照明は木造故に人の動きに応じて絶え間なく揺れ動いており、店内を一樣に照らすには照度が不足し

ているために、揺れに応じて店内を光の輪が走り回っていた。店の中心に陣取るカウンター席の隅にルナ達の視線が集まっていたが、そこに向けて光が動いて行くに連れ、そのカップルがカク・サンカクとベルアーレであることが照らし出された。技術畑一筋で危なげ眼光が貧相な顔の中で異様に光るカクと、酒場の雰囲気がよく似合う色気を醸し出しながら高貴な風貌も併せ持つベルアーレ、この異色の組み合わせは、それだけでも人目を引く。ドバー戦役以前から、ルナが街に繰り出す度に何処からとも無く現れてはグラスを重ねて来たベルアーレ、いつしか彼女はルナ隊のマドンナ的存在になっていた。普段は飲み歩く時間があれば研究室や作業室にこもって機械をいじっていたカク、彼をしてもルナ隊再編成のこの宴には出て来ざるを得なかった。そしてここでカクは、ベルアーレと運命的に出会ったと考えたのだ。ここまで極端な一目惚れも珍しい。ガラにもなく真剣な表情でベルアーレを口説くカクに皆が大笑いしていたが、中には茶化して邪魔する隊員もいる。

「カクよ。お前どけよ。ベルアーレは俺様と話がしてえんだとよ。」
「ギリギリまで空いた胸元と深いスリットから覗く太股、交互に視線を配る隊員は、カクではなくベルアーレに拒まれた。カクに意味ありげにもたれかかり、その肩に頬をあずけながらベルアーレが一喝する。」

「あんだ何が出来るのさ。」
そこでカクの手から自らの指を這うように絡ませ、組み替えた脚に隊員の視線を感じながら、うっとりしたような目でカクに呟きかけた。「あなたの指にかかったら、何だって最高に良くなるってハナシだよ。機械だけじゃなく、何だって……。」
周辺の隊員達は大ウケである。皆からそのかさね、カクはベルアーレを伴って二人だけで階上の部屋に消えて行った。カウンター横の階段を昇って行く二人を、ベルアーレに振られた隊員は面白くないさそうに見つめていたが、それは仲間から酒がシコタマ振舞われ、

愚痴と歓声が辺りを埋め尽くしていった。

階下のルナ達の大騒ぎと、階上のカクとベルアーレによる床の軋み音で賑やかなこの夜は、いつまでも続くようであったが、それから数時間たつと、酒場のフロアにルナ隊の隊員は誰もいなくなった。飲み直しに行つた者、女を買いに行つた者、ギャンブルで運試しに行つた者、それぞれがこの一夜を存分に堪能しようとしていた。一人残つたルナも、もはやルナと確信していたが敢えて追求しなかつた髭面マスターから出された最後のグラスを飲み干すと、町に消えて行つた。最後の一杯はとても旨い酒だった。

パイロットの宿命で、作戦の前日に酒は飲めない。昨日は個々人が出撃に備えていたことだろう。今朝集まつた隊員は、漏れなく皆が戦士の顔に戻っていた。カクの眼も輝いており、新しい『機械』に出会つた時とは違つたその表情から、あの夜以降にベルアーレと随分とよろしくやつたであろうことが想像された。

最後の機体が格納庫から引つ張り出された。運搬員がシャフトを突つ込み、僅かなクランクを与えただけで、カクバージョンのリニアロータリーエンジンが唸り始める。そのままフルスロットルを与えると、たちまち離陸していった。

最初に離陸していたルナは、最後の機体が編隊のしんがりについてたことを確認し、空母への編隊飛行に移つた。満足げにタイガー・ルナを見送つたカクは、ルナの編隊を追うべく輸送機の離陸準備に取り掛かつた。

ルナ隊が空母への編隊飛行を続ける道程で、重く垂れ込めていた雲はみるみる晴れていく。それはまるで、隊員達の陽気さが空に届いたかのようであった。

「ルナ隊長、ベルアーレはカクの口説きに本当に落ちたかな？」
ブリタニアから来た腹心が陽気に話し始めたが、それにはドーバー戦役時代の勇士が応えた。

「落ちたと見るべきだな。タイガー・ルナの調子の良さが物語っている。」

「ベルアーレは俺に気があると思ってたんだがなあ。」

隊員達が苦笑する中、勇士がルナに話題を振った。

「いやいや、間違いなくベルアーレは隊長に惚れてたぜ。もともとはな。」

ルナが返事をする前に陽気な腹心が続けた。

「それだったら俺も引き下がるんだけど、オタク野郎のカクのどこが俺より良いって言うんだ？」

これにはほぼ全員が反応した。彼とカクの魅力の大小についてはない。

「待ってくれよ、カクの機嫌を損ねるようなことは言いつこ無しだぜ。どこで聞いているかわからん。」

「そうだよ、全く。奴なら聞いているかもしれねえ。」

「カクの場合、機嫌損ねると機体の性能も損ねちまうからな！困ったやつだぜ、整備の腕は天下一品なんだが……機嫌さえ良ければ！」

潮時と見てルナが話題を変えた。

「それよりこの機体、どうだい？」

「すげえ！ すげえの一言だぜ、隊長！」

「俺じゃない。カクのお陰だ。」

「カクの機嫌に俺達の命がかかっているとあっちゃ、ベルアーレにはよろしくやってもらわんとな。」

「切ないぜえ……。俺のベルアーレが……。」

「またベルアーレの話に戻っちまった。諦めろ！ 大陸にも良い女はいっぱいいるさ。」

「そんなもんかねえ……。」

部下との会話を適当に流しながら、ルナは慎重にタイガー・ルナの拳動を確認し続けていた。

「ちよっとおかしいな。」

独り言のようなルナの言葉にドーバー戦役以来の歴戦の勇士が応える。

「左右のエンジンパワーがじっくりせんな。左右のパワーを変えて操舵をサポートするシステムが、うまく機能していないのかもしれない。」

「そんなところだろう。個体差かもな。多分、カクが来れば空母上でも対処してくれるだろう。」

「俺の機は慣れで克服できるレベルだが、カクが直してくれるなら本来の性能が楽しみだぜ、隊長。」

「まったくだ。みんなはどうだ？」

「そうだなあ……、ベルアーレも空母に呼んであるんだよな？ 隊長。」

「呼ぶわけねえだろ。」

ベルアーレが如何にルナ隊と親交が深いとは言え、軍人ではない彼女を作戦行動に同行させるわけにはいかない。それは当然のことなのだが、何とかして連れて行くことができなければ、この後に繰り広げられる惨劇の中で、港町で起こる彼女への屈辱的な悲劇だけは避けられたらう。しかしながら、この時にそれを予想することは、王家の秘蹟を施されたルナを持つても不可能であった。

<続く>

編隊が空母に到着したのは、未だ日差しが強く、風も弱い時で、着艦には打って付けの条件だった。洋上には、一隻の空母を駆逐艦が輪形陣を取って警護している艦隊がはつきりと見られた。

「順次着艦する。行け！」

ルナの指令が飛び、各機が事前の打ち合わせ通りに降下して行った。どれもお手本のような着艦だったが、最後まで旋回して順番を待ったルナは、それらにも増して見事な着艦をやって見せた。これだけで空母の兵員は、今や伝説となったルナ隊がやって来たことを思い知ったことだろう。ドーバー戦役直後の頃は、ルナ隊は編隊飛行や離着陸だけでも羨望の眼差しを集めたものであり、今再びそれが成されたのだ。

着艦すると、パイロットを待機室に行かせ、ルナ自身は左右のエンジンの出力バランスについて、カクが空母に来てすぐに調整できるように、現象を纏めて書き置きた。その後、ブリッジに上がり、艦長に接見した。ブリッジに至る道すがら、空母の一部の兵員から集まる視線が単なる羨望とは言えない複雑なものであることに違和感を覚えたが、その原因を突き止める価値も手段も見出せなかった。それは放置された。

「遅かったですな、ルナ隊長。」

「すまん。至急整備に回さなきゃならんことがあったもので。」

「作戦直前にそんなことで大丈夫ですか？」

この艦長は、王国海軍の叩き上げで、ルナとは殆ど初対面であった。多くの軍人がドーバー戦役の勇士としてルナに好意を抱いているが、チームワークが命である海軍の中には、勝手気ままに行動するルナに批判的な将校もいる。この意味で、全ての臣民がルナを支持する

と言った王の言葉は外れている。

リモー艦長は、同時に艦隊司令官でもある。通常は司令官と艦長は兼任されないが、機動力を発揮すべき空母戦闘機群の艦隊として、迅速な行動のために特別に兼任制を採用しているのだ。故に、絶大な権限を持ち、極めて多忙な艦長が生まれたことになる。そして、この艦長はルナに批判的な軍人であった。救いは、それを隠そうとしないところか。

「リモー艦長、いや、提督とお呼びすべきかな？」

「海軍の軍人は『艦長』を好むことぐらい、ご存知でしょう？」

「ではリモー艦長、作戦の詳細をお聞かせ願いたい。」

「いいでしょう、お聞きになるのはあなただけで？」

「隊には俺から伝える。ブリーフィングを始めくれ。」

「海軍のシキタリでは、小隊長までにブリーフィングするのが常ですが。」

「それは通常の作戦だ。この部隊は数こそ少ないが、今回の作戦の中核を担っていると思っている。それなりの配慮が必要だ。」

「おやおや、作戦の中身を既に知っておいでのような発言ですな。」

ルナの鋭い視線がリモーを捕らえて何かを言おうとした時、臆したリモーが切先を制した。

「移動でお疲れでしょう。食事を先に済ませて頂きたい。ブリーフィングは今夜行ないます。」

リモーが入り口に控えている女性仕官に振り向き、指示を与えた。

「ルナ隊長を食堂にご案内しろ。ついでに艦内の説明もしてくれ。」

「はっ！ それではルナ隊長、ご案内致します。」 言いたいことは山ほどあるような気がしたが、ルナはリモー艦長に一瞥をくれただけで、女性士官に従った。

ルナと女性仕官は、一通り艦内を見終わって、最後に食堂に至った。

「隊員もここに連れて来たいのだが。」

「ルナ隊長。ここは上級将校専用の食堂です。一般の仕官の食堂は先程お見せした所です。」

「では、君はここにいてもいいのかな？」

「幸運です。伝説のルナ隊長とご一緒させて頂ける上に、上級将校用の食事が取れるなんて。」

「艦長は、君に食事をせよとは言われなかったぞ。」

「食事を取るなとも申されませんでした。」

「これがここの流儀なのだろう。とりあえず、暫くはここのシキタリに従うことにした。」

「旨いでしょう？ 海軍の食事は旨いものですが、上級将校用のメニューは逸品です。」

「悪くない。」

「特にデザートが素晴らしいんです。王宮にも上納しているのと同じアイスがあるんですよ。隊長はよくご存知なのですよね？」

「昔はよく食ったものだ。ブリタニアにはそんな贅沢なものはないが……」

ブリタニアで振るったルナの政治手腕は目を見張るものであったが、若い士官にとってそれは興味の対象ではなく、戦場でのルナの武勇伝に惹かれていたとしても止むを得まい。ブリタニアの話には興味を示さず、他に話したいことがあるのは明らかかな顔をしていた。

「伺ってもよろしいでしょうか？」

精一杯控え目に、しかしながら目を爛々と輝かせながら女性仕官が話し始めた。

「私を航空隊に編入してもらうことは可能ですか？」

「飛びたいのか？」

「はい。いや、艦内勤務でもいいんです。ルナ隊長の隊に所属したいのです。」

「なぜ？」

「あなたに一步でも近付きたいからです。」

リモー艦長のような部類は例外なのだろう。多くの者達は、この女

性仕官のようにルナを慕っている。

「俺の隊は、間違いないけども最前線にいることになる。戦闘の真っ只中に置かれるという意味を君は分かっているか？」

「隊長のように英雄の一員になるということです！」

彼女の目は一層輝きを増していた。このような若者が、空に海に、幾つ散っていったことだろう。生き残った者の多くも、殺戮の繰り返しに輝きを失っていく。事の重大さに気付き、心を閉ざすことで現実を受け入れるようになってしまふのだ。ルナにとって、いや、誰にとってもこれは耐え難いことだ。敵も味方も無い。女性であれば尚更のことである。

「……俺は、本来は指揮官に向かない。一人で空を飛んでいたいだけなのだ。そういう意味で、そもそも軍人にも向いていないのだと思う。」

「お手伝いさせてください。」

興奮しきった彼女は、立ち上がりらばかりの勢いでルナに噛み付いた。引き下がりそうにないので、諦めたようにルナは言った。

「発着艦要員が不足している。艦長に相談してみるが期待するな。」

「ありがとうございます！でも、発着艦要員って艦船要員では？」

「航空隊の人間が指揮を採らないと、発着艦はうまくいかんのだ。」

「分かるだろう？」

「はあ。」

女性仕官はどうやら分かっているようだが、ルナには分かったことがあった。

作戦内容と航空隊の状況を見極め、発着艦はスタンバイされねばならない。ドーバー戦役時のルナの空母では、作戦仕官が発着艦要員を統括していた。しかし、この艦では違うのだ。運用体制から見直すことになるとは思っていなかった。あの艦長とやり合っただけなら、変えさせなければならぬ。それはルナにとって非常に苦痛であった。そもそも、宰相レベルの官位を頂戴し、自ら作戦を立案して遂行するつもりだった。それが現状はどうだろう。ドーバー戦役時代のスタ

ツフの招聘は、最小限だと言わねばならない。整備士のカクやパイロットの多くが揃ったのは不幸中の幸いだが、艦内スタッフが殆ど揃っていない。

前途多難だが、王国の将来を誰よりも憂いでいるのはルナであった。また、本人の認識は兎も角、状況に応じた行動こそが、彼の持ち前でもあった。

「名前を聞いておこうか。」

「失礼しました。フェルチアと申します。」

<続く>

ルナがりモーとの不愉快な会話を切り上げてフェルチアに艦内を案内されていた頃、一機の輸送機が空母への着艦コースに入っていた。戦闘航空隊にやや遅れて、カク・サンカクが山のようなパーツ群とともに到着したのである。空母から発着できる飛行機としては、限界ぎりぎりの大きさを持つ輸送機は、図体の割に華奢に見えるフックを甲板のワイヤーに引っ掛けて停まった。すぐに書類を携えて甲板に降り立ったカクは、発着艦ブリッジに入ったところで甲板仕官に迎えられた。

「配属指令書を提出してください。」
事務的ではあるが、何物も見逃すまいとする鋭い視線がカクを見据えていたが、当のカクは気にもとめない。というよりも、他に興味の対象があり、仕官の言葉など上の空の様子であった。書類を仕官の机に置きながらも、カクの視線は辺りをさまよい続けている。甲板仕官はカクの振る舞いを怪訝な目で見てはいたが、役目の遂行に徹することに余念は無い。

「ルナ隊整備士、カク・サンカクですね。」
「ああ、そうだよ。この船の外装は炭素繊維の表面に金属加工したハイブリッドコンポジットらしいね。」

「輸送機の積載物は、書類に記載されたものと相違無いですね？」
「タイガー・ルナは、駆動系を含めて八割以上が炭素繊維さ。原型機より二割は使用率が上がっていて、エンジン一機分は軽量化したんだぜ。」

「ウチの監査係がこれから輸送機を検めます。立会いますか？」
「そうだね。確かにそれでエンジン一機分ってのは少ないよね。悪かったよ。二割ってというのは、部品点数の比率で、重量比率じゃな

いんだよ。いや、騙すつもりじゃなかったんだ。」

「輸送機の他の搭乗員は中で待機中ですか？」

「それよりさ、この艦のエンジンは共鳴式の加給機が付いてんだっ
て？ 見せてよ、是非！」

最新式の空母に来てカクの目は輝いていたが、あまりに話が噛み合
わないので、甲板仕官は会話の継続を断念した。

「ルナ隊長からご伝言を預かっています。何でも旋廻補助機能の同
期がうまく行っていないとか。詳しくはこのメモを見てください。」
仕官が取り出したメモをひたたくってカクが吼えた。

「大したもんだよ、隊長は！ エンジン出力の個体差を吸収するソ
フトウェアの開発に手間取ってね。諸元表のスペックだけで調整し
たんだ。当然の結果だけど、誰でも気付くレベルじゃないものを！」
甲板仕官は既にカクの話聞いていなかった。部下に輸送機の臨検
を指示し、カクを先に到着していたルナ隊の隊員が待機している部
屋に案内しようとした。

「いいよ、別に。先に格納庫に連れてってよ。すぐにタイガー・ル
ナの調整を始めるから。」

既に何を言っても無駄と悟っていた仕官は、言われるままに格納庫
に向けて歩き出したが、カクの口は未だ止まらない。

「調整ソフトはもう完成しているんだ。どんな誤差も見逃さない精
度さ！」

カクは、彼の言葉に耳を貸さず無言で先を急ぐ士官の背中を捕まえ
て振り向かせた。驚いた仕官は無視した無礼を謝罪しようとしたが、
カクの顔が笑っているのを見て、何も言わずにカクの次の言葉を待
った。

「この船のエンジン、動力室を見せてくれるよな？」

仕官は溜息が出てしまうのを止められなかった。

「艦長の許可が必要です。ルナ隊長経由で申請してください。」

もう甲板仕官が振り返ることはなかったが、カクの口が閉じられる
こともなかった。

「隊員諸君。」

ブリーフィングルームの壇上から、ルナが呼びかけるように話しはじめた。彼自身が昨夜受けたブリーフィングを咀嚼し、隊員に伝えるのだ。三十九名の航空隊隊員と航空隊直属の六名の甲板要員が神聖な面持ちで聞いている。二十名を越える艦所属の甲板要員は後方で静かに座っており、整備スタッフは壁面のベンチから眺めている。「所属の違いはこの際無視しよう。皆のベストパフォーマンスのみが作戦を成功足らしめる。」

航空隊所属の甲板要員には、先般ルナ隊への編入を希望した女性士官、フェルチアも含まれており、感激の余り涙目になりながらルナを見つめていた。

「では副隊長、説明を頼む。」

ドーバー戦役の時に副官を務めた歴戦の勇士が、ルナに変わって壇上に上がった。

「戦友諸君、機は熟した。」

本来、彼の方がルナより指揮官には向いているのだろう。如何に歴戦の勇士とは言え、皇族の血統を継ぎ王家の秘蹟を受けたルナには、パイロットとしての腕は劣るだろう。それでも、通常のパイロットとしては、限界地点にいるのは間違いない。彼をはじめ、ドーバー戦役時代のパイロットが殆ど参集したのは幸運と言うべきかもしれない。増強したパイロットもその多くがブリタニアから召集した兵であり、ルナに鍛えぬかれている。航空編隊としては、磐石と言えるだろう。

「我が空母戦闘群は現在、北方の海域に向かっており、明日未明に出撃する。」

ブリーフィングルームの空気が緊張に包まれ、それを確認してから副官は続けた。

「王国は神聖同盟に対して、既に北方の半島に配備している爆撃隊と陸上部隊で二面攻撃をかける。我が隊は、爆撃隊の先導防衛と、

地上部隊の防空援護を担当する。地上部隊の援護には、敵地上防衛部隊をかく乱し、友軍の侵攻支援も含まれる。」

静まり返った室内に、空母のメインエンジン音が低く響いている。「第一から第四編隊は爆撃機援護にあたり、ルナ隊長が指揮する。」

第五から第七編隊は地上部隊支援で私が指揮する。第八編隊は艦隊防衛として旋廻飛行にて警戒待機。」

副官がルナに視線を送って締めを促した。

「艦隊勤務者にはこの後に俺が個別に詳細を説明する。航空隊の編隊長は残って副官から詳細の説明を受けること。何か質問は？」

隊員の昂ぶりに艦が応えるかのように、エンジン音が高まった。いよいよ作戦海域に向け、加速したのである。

「隊長！」

ルナ隊に編入したフェルチアが起立して発言を求めた。ルナが手を振って続きを促す。

「今回の任務でも作戦中に補給が有り得ます。給油装置が新型になっている関係で、給油手順の見直しが必要です。ご説明しますので検証して頂けませんでしょうか。」

ルナと副官は顔を見合わせた。ひよっとするとこの女性仕官は拾い物だったかもしれない。

「良からう。補給要員も同席させるか？」

「それが望ましいのですが、連日の訓練で疲弊しておりますので、私だけで結構です。」

「よし、詳細のブリーフィングの後に行なう。」

「イメージもありますので、後部右舷の甲板倉庫までお出で頂けますか？」

「分かった。こちらが終わるまでそこで待て。後で倉庫まで案内してくれ。」

「はっ！」

ルナはフェルチアの敬礼に頷いて応えてから部屋を見渡し、締めくくった。

「他に無ければこれで解散。作戦は五時間後に開始する！」

<続く>

空母という船は、とにかくでかい。右舷倉庫までフェルチアに連れられて歩いているルナと副官は、自分達だけで仕官室に戻られるか少し不安になっていた。倉庫に入り、奥の機密室に向かいながらフェルチアが話し始めた。

「本艦の給油ノズルは固定式じゃないんです。」

倉庫に詰めている兵員には、フェルチアがルナと副官をこんな所に連れて来たのを訝しく思う者もいたが、フェルチアが給油装置の話の説明しているのを聞いて、納得顔をしてそれぞれの持ち場に意識を戻した。話しながら気密室の扉を開けて中に入って行くフェルチアを、ルナと副官が追った。

「このノズル部分が動くということは……」

フェルチアは、副官の腕を引っ張ってルナと副官を気密室に入れるや、気密室の扉を締めるボタンを押した。機密室の中が三人だけなのを確認して、彼女は話を続けた。

「充分に注意する必要があります。」

フェルチアの視線が扉の閉まったことを確認しながら、今までとは声色が全く違ったトーンになっていた。

「こんな所までお呼びたてして申し訳ありません。他の誰にも聞かれるわけに行かなかったものですから。」

突然の変化を怪訝に思いながらルナが問い掛けた。

「何の話をしている？」

「この作戦に疑問は感じませんか？」

「俺は今、軍人だ。作戦に猜疑心を持つことは許されない。」

「ですが、この艦のスタッフは怪しいです。」

話が繋がらないことへの苛立ちを目に現したルナを見て、副官が割

り込んで来た。それはフェルチアを咎める類のものではなく、並々ならぬ雰囲気を感じ取ったために話を続けさようとしてである。

「構わんさ、ありのままに話せ。ルナ隊長は俺が抑えてやる。」

ルナは、フェルチアが話し易い雰囲気を作ってくれた副官に感謝の目配せをし、彼女が話し出すのを待った。

「リモー艦長は宰相派です。そして、宰相は隊長が王国に帰還したことを喜んでいません。理屈もさることながら、彼等は隊長が嫌いなんです。」

自分の考えを他人に披露するというのは、子供の時に人前で歌う時に感じた気恥ずかしさにも似たものを伴うものだ。それが軍隊の上官相手とあつては、その気持ちは一層強い。ルナは、彼女が深呼吸をして話の続きを整理している様子を見て、上官相手に萎縮してはならないという強い意志を読み取った。それだけの事態を訴えようとしているのだろう。

「確かに、今回の作戦に隊長は必要で、それは誰もが認めるところです。ただ、この作戦の後は分かったものじゃありません。」

「と、言うこと？」

「捨て駒です。隊長の航空隊は、相当な戦果を上げるはずですよ。でも、ドーバー戦役のような武勇伝を残してもらっては迷惑なんです。」

「ルナ隊長が迷惑だつて？」

「私じゃないです！ 宰相派としては、隊長のドーバー戦役の武勇伝を汚し、今回の作戦は成功させ、そして作戦後にはいなくなつてもらいたいのです。」

国を挙げての作戦であつたドーバー戦役、あの時は作戦を立案した宰相派が、無能を曝け出す結果になつた。ルナに支えられて成功裏に終わったのだが、それはルナの功績であつて、宰相は『所詮、軍務には向かない』というレッテルを民から貼られたのだ。宰相と連携して作戦を遂行していた軍部についても、その威信は失墜したと言える。あの屈辱、ルナは気にもとめていないが、宰相や軍の統帥

が忘れるはずもない。彼等には名誉を挽回する必要があったのだ。そのためには、フェルチアが言うような結果を残すのが最も望ましい。副官はそういった経緯を理解しているが、そもそも名声や肩書きに無頓着なルナには、理解が及ばない。邪魔者扱いされたことに對して単純に血が昇って来たルナを副官が再び制した。

「それだけ影響力があるってことさ、気にするな、ルナ。」

説明してルナを納得させるのは至難の業だろう。そこは付き合いの長い副官らしく、うまく凌いで見せ、フェルチアの次の言葉を待った。

「ここからは私の想像なんですが、この艦隊、変です。」

「そろそろ核心に進んでくれ。」

「あ、はい。すみません。兵装と燃料のバランスが作戦に合致しません。空母部隊なので、対空兵器を搭載しているのはいいのですが、対陸用の砲弾が多過ぎます。」

「そうなのか？ 確かに、我が航空隊の今回の任務は、対地攻撃と陸上部隊の支援だ。艦隊は航空隊の補給と対空防御に徹するべきだ。しかし、どれくらい多過ぎるんだ？ それにそれだけで何を疑うんだ？」

副官の指摘は正しい。

「艦が搭載できる兵装なんて限られています。目的以外のものを積んでいく余裕なんて無いんです。航空隊が出撃中の時のことを考えれば、対空兵器はいくらあっても充分とは言えません。それに燃料も納得がいきません。陸上部隊が侵攻するんですよ。侵攻後に入港して、補給船が来るのを待っていけばいいんです。最悪を考えても、王国に帰還できるだけ積んでいけば充分のはずです。」

「続けてくれ。」

「次の作戦があると思えるくらい、大量に、いや、満タンです。予備燃料を含めて。」

「よし、そこまでは分かった。それで、何が起ころう？」

「待ってください。これだけじゃないんです。艦隊編成も不自然で

す。巡洋艦がいません。」

「空母の防衛なんだからいいじゃないか。対空も対潜も、小回りが利く駆逐艦が有利だ。」

「神聖同盟の海軍は王国に比べ弱小ですが、戦艦の比率が高いんです。潜水艦が来ることなんてあまりないと思います。」

「こういうことか？ この艦隊は、対地攻撃を想定した別の作戦を次に控えていて、その前に他の巡洋艦艦隊と合流するだろう、と？」

「そうです。」

「かもしれない。だからと言って……」

興奮したフェルチアが遮った。

「隊長の航空隊に次の作戦は無いと考えるべきです！」

「何でそうなるんだ？」

「隊長は次の作戦を聞いていないんでしょう？ それに、航空隊だけ上陸するのなら、タイガー・ルナの補給はどうするんです？」

「そうだった。タイガー・ルナと呼ばれるカクバージョンの高性能版タイガー・シャーク2は、規格品の補給では賄えないのだ。」

「整理させてくれ。ルナ、お前も良く聞いていてくれよ。」

副官が順を追って纏め始め、ルナもフェルチアも静かに耳を傾けた。

艦隊の編成や装備から類推すると、この艦隊は今回の作戦の後に別の作戦を計画しているものと思われる。そして、ドーバー戦役からの経緯を考え合わせると、今回の作戦の中でルナ隊排斥の目論見があると思われる。それは、次の作戦についてルナが何も知らされていないという事実裏付けられている。作戦としては、各々の実行部隊に役割が与えられるのであり、その実現手段は航空隊等の実行部隊側で考案する。次の作戦があるなら、それを考えるために、ルナに役割を与えておかなばならない。それが無いということは、ルナの航空隊は次の作戦における役割が無いことを意味する。同時にそれは、次の作戦ではこの空母にルナ隊ではない別の航空隊が配属されるということも物語っている。つまり、ルナ隊は行き場を失うのだ。占領地区に転属しても、専用部品の補給を要するルナ隊は、

そこでは活動できない。消えて無くなれ、と言っているようなものである。

「リモー艦長は知っているはずですよ。はっきりさせましょう、隊長！」

ルナは迷っていた。今回の作戦を成功させ、この艦に帰還すれば良いだけとも思う。そうすれば、宰相派は何も言えまい。いや、空母が夜間に消灯して移動してしまうと、帰還できないかもしれない。王に確認すべきか。いや、王とて怪しい。親父ではないかもしれないのだ。

「こうしよう。君はタイガー・ルナに、目一杯燃料を積んでくれ。補助タンクも付けて。」

「空母を探すことになった時のためですか？」

「そうだ。空母まで帰って来られれば、着艦はさせてくれるだろう。」

「ルナ、俺からリモー艦長に探りを入れてみる。」

副官の提案に、待て、と言いかけて、やらせることにした。自分が行っても、リモーとは衝突するだけだろう。

「頼む。」

フェルチアにも言い添えた。

「君もな、頼むぞ、燃料。」

副官と女性仕官が気密室から出て行った。

本当にこんなことがあるのだろうか。ルナはその場に座り込んでしまった。

艦長はブリッジにいた。

「艦長、人払いを。」

怪訝な目でルナの副官を見たりリモーが応えた。

「私の部屋に行こう。ちょっと休もうと思っていたところだ。副艦長、暫く頼む。」

「はっ！」

二人はブリッジから出て、艦長室に向かった。広大ではないが、艦の中という意味で、艦長室は十分に広い空間である。新造艦ではあるが、クラシカルな装飾を施された艦長室は、激務の艦長が唯一休める空間を演出していた。

「ルナが気付きました。いや、気付いたと思うべきです。」

「なぜだ!？」

最も冷静さが求められる艦長職の人間の部屋でされる会話としては、この感情の起伏の大きさは不似合いである。しかし、防音処置が行き届いていて外に会話が漏れ出る心配が無いという意味では、適切な場所であった。

「ルナ隊に編入させた女性士官がいますね。あの小娘、大した奴です。」

「ルナは出撃しないのか？」

「するでしょう。作戦終了後、この艦が移動していても探し出せるように燃料の追加を指示していました。」

「良からう。それでは、このまま進めるとしよう。ところで、貴様がここに来た理由をルナにはどう説明するのだ？」

副官は、なるほど、と思った。裏切りとはこういうことなのだ。分かってはいたし覚悟もしていたが、もう二度と誰からも信用されることはあるまい。ドーバー戦役の時、たった二十機の戦闘機で、百機の神聖同盟編隊に突入した。ルナは勝てるかと断言していた。それだけの訓練を積んで実力を身に付けたのだから心配するな、と。それでも無謀に思えた。結果的には味方に損害は出なかったのだが、あの時の恐怖は忘れられない。四方八方から迫る砲弾や銃弾。その合間を縫って突撃して敵機を撃墜する。撃たねば殺される。命令でもあった。しかし、自分を殺そうとしている敵とは言え、照準機の方こうで引き裂かれていく敵機の乗員達。断末魔の悲鳴が自分の生への執着と同じ重みで伝わって来る。それは音声ではなく念波として押し寄せるので、周囲の轟音もかき消してはくれないし、耳を塞いでも途切れる事は無い。あるいは、目を閉じれば遮断できるのか。

しかし、それは同時に自らの命を敵にくれてやることを意味する。もうたくさんだと思った。ルナに付いていく限り、こんなことが続くと考えた時、途方も無く彼が許せなくなった。もう繰り返してはならないという思いが頭を締め、何かをしなければならぬという衝動に突き動かされた。その結果、今は宰相派の隠密としてルナ隊に身を置いている。ルナを排除したとしても、あの時のような出来事はなくなるまい。事実、王国は戦争を始めようとしている。他人は自分のことを短絡的だと笑うかもしれない。信用されることももうないだろう。それでも、何かをせずにはいられたのだ。後悔はしていないし、するつもりもない。自分なりの気持ちの整理を付けて、再び意識を現実に戻した。

「貴方に直接会って真意を確認しに来たことにしてあります。作戦上の機密に触れるので多くは話してもらえなかったとも言っておきます。」

「そうだな。くれぐれも大事にな。」

「心得ております。」

そこで思い出したようにリモーが付け加えた。

「それと、ルナ隊の離陸後だが、艦に残ったルナ配下の艦船スタッフは……」

「消します。」

リモーと副官の会話は、フェルチアが副官に取り付けた 気密室に招き入れる時に腕に取り付けた 盗聴器から、ルナの耳にも届いていた。

< 続く >

ルナの航跡 16

第3章《出撃》（5/5）

ルナ編隊のシンガリが離陸し、甲高いエンジン音を残して夜空に紛れていった。未だエンジン音が聞こえる時点で、ルナ隊の艦船要員は、フェルチアに導かれて気密室に駆け込んだ。そして、気密室の扉を中から固定し、部屋の中の非常ハッチから舷側に出た。そこには救命艇が吊るされていた。この動きの速さといい、盗聴器の件といい、フェルチアの振る舞いが機敏に過ぎ、そして気転がきき過ぎていた。新規に配属された士官であればこそ、でき過ぎた人間を怪しむ者がいても不思議ではない。しかし、扉を固定してから五分もしないうちに、リモーター派の戦闘員が気密室の扉を叩いたのは事実であり、その緊迫感がルナ隊から彼女を疑う余裕を奪った。敵と仲間をただちに見極める必要に迫られており、仲間は多い方がいい。疑い出したらキリが無いのだ。結果的に、この判断は正しかったと言える。

ルナの憂鬱は極限に達していた。

両翼に吊るされている増装は爆弾ではなく、燃料を積んだ補助タンクである。眼下に北方半島の稜線が、町の明かりでうつすらと浮かび上がっていた。

突如としてルナの乗機が編隊から離れ、副官乗機の後に付いた。副官が危険を察知する間くらいはあったかもしれない。あつという間に副官の機体は、ルナ機から発せられた『何故だ』の思いと『理由は関係ない』という二つの思いを伴った銃弾に引き裂かれ、漆黒の海に消えて行った。

このような裏切りがあった場合、ルナが副官を処刑するという結果は、理由によらず変わらないだろう。しかし、今後のルナの成長

を考えると、その理由を質しておくべきだった。若さもあるに違いないが、臨機応変で対処が迅速な指揮官というのは、こういった拙速に走るといふ側面も併せ持つ。人は万能では無いのだ。

スローモーションのように落ちていく副官の機体を見る各機が、身震いするのをルナは鮮明に感じ取っていた。これからが難しい。ルナは自機を全機の後方に位置付け、通信回線を開いた。

「俺は信用していた。あいつとはドーバーより前からの付き合いだった。」

副官だけがリモ派だったとは考えにくい。他にもいるはずだ。誰も反応しない。

「去る者は去れ。追ったりはしない。ヤツの仲間でなくとも、俺に付いて来るのが不安なら去れ。」

誰も応答して来ないし、編隊を乱す者もないので、更に畳み掛けてみた。

「暫く俺は国賊だが、本当にいいのか？ 去らずに俺の配下に残るのなら、その後に裏切った者に容赦はしない。パイロットであつても、荣誉ある機上の死を期待するな！」

それでも去る者はいなかった。本当だろうか。信用していいのだろうか。信用できないなら全員を撃ち落とすしかないが、たつた今、旧知の仲間を撃墜して疑うことに疲れ果てていたルナに、その選択肢は有り得なかった。

「分かった。俺の作戦に歓迎する。付いて来い！ 決して後悔はさせない。」

ルナは敢えて先頭を飛び、後を隊員達にさらした。一旦信用して見せた限りは、疑いが残っていると感じさせてはならないのだ。一機だけ減ったルナ隊が、北方半島とは異なる方向に静かに進路を変えた。

離陸前に、緊急用の極秘通信で斥候であるブルータスに連絡してある。ブリテン北方の過疎地で、我々を待っているはずだ。だが、

あの副官がリモー一派だった。ブルータスとて信用して良いものか。いや、信用しよう。キリが無い。

フェルチアは逃げ果せただろうか。彼女が空母でリモー派に捉えられていたとしたら、我々の行き先や彼女との合流予定地に、王国の軍隊が待ち受けていることになるだろう。しかし、これも信用しよう。彼女は脱出に成功したと。

さて、フェルチアがうまく脱出したとして、リモー派はどう動くだろうか。俺達の編隊が作戦から離脱したことに気付くのはいつだろう。攻撃に参加しないことが共同攻撃する部隊の現場から報告されてからか。もっと前に気付くことは有り得るか。……有り得る。編隊が出撃に際して搭載したものは、殆ど燃料だけだ。爆弾は積んでいない。これだけでバレルには充分だ。艦隊防衛用に残っているはずの第八編隊が近くにいないことに気付くのが先か。いずれにせよ、もう察知されたかもしれない。

では、俺達は見つかるだろうか。……見つかるのは間違いない。それがいつか、の問題だ。搭載燃料はすぐに割り出せるし、それで到達できる範囲の算出も容易だ。その範囲内で、俺達が着陸できる所はそんなに多くは無い。今が真夜中なのは幸いだ。搜索には、リモーの作戦に直接関係しない者が投入されるはずだ。すぐにかき集めたとして、実際に搜索に出られるのは、夜明け以降になるだろう。それでも、夕方には探り当てられると思った方が良い。王国の軍人は、官僚的とは言え優秀なのだ。

また、ブリタニアは諦めねばならないだろう。俺に拠点を築かせないために、王国はすぐに軍を派遣するに違い無い。ただ、ブリタニアは恐らく抵抗しないはずだ。その方がいい。犠牲は最小限になる。ブリタニアの統領がうまくやってくれることを祈るしかないが、彼はやってくれるはずだ。

兎にも角にも、ブルータスからの情報は正しかったと判断せざるを得ない。こうなれば、現国王の正体を暴き、宰相派を駆逐するまでやり果せなければならぬ。

ルナの憂鬱と熱い決意を載せて、そして部下の計り知れぬ不安とともに、彼の編隊が低空を飛び続けている。闇夜を低空で編隊飛行できる彼等の高い操縦技術も、それが彼等の心を晴らすことはなかった。

「どうしたんだ？ 出て来い！」

リモーが気密室の外から呼びかけた。気密室の中には、甲板用の暖房で暖められた毛布が、ここに逃げ込んだ人数分置いてあった。外にいるリモー達は、熱源が部屋の中にあることから、ルナ隊の要員が中に立てこもっているものと誤解した。但し、それも毛布が冷えてしまうまでの間だけだが。

「扉を破壊しますか？ 艦長。」

「大事な艦だ。燃料に引火でもしたら大事でもある。出られないなら、ほうっておけ。」

「は！ 扉の前に監視兵を立てます。」

「それで良い。……奴等は出られないのだな？」

「はい。部屋の中に非常ハッチがありますが、これは外からの施錠です。中からは開きません。」

「そうか。非常ハッチはいつもカギがかかっているのだな？」

「気密室では通常は施錠されています。この非常ハッチを空けるのは、よっぽどの緊急事態か、清掃の時くらいです。」

「そのハッチはどこに繋がっている？」

「舷側の救命艇の横です。」

「気密室の掃除担当は？」

返事が来る前にリモーは走り出していた。走りながら、周囲の海兵にどなった。

「救命艇を確保しろ！ 手動で降りているはずだ！」

別の海兵にも立て続けに指示を出した。

「上陸艇準備！ 緊急出動だ！ 救命艇が離艦していた場合、見つ

「け次第撃沈しろ！」

武装した海兵が救命艇を掲揚するリフト付近に到着した時、リフトは下がっており、救命艇は見えなかった。海兵はリフトと救命艇を求めて海面を覗いたが、そこにはリフトだけが波に洗われていた。そして、遠くに離れていく救命艇を確認した。

「報告！ 救命艇は既に離艦しています。方向は……」

上陸艇が出撃の準備を終え、ハッチから出て行った。だが、それは無駄になるはずである。偵察任務をもこなせる救命艇に、上陸艇は追いつけない。

リモーはブリッジに戻って、索的用の軽飛行機を上げ、救命艇を攻撃させる準備を進めていた。しかし、離陸とともに索的機はエンジンが停止し、海面に落ちてしまった。

「……カクの仕業か！」

リモーの怒鳴り声が空しく響いた。

「もう大丈夫です。」

フェルチアが誰にともなく言い放った。

あとは、ルナとの合流地点に進むだけである。そんな安堵感からちよつと心に余裕ができたのか、彼女は周りを見渡してみても、一様にふさぎ込む隊員達に不安を覚えた。カク・サンカクだけは、電気信号だけで操舵を管理する最新式の操舵システムに夢中で、操舵室に閉じこもって何やらごそごそとやっていたが、他には誰も動こうともしない。

「みなさん、どうしたんですか？ もうリモー艦長は我々に手出しできませんよ。安心してください。」

誰も返事をしない。考えてみれば当たり前かもしれない。リモー艦隊は、軍の統帥の直轄で王国を上げた作戦に従事していたのである。王国の臣民は、臣民で有ること自体にアイデンティティとプライドを持つ。増して彼等は軍人であり、その傾向は一層強い。

「反逆者……」

この言葉が船内に重くのしかかっていた。

「隊長を信じられないのですか？」

フェルチアは、彼女なりの熱意で以って、仲間の不安を取り除こうとした。しかしこれはそういう問題ではない。

「心配するな、小娘。」

いかにも熟練といった甲板要員が応えた。

「事の重大さに、心の準備に時間がかかっているだけだ。もう後戻りはできないしな。」

後戻りなど考えられない。反逆罪に問われた者の末路は、想像するのも憚られる。

黙り込む隊員を乗せた救命艇が、夜明けが近くなって水平線と空の境界がうつすらと判別できるようになった海を疾走して行った。

<第3章終わり 4章に続く>

第4章《錯綜》（1/4）

男は半地下の広い部屋の中で眠っていた。贅沢ではないが、日々を送るために必要なものは全て揃った部屋である。明るい色調の壁や毛足の長い絨毯からも、傍目にはこの部屋が男を幽閉する為の牢だとは見えない。広間と区切られた寝室には、天井近くに格子がはめられた小さな窓があった。そこからは一日に数時間しか陽が差し込まないが、窓の小ささも格子も、王宮の中の部屋という意味では珍しくはない。天井からぶら下がっている照明達は、男が眠っている間は灯を灯してはいないが、簡単ではあっても装飾が施されており、陰鬱な雰囲気を感じさせるものではなかった。

その小さな窓から差し込む朝日が男を目覚めさせた。ベッドに横たわったままの虚ろな頭で、毎日繰り返され、そして今日も繰り返されるであろう一日に思いを馳せた。いつものように、間も無く彼がやって来るだろう。そう思った矢先、男の部屋に近づく足音が響いた。機敏ではないが億劫な様子でもない、ゆっくりとしているが着実さを匂わせながら、男は立ち上がった。そして彼を迎えるべく上着を羽織って広間に添え付けられた食卓の椅子に座った。そこにはいつものように、質素ではあるが温かみのある朝食が並べられていた。

「王国は、いや帝国や神聖同盟も含め、状況は混乱を極めております。」

男の部屋に入ってきて来て来賓の椅子に座ろうともせず、彼は立つたま唐突に切り出した。

「恐らく、ルナ殿は持ちこたえるでしょう。彼が既にリモー艦隊から離脱したとの報告も入ってきております。しかし、大陸北方の王

国領土の喪失は決定的です。そしてついさつき、私はブリタニアの殲滅作戦に署名して来ました。本当にこの状況はあなたの望んでいたもののですか？」

食卓の椅子に腰掛け、朝食を食べ始めていた男は、問い掛けに一端は動きを止めたが、再び並んだ食事に手を伸ばしながら応えた。「取り返しの付かない犠牲を強いることになった。」

そんなものなのだろうか、と彼は憤慨した。想定外の犠牲？ それだけで済まされることではないはずだ。なぜなら、臣民の生命と財産を守るのは、国王の最低限の責務ではないか。それをするために『王』という職務があるのではなかったか。彼は更に詰め寄った。

「この先にあなたの望む結果が導き出されるとお考えなのですね？」この部屋に閉じ込められ問い掛けられているのは本当の王であり、この部屋を訪れて問い詰めているのは偽りの王である。

「皇帝が今の状況を想像していたわけではなからう。それは確かだ。未だ余地はある。」

「本当にそうでしょうか。私には皇帝が恐ろしくなりません。皇帝は全てお見通しなのではないかと考えてしまいます。」

「そうかもしれん。だが、それなら宰相達が黙ってはおるまい？」宰相派はもはや制御不能です。ブリタニアの殲滅作戦についても、私のサインは形式上のもので、私の意見など入る余地はありませんでした。」

「そうか。しかし、それは奴等の暴走と考えていいだろう。皇帝の指図ではないな。」

「それはそうでしょう。そして、宰相派の暴走を止められなくなっているのも事実です。」

ブリテン国王は粗食である。彼はそれも真似た。顔も素振りも、何もかもが瓜二つになった。傍目には同じ人間が鏡と会話しているように見えるだろう。多くは兎も角、血縁であるルナや王子までも騙し通すために、王の複写は徹底的に進められた。皇帝のもとでの訓練の日々。宰相達を交えた仕上げの時期。そして、本当の王を

拉致して観察し続けた。あれは何のためだったか。皇帝の野望を成し遂げるため、身も心もささげたのではなかったか。ところが、この王の人間性に惹かれ、宰相達の近視眼的な私利私欲に嫌悪を覚えた。対応に窮した時のためと本当の王の処刑を止めさせた時から、自らの野望が目覚めたのである。生殺与奪の権限を握りながら相手を頼る者が頭を垂れ、囚われの身でありながら権威をふるう者が粗食を旺盛に啄ばむ。そんな不自然で非常識な図柄は、二人の王が同一と見まがう外見を持ちながら、内面では極端な両極性を有しながら並存する、といった有り得べからざる構図を端的に現していた。

「一つ知恵を授けよう。」

食事の手を再び止めて、本当の王が語りかけた。

「王子だ。あれは切り札になる。貴様のためにも、王国のためにも、な。」

「しかし、どうやって……。」

もはや話を聞いてもらえなかった。朝食は大事な儀式なのだ。これ以上の邪魔立ては許さないという威圧感が偽りの王を圧していた。

「善処します。また、明日も参ります。」

偽りの王は男の部屋から退出した。

部屋に残された王は、粗食をついばみながら溜息をついていた。

王を演じるあの男も、『王家の秘蹟』に毒されようとしているのか。玉石によってもたらされる力、それは王家の正当性を示すものとして長く敬われて来た。しかし、この王はその本質に気付いたのだ。五感を研ぎ澄まし、第六感を発動させる。そう信じられている王家の力は、実はそんな綺麗事ではない。人の心、それを食って玉石は生きているのだ。人から溢れ出る心の力とは、邪心に他ならない。良心はその人の中で昇華されてしまうものなのだ。よこしまなものやあくることのない欲望、妬み、暴力、体内から溢れ出たこういつた思いが玉石を力付けている。玉石からすると、良心に司られる世が現れてしまうと、自らの存在を否定されることになってしまうのだ。これを防ぐために為政者に力を与え、争いの絶えない絶望の世

界を作り出すのが、玉石の意思である。人間の根本的な欲望である性欲を極限まで高める『王家の秘蹟』。その隠微な儀式によって、王族は玉石に力を与え続けて来たということだ。この王の鋭い直感には玉石の意思と通じ、そしてそれを拒絶した。秘蹟の放棄である。しかし、こんなハナシを誰が信じるだろうか。時間を掛けて、そして確実に玉石の排斥を試みようとしていた矢先、宰相派の謀略にはまった。それ自体が玉石の介入によるものなのかどうかは分からない。そして今、王の職務はあの男と宰相派によって遂行されており、彼等に玉石の手が伸びても不思議ではない。究極の破壊兵器が、玉石の力を用いて開発されたとも言ふ。その兵器が発動した暁には、数多の欲望と怨念が渦巻くことになり、玉石の腹は大いに満たされることだろう。本当に取り返しが付かない事態が迫っている。ヤツなら、ルナならこの事態を收拾してはくれまいか。この期待は、為政者として、いや元為政者として、親心に政治力が曇った愚かな思いなのか。

そんな真相も知らず、部屋を出た途端、偽りの王は国王の威厳を振る舞いに付け加え、国王としてモノを考え始める。庶民の出とは言え、優秀な為政者の要素を持った男なのだ。本当の王は、答えをくれなかった。しかし、国王としてモノを考えれば、自ずと答えは見えてきた。宰相派は所詮官僚でしかない。国王だけが持つ権限、国王なればこそ揮える力、それらを駆使すれば、宰相達との関係を逆転させることは可能なはずだ。王室に急ぎ戻った王は、親衛隊の隊長を呼んだ。

「陛下、お呼びでございますか。」

椅子にちよつと体を傾けて座るいつもの姿勢で、王は親衛隊の隊長を手招きした。この仕草が重大な任務であることを意味する。

「王子を幽閉しろ。親衛隊が哨戒すること。」

ことの重大さに隊長の顔がわずかに引きつったが、すぐに承諾した。「はっ。王子殿を幽閉致します。」

下がろうとする親衛隊の隊長を王が呼び止めた。

「面会は許さん。しかし、扱いは丁重に、な。」

「心得ております。」

「親衛隊として、余の警備にも余念がないように。」

王の身に危機が迫っていることを悟った親衛隊の隊長は、丁重に頭を下げて了解の意を現してから踵を返した。親衛隊独特の服装が王室から出て行くのを見つめながら、王は自問自答した。

これでいいはずだ。親衛隊に守らせておけば、宰相達は王子に手が出せない。宰相達が自分を抹殺しても、王子が健在な限り彼が次期国王になるので、宰相達が勝手な王を立てるわけにはいかないはずだ。

さて、次はどう手を打つか。宰相派の出方を見て……いや、後手に回るわけにはいかない。王国は崩壊の危機に立っている。立て直すには……。

王室で一人、思案に耽る王は、国王の責任というものの重さを味わっていた。

<続く>

第4章《錯綜》(2/4)

「無礼であろう！」

親衛隊に引き立てられている王子は、手錠こそはめられていないものの、問答無用の連行であり、囚人の扱いを受けていることに憤慨していた。それでなくとも彼には不満が鬱積していたのだ。王は、王国を上げた行動を起こそうとしている。秘密裏に進められていて公表はされていないが、王子にもそんな雰囲気は伝わって来る。こういった国の一大事に、彼は蚊帳の外に置かれているから面白くない。最早子供ではない。王子としての役目をもらえば、それを果たす自信はあつたし、そもそも王子不在では国威が高揚しないと彼は考えていたのだ。王子の取り巻きとて思いは同じであつた。将来は王子と自分達が王国を運営するのだという自負もあつた。とにかく自分を認めてもらいたい、自分の力を試してみたい、何をするのかさえ分からない段階でそんなことを考えている王子は、やはり幼いと言わざるを得ない。しかし、少年がそんな気持ちを抱くのは当然のことであつて、それが放置されているというのは、王と王子の血の繋がりが問題なのか、それとも王家という特殊な家庭の中では、一般的な親子の気遣いは成されないものなのか。

「陛下の命なれば、大人しくされますよう。」

親衛隊が優しい口調でなだめようとしたが、それでも王子は納得しない。

「俺を幽閉するだど？ こんなバカなことがあるか！ 王を、親父を呼べ！」

王子の取り巻きも親衛隊に掴みかからんばかりの勢いで応酬する。

「そつだ！ 王を呼べ！ 王子を連行するのなら、お前達だけでは役不足だ！」

数では圧倒的に不利なはずの親衛隊は、少年達の罵声にも全く動じない。業を煮やした取り巻きの一人が、腰の短剣を抜いて凄んで見せた。

「そんな物を出して、どうされるおつもりか？」

短剣に一瞥をくれただけで、尚も動じない親衛隊に少年達は次の手を失った。

「陛下からは、丁重に扱うように、との命も受けております。我々もその命令に背きたくはありません。ご理解ください。」

王子の体が恐怖心から硬直していた。彼が知っている幽閉とは、地下牢での拷問や不潔極まる監禁といった非人道的な行ないなのだ。親衛隊に自分をそんな所に連行するように命じておいて、丁重に扱えとはどういうことなのか、彼には理解が及ばなかった。そんなやり取りを王宮の者達が遠目で眺めていたが、騒ぎを聞きつけて宰相が走り寄って来た。

「貴様達！ 王子をどこにお連れするつもりだ！」

国を預かる職務を担う者として、この事態を知らないでは済まされないという自負から、宰相の語調は珍しく厳しくなっていた。しかし、親衛隊の隊員はあくまでも冷静である。

「お応えする必要はありません。」

「何だと！ 私を誰だと思っている？ この狼藉は誰の目論見だ！」

「我々は親衛隊です。陛下の命によってのみ行動します。誰であっても、そう、宰相であるあなたであっても我々を止めることはできません。お分かりですね？」

宰相の出現に、状況の改善を期待していた王子の顔に落胆の色が現れている。怒声だけでなく武器まで取り出してしまった取り巻きの少年達は、やり場の無い怒りのはげ口を宰相でさえも用意できないことを知って、ただ立ち尽くすしかなかった。そんな雰囲気を感じ取った宰相は、自らの不甲斐なさを恥じて口調を一層厳しくした。

「いいだろう。陛下に直接確認することにする。貴様を親衛隊から

罷免してやるから、そのつもりでいる！」

精一杯の宰相の強がりにも聞く耳も持たず、親衛隊は王子を連行していった。もう王子も抵抗を諦めたようだ。いや、少年には余りある恐怖のために、何も考えることができなくなつたのだろう。見かねて宰相が王子の背中に語り掛ける。

「王子、ご心配なされますな。私が付いております。何かの手違いがあつただけのこと、すぐに元に戻ります。戻してみせます。」

宰相の言葉を背中に受け、王子は右手を上げて承諾を現した。しかし、振り向きもしないその素振りが、宰相が王に接見した後の結果を絶望視しているという本音までも表現してしまつていた。

「陛下。あれはいつたいどういふおつもりなのでしょう。王子を幽閉するなど……。」

王室まで駆け上がつて来た宰相は息が上がつていたが、それが親衛隊に邪険にされた怒りを若干落ち着かせたのか、口調はいつものように戻つていた。

「遅かつたな。そろそろ来るだろうと思つておつた。」

「何をお考えなので？ 親衛隊を使つての狼藉、黙認するわけにはいきませんぞ。」

宰相の言葉を受けて、王はそこで立ち上がった。

「狼藉と言つたな？ それが余に対して使う言葉か！」

この男に国王の威厳を学ばせて来たが、ここまで習得して見せるかと妙な感慨を持ちながら、宰相は最後の手段を出すことにした。

「皇帝陛下の思惑、それと異なつてはおりますまいな？」

国王に仕立て上げたとは言え、所詮は皇帝の謀略を担う一端ではない男なのだ。そんな男がいつたい何をしようと言うのか。いや、この男の思惑は明瞭だ。自分の保身を圖つている。しかし、何故今になつて保身を考える必要があるのか。二つしかない。皇帝の思惑が変わつたか、あるいはこの男の変心だ。皇帝の思惑は変わるまい。変わったとしても、王国の宰相である自分抜きに進めるとは思えな

い。よつて、この男が変心したと考えるのが妥当だろう。それを裏付ける言葉が王から発せられた。

「国は民のものだ。皇帝のものではない。余のものでもなければそなた達のものでもない。それに気付いたまでのことだ。」

「民は統治する必要があります。より良い統治こそがより良い国家を作り、ひいては民のためにもなるのです。皇帝陛下は、より良い統治の基礎を作ろうとなさっております。我々はその思想に共鳴してお手伝い申し上げているのですぞ！ お忘れか？」

「そのためには、ブリテン王国の王族が犠牲になるのも仕方なし、というわけだな。」

王室の周辺がざわめき出した。宰相派の憲兵が王室を取り囲んでいるのだ。王室に上がるにあたり、憲兵の手配まで済ませているのは、この宰相もただの文官ではない。

「潮時、ですな。最後にお聞かせ願いたい。何故に変心された？」

「千数百年に渡つて国を統治して来たという実績、貴公等は軽く考え過ぎているのだ。皇帝とて、ブリテンの王族に比べれば成り上りに過ぎん。」

宰相は、ここで男を王として扱うのを止めて切り返した。

「何事にも『はじめ』があるもの。それを認められないとは、軽率な男よ。」

「貴公に軽率と言われようとはな。」

ククツと笑いを漏らした王は、あくまでも余裕の表情で続けた。

「さて、どうする？」

「憲兵をここに踏み込ませ、貴様を捕らえることにする。短い間ではあったが、王の役目、ご苦労であった。」

宰相の顔にも笑みがあった。憲兵という力を背景に持たせた自分に自信を持っているのだ。

「余を殺しても、後は王子が継ぐぞ？」

「結構だ。所詮は子供のこと、我々が操ることが可能。心配はご無用だ。」

言い終わると宰相が笛を吹いた。憲兵に突入の合図を送ったのだ。王室の扉を打ち破って憲兵が突入して来るのを想像していた宰相は、憲兵の邪魔にならないように部屋の隅にそくさと移動したが、静寂が続くのに当惑した。再び笛を吹いてみたが、それは空しく王室にこだまするだけであった。相変わらず余裕表情の王とは対照的に、宰相の顔が引きつって行く。

「貴様、何をした？」

「貴公と同じことだ。王室は親衛隊が警護している。念入りにな。扉の向こうでは、親衛隊と憲兵が睨みあって両者とも動けない、ということだ。」

国の治安を守る憲兵と、王を警護する親衛隊。彼等が王室の外で睨みあっている。一人でも動けば、壮絶な銃撃戦が瞬く間に繰り広げられることだろう。その状況を想像するために暫し沈黙を持った後、宰相は不敵な笑みを浮かべた。居直ったのだ。

「やるようになったな、貴様。」

王も負けずに切り返す。

「全て貴公から教わったことだ。」

「どうか。如何に精鋭とは言え、親衛隊の数は限られている。対して憲兵の増派は容易だ。この現実、どうする？」

「コトが始まれば、親衛隊は確実に貴公を抹殺する。これも事実だ。」

今度は、永遠とも思われる沈黙が続いた。扉の外でも、誇り高き親衛隊のユニフォームに身を包んだ隊員と、憲兵の中でも優秀な者だけが抜擢される王宮憲兵隊が、呼吸も憚られる静寂さで対峙していた。各々の銃口の先に、自分に銃口を向ける相手を見据えて。それは、実はかつての部下や上官であったりと、知人関係の者も少なくなかった。このまま事なきを得たいという親衛隊や憲兵の本心は、王や宰相の判断に微塵の影響くらいは与えられるのだろうか。皆が極度に緊張していた。これ以上この状況が続けば、恐らく、偶発的に銃撃戦が始まってしまいうだろう。物音一つでタガは外れ得るのだ。

そうになった時、本心では拒んでいても、彼等は引金を引くことに躊躇しないだろう。惨劇の前の静けさに王宮さえもが震えるかのようであった。

< 続く >

ドーバー海峡を見渡す臨海地域から豊かな内陸地域まで、ケルトの地は本来、穏やかで平和な土地柄である。人々が豊かな生活を謳歌する土壌があるのだ。ところが皮肉なことに、この地域の高い農業生産性と工業技術力、そして洗練された文化レベルが、ケルトを様々な権力者による争奪の舞台にさせて来たという歴史がある。近くは、ドーバー戦役の時にブリテン王国軍が臨海地域を攻撃し、その前には、神聖同盟の地上軍が内陸地帯を蹂躪した。急速に復旧して来てはいるが、どちらの傷跡も未だ残っている。ケルトの地に住む人々にとって、帝国も神聖同盟も王国も、侵略者という意味で同じなのであった。かつて王国がブリテン島に建った時は、王国に与して帝国と戦った。その時、大量の兵員とその犠牲、そして戦場を提供することになったこの地は、結果として王国への帰属を勝ち得たが、引き換えに重税を課された。その不満が積もり積もって、帝国の先鋒として神聖同盟が侵攻してきた時には、そちらに加担した。それは治安の悪化から来る社会情勢の不安定化と、更には経済の低迷をもたらした。その傷跡も癒えぬ間に、ドーバー戦役では臨海施設が破壊された。そんな窮地に立ったこの地の救援には、誰も手を上げない始末。この地域の人々は、カエサルがガリアを攻略して以来、概ね従順であったが、ここに来て独自の為政者を求める機運が強まっていた。いや、周辺の国々に強められた、と言うべきか。何らかのきっかけさえあれば、飽和状態の機運は雪崩のように自主独立に向けて動き出すだろう。失敗したとは言え、北方の半島に配備された王国の軍隊がケルトに向けて進軍しようとしたということを、人々は既に伝え聞いていた。ケルトを取り巻く国々は、再びこの地を戦場にしようとしているのだ。ケルトの人々にとって、これ以上

のきつかけがあるだろうか。後は誰かが引金を引きさえすればよかつたのである。そして、その引金は決して重いものではなかつた。

一人の労働者が失業し、その原因が神聖同盟にあると逆恨みした飲み屋での愚痴が、街でよく見かける労働者階級の喧嘩を引き起こした。神聖同盟の放置状態を責める者、王国の失政が現状を生み出したと主張する者。普段であれば、酔っ払い同士の小競り合いで済むところだったが、この喧嘩は両者の言い分を支持する派閥を形成してしまい、噂話という尾ひれを付けながら急速に広まって行つた。そしてそれは、ある時から暴動という形を伴いはじめ、あつという間にケルト全土を騒乱の中に陥れることになつたのだ。

最初に暴動の標的にされたのは、現時点で実質的に西ケルト公国を支配していた神聖同盟の現地総督である。総督は沈静化に向けた有効な対策を何ら取られないまま、施設とともに葬られた。そして、その生首を掲げた暴徒達が行き着いた先は、形だけの元首として存在していた西ケルト公爵の宮殿であつた。元々は大人しく事なかれ主義に徹する男と噂されている西ケルト公爵は、民衆からケルト民族の『王』として担ぎ出され、独立運動の先鋒として祭り上げられてしまった。彼はそれに抵抗しなかつたと言つが、状況が抵抗を許さなかつたのか、それとも彼なりの決意があつたのか。

ここまでがたつた一晩の内に起こつた。当然のように神聖同盟の軍隊が進軍して来るだろう。帝国軍も動くかもしれない。独自の軍だけでは到底適うはずもなく、西ケルト公爵はブリテン王国への共闘を求めた。対して、神聖同盟は王国との戦争以外に割ける戦力が限られており、帝国も直接手を下さないという方針から脱却しようとしなない。王国とて戦力に余裕が無いのは神聖同盟と変わらず、増してや王と宰相が対立して国の運営が滞っている状況では、具体的な支援は望むべくもない。表面的には、独立運動を成就させるための格好の条件が揃っているかのように見え、このまま西ケルト公国が主権を獲得する可能性はあつた。しかし、この独立運動は如何に状況が後押ししていたとは言つても性急に過ぎた。ケルト内部の急

進派と穏健派や、他の勢力との調整は何ら成されていなかったのだ。急進派の勢いに任せた運動は、その始まりから内部分裂の芽をもっており、それらはただちに発芽した。これらの必然的結果として、神聖同盟と帝国と王国の各陣営の斥候やスパイが、ケルト側の様々な派閥や勢力を買収したり、あるいは扇動することによって、結局はケルト民族同士が争うという構図が出来上がってしまった。何か一つ、例えば西ケルト公爵が『王』としての資質を持っていた、または、住民自体が支配されることに慣れきっておらず、自らの運命を自らが作り出すという習慣を身に付けていた、といった要素があれば、これからの悲劇は避けられたのかもしれない。しかし、現実とは違った。歴史というのは、概ね悲劇の方向に進もうとする推進力を持っているのだろうか。あるいはそれが人の性^{さが}か。

ケルトの地を舞台に繰り広げられた血で血を洗う争いは、それぞれ異なつた思惑が錯綜した結果、こうして始まつたのである。

最初に音を上げたのは宰相だつた。

「貴様の考えを聞こうか。」

宰相の打算的な目が輝き出していた。

「このままでは、この国は統治者を失つて消滅してしまう。」

呆れ顔を隠さずに王が応える。

「認識の甘いことよ。既に崩壊していると言ってもいい状況だ。」

「それなら尚更のこと、ただちに回復させねばならん。」

「まず、憲兵を引かせろ。話はそれからだ。」

「親衛隊が先だ。立場を考えるのだな。貴様是我々の駒なのだから。」

それには思わず王から笑いが漏れた。

「駒ではないだと？ 貴公とて皇帝の野望の駒であることに変わりはあるまい？」

「目的を達成するためには実際に動く駒が必要で、誰もが何らかの駒なのだ。ただ、役割が違うというだけだ。」

「それでは、貴公には余の駒という役割を担う覚悟もあると言つただな？」

「考えを聞くと言っている。まずは親衛隊を引け。」

「いや、憲兵が先だ。それとも、全員死んで一端白紙に戻すか。」

「強情な……。良かろう、憲兵を引く。親衛隊に手を出させるな。」

宰相はゆっくりと慎重に王室の扉を開いた。

「憲兵！ 退却だ。下がって次の指示を待て。」

憲兵と親衛隊ともに目に安堵の色を浮かべ、憲兵だけが銃を降ろした。そして憲兵は、流れ出た汗の匂いを残して、親衛隊の銃口に見送られながらその場から立ち去った。

宰相が王に視線を投げ、今度は親衛隊の番だ、と促した。

「甘いな、貴公は。」

王の台詞に宰相の顔が凍り付いた。

「貴様！ 謀ったか！」

言葉の強さとは裏腹に、宰相の体は無様に震えている。

「勘違いするな。そういうことではない。貴公をここで殺しても何にもならん。」

「どついつつもりだ、貴様。」

「ちよつと待て。親衛隊にも聞こえている。王への礼節は踏まえてもらわねばならん。貴公を生かしておくためにもな。」

当惑しながらも、宰相は懸命に考えていた。これはどういうことか。この王には宰相である自分が必要ということらしい。しかし、親衛隊を引かないのは何故か。王が自らの意見を通すための脅しか。それとも……。王が宰相の思案を遮って言葉を発した。

「親衛隊、扉を閉める。影に隠れてそのまま待機しろ。」

瞬時に親衛隊の隊長が反応して扉を締めたの見届け、宰相の疑問に王が答えを言った。

「軍だ。我が軍には自らの判断で為政者を質す権限がある。」

王国の軍には、古代から為政者に対してモノを言つて来たという自負がある。国があらぬ方向に行こうとした時、それを質せるのは軍

部だけなのだ。軍が王室の制圧に動いてしまつたら、親衛隊と言えども守り切ることはできない。よつて、親衛隊は軍の統帥が単独で王室にやつて来た時に、彼に圧力をかける手段として残らせているのだ。それには、軍の統帥が王や宰相を仲間と思つて油断している今を置いて無い。宰相が不在となれば統帥が警戒しないと限らないので、王は宰相を排除できないのだ。ようやく宰相もそこまで全てを見通したようで、自分の存在意義を主張した。

「幸い軍の統帥は文官上がりで、私がコントロールできる。親衛隊を使わずともクーデターを起こさせはしない。信じてもらつて結構だ。」

「礼節を踏まえろと言つたらう？」

血が滲む程に唇を噛み締めてから宰相が謝罪した。

「は。軍を押さえたとして、それからどうなされます？」

「リメス・ジンだが、あれは実際のところどうなのだ？」

「最終兵器です。地上を焼き尽くすことができます。ブリタニアに出撃した機体と待機中のものを含め、十機以上が作戦稼動可能です。これだけで、神聖同盟の支配地域を焼け野原にすることができましょう。」

「それは凄まじいな。」

「更なる増備も進めております。また、ルナ隊にいた凄腕の整備士を招聘することも、軍の方で進めているはずで、リメス・ジンの次のロットはもつと強力になるはずです。」

「分かつた。では、ここに軍の統帥を呼んでくれ。作戦を詰める。」

「いったいどのような……」

「根源を付くのだよ。」

「まさか、皇帝陛下を？」

宰相は、王から大胆な発想を聞くことになりそうだと思い、年甲斐もなく興奮するのを覚えた。その興奮故に、王が皇帝や自分達の思惑に反して今まで何をして来たのか、その行ないに落ち度は無かつたのか、といったことを確認する必要性を失念させた。時の流れは

連続しており、今までの経緯を無視して次のことは考えられないものなのだが。いや、自分の想定よりも優秀であった王を演じる男が、皇帝の策略よりも自分を大きな駒に仕立ててくれるかもしれないという期待が、宰相を盲目にさせていたのかもしれない。いずれにせよ、打算的で欲に目が眩んでしまった男の感覚とはその程度のものでしかないのであった。

< 続く >

そして、本格的に野心に目覚めた国王を演じる男は、生来の明晰な頭脳で立てた自らの策略に陶醉し始めていた。この場合、もともとの目的や行動の発端になった理由が忘れ去られてしまうことはよくある。早くも保身という課題にその頭脳を働かせることで、彼もまた盲目になりつつあったのだ。明らかなのは、ルナは彼を許さないだろうということだった。本当の王やルナと会い、その権威や人柄に屈服した男は、そのようなことがあったことなど忘れてしまつたかのようだ。ルナが自分の首を狙つて来るだろうという恐怖心から、その排除をも考え始めていた。力を揮える立場を得た時から、人は変わっていくものなのだ。

今となつては、宰相派からルナを擁護したのは軽率だったか、との後悔が王の心を占めていたが、それには自らを慰める理由を考え出した。庶民上がりになんか、これほどの大舞台を踏もうというのだ。始めから全てを見通せるはずもない。未だ充分に間に合うはずだ。できる処から片付けることとしよう。

軍の統帥が王室に来る前に、王は一人の親衛隊員を王室に入れた。そして宰相に聞こえるように大声で指示を出した。

「地下牢の男、もういいだろう。」

「御意に。」

宰相も、さもありません、という顔をしていた。

王通達を持つて親衛隊の隊員は王室から出て行つたが、彼は地下牢の男が本当の王であることを知らないままに、確実に男を抹殺する。これで、再び宰相と対立するようになったとしても、彼等が本当の王を担ぎ出して自分に対抗することはできなくなる。先手は打てたと考えていいだろう。たった今殺人の命令を発したにも

関わらず、王の顔はさすがしいものであつた。本当の王が『王家の秘蹟』を放棄した真意、それを確認したいと考えたのが処刑を見送らせた本音であつた。何らかの崇高な意図が有るに違い無い、それが知りたいと思つたのだ。しかし、今の彼にはそんな好奇心も余裕も無かつた。

役割が人を作るといふ。それは事実なのだろう。良くも悪くも。王と宰相は、既に自らの野望に対して相応の役割を演じていた。そして自らに甘くなつてしまふのも、人というものなのだろう。他人は自分に都合よく動くという錯覚が、偽りの王の心を支配し始めていた。決してそうはいかないもののだが、この意味で王は、皇帝と同じ過ちを犯していると言える。ルナが持つ純粹な王家の血筋だけが、自らを厳しく律せることには、誰も気付かないのであつた。

軍の統帥が、王と宰相からの呼び出しに応じて足早に王室に向かつていた頃、港では統帥の命を受けた数名の作業員がとあるモーターの一部屋を囲んでいた。

部屋で寝ていたベルアーレは、外の殺気に目を覚ました。軍人としての教育を受けたわけでもないのに、彼女は気配と空気を讀む力を持つていた。本当の彼女の住まいを知る者は殆どいないが、それはルナ隊の移動に依じて各地を転々として来たからだし、彼女の部屋に辿り着いた男が一人しかいなかった。昨晩は、そのたつた一人の男という名誉を勝ち得たカクがこの部屋にいたのだが、彼はルナに従つて出動してしまつていた。カクに出会うまでの彼女の暮らしぶり、知らない土地に女一人で繰り出す上での警戒心と、ルナ隊という軍人との駆け引き、それらが相まつて生まれ持った才能を引き出したのだろう。しかし、悲しいかな如何に優れた能力を持つていたとしても、一人の人間ができることはたかがしれていた。ベルアーレも一人でなければ、例えば戦闘や逃走に長けたパートナ

「、あるいはカクと一緒にであれば、これから起こる屈辱を避けられたかもしれない。敵もさるもの、ベルアーレが一人になるのを、殺気を悟られないように遠くから待っていたのだ。作業員達が距離を詰めて来たという危機をいち早く察知したものの、彼女ができることは殆ど何もなかった。数人の男達は部屋の出入り口に素早く散会し、一人が錠をこじ開けた。その間僅か数秒。ベルアーレはベッドの上に横たわって寝たフリをして、後手に小さなナイフを隠し持っていた。襲い掛かってきた時に切り付けるために。それが適わねば、刺し違えても構わないと思っていた。それ程にどろどろとした悪意が彼女を包んでいたのだ。それにしても『なぜ』自分を狙うのか、『誰』が何の目的で。分からなかったが、近づく殺気に意識を集中させることにして、息を潜めた。慎重に音を立てずに進む男達は専門の作業員であり、あらゆるケースを事前に想定していた。彼等にとってベルアーレが準備していた抵抗手段は初歩的なものでしかなく、唯一の武器であったナイフは瞬間にねじ上げられた腕から滑り落ちた。そのままガスを吸わされてうなだれたベルアーレは、誰に気付かれることもなく連れ去られてしまった。薄れて行く意識の中で彼女は『なぜ』の答えを見つけた。カク・サンカクである。彼の技術を手中に収めたい者がいるのだ。そのために自分はこれから人質にされるのだらう。しかし、『誰』が。その答えに辿り付く前に、彼女の意識は霧散した。

気絶した人間というのは重いもので、また関節があるために持ち運ぶのは困難なものだ。にもかかわらず、作業員達は運送用の箱を運ぶかの如く、いとも簡単に彼女を車に運び入れた。これから王宮近くの軍施設に向かうのである。途中のアジトで車を替えながら。人を誘拐するといった任務は、作業員としても名誉な任務ではない。勿論、軍人でもある彼等が命令を拒否することは有り得ない。上からの命令であれば、確実にやっつけてのけるように訓練されている。しかし、今回の命令は只事ではない。恐らく情報部長、もしかするともっと上、つまり軍の統帥から出たものである可能性が高い。官僚

機構である軍の中で、命令が現場に届くまでのプロセスと期間によって、発令元は概ね想像できてしまうのだ。作業員も人であり、トップ付近からのミッションには一層力が入るものだ。そして、それは確実に遂行されようとしている。しかし、そんな彼等であっても所詮は現場の作業員に過ぎない。最終兵器リメス・ジンの存在も、その増強にカク・サンカクの技術を投入しようとする軍の統帥が考えていることも、彼等の知るところではなかった。分かっているのは誘拐というのは誘拐した人間の近しい誰かを思い通りに操るための手段でしかないということだ。殺してはならないが、操りたい誰かに衝撃を与える程度には傷付ける必要があり、誘拐したのが女性である限り、その手段は太古から変わらない。そしてその役目は、作業員が担うことになるだろう。ルナ隊が港に集結し始めた頃から、作業員達はカク・サンカクを監視していた。そして、彼に女ができたこと、それもぞつこんであるという報告した時、上からは『カクが港を離れた後に女を確保せよ』という隠密指令が降りた。暫く続いた監視だけの退屈な日々が報われるという思いに駆られ、作業員達の口元は卑猥に笑っていたが、その目は畜生のものでしかなかった。

作業員達が従事しているのは、皇帝の陰謀に基づいた王室の策略に沿って、軍の統帥が立案したミッションである。皇帝の陰謀こそ変わっていないが、共謀していたはずの王や宰相派については、このミッションが立案された時とは全く異なった考えのもとに動き出している。皇帝とは袂を分けたのだ。にもかかわらず、末端に下された指示はそのまま遂行されていた。通常は、上層部の混乱は末端では途方も無く拡大して、収集が着かなくなってしまうものがある。しかしながら、軍の統帥が指示したベルアーレ確保のこのミッションについては、たとえ状況が変わった今から指示が出されたとしても、同じ内容になっていたことだろう。むしろリメス・ジンの重みは増したと言え、カクの力はより強く求められているのだ。様々な思惑が錯綜する混乱した状況において、結果が変わらないことが稀にある。ベルアーレにとってのこの悲劇もその一つの例で

はあるが、運命と言うものがあるのなら、これが彼女にとってのそれであるということなのだろうか。

既に天井近くの窓からは、日の光が差し込まなくなっていた。この部屋の主、本当の王は、偽りの王がこの部屋の外では国王として主体的に振る舞っているのです、元国王と呼ばれるべき存在なのだが、彼が本当の国王であることを知る者は一部を除いて存在しなかった。未だ一日はこれから始まるという時間帯なのに日が差し込まないという状況が、部屋の住人の落日を現しているようでもあった。

実際には未だ陽が高い時間帯にもかかわらず、部屋の主はベッドに横たわっていた。翌日まで訪問者は無い予定だったので、眠っていても構わないのだが、この部屋に新たに訪問者を告げる足音が近付いて来た。

部屋を監視する憲兵は、親衛隊の到着に困惑した。ここには国王だけが訪問を許されている。親衛隊といえども、単独の訪問は断るべきか。

そんな憲兵の心情を察し、親衛隊の隊員は真先に勅令を差し出した。国王の勅令であり、この国では最も力のある文書である。それを見せられては拒む理由は何も無く、憲兵は大袈裟な鍵を開錠して親衛隊員入室を許した。

親衛隊員は足早に部屋を検め、ベッドに横たわる男に銃を向け、起立を求めた。しかし、男は微動だにしない。そして、男の服装に気付き、判断を求められていることを理解した。男が身に付けているのは、王の礼装である。冠こそ戴いていないが、王を除いて何人も身に付けることはできない、最も高貴な服装なのだ。一介の親衛隊員が、王や宰相の陰謀を知っていたわけもなく、目の前に横たわる男がなぜ王の服装をまとっているのかは分からなかった。ただ、この男は無言ではあるが、服装で王の身にまで及ぶ動乱が存在することを示していることは理解できた。そして、冷静に考えを整理し

た結果、恐らくもう二度と目覚めることはないこの男こそが本当の王であり、その気高い命を以って訴えているものこそ、今のこの国にとつて最も必要で重要な何物かに違いないという結論に至った。親衛隊の隊員として、王国の将来と秩序に誰よりも責任があるという自負を持ち、徹底的に王に忠実であることを存在意義として生きて来た者として、究極の決断を迫られている。ベッドの上の男は、黙して何も語らない。しかし、その安らかな表情からは、自ら絶つたであろう命を賭けて、どんな言葉よりも強烈なメッセージを送るうとして、それを成し遂げた者の潔さが伝わって来ていた。

古代より、親衛隊というものは政争に深く関わって来た。場合によつては親衛隊自体が引金を引いたという事例も少なくない。今、まさに親衛隊が政争の表舞台に立とうという瀬戸際にあつて、この隊員は亡き王のメッセージを彼なりに忠実に受け止めようと考えていた。ある意味、泥沼にあつてこそ親衛隊は持てる力を発揮するのかもしれない。

<第4章終わり 5章に続く>

ルナの航跡 21

第5章《回帰》（1/4）

視界は、一面の海ばかりであった。その単調な景色がルナに考え事をさせてしまっていた。

リモーが言った爆撃隊と地上部隊の侵攻という作戦は、どこまでが俺を貶めるためのものだったのだろう？ 最終的には、俺を消してしまうことが目的だと思われるが、今回の作戦にそれ程の細工が行なわれたようには見えない。そうならば、俺が乗るタイガー・ルナに細工をするはずで、整備にカク・サンカクを招聘することを拒んだはずだ。ということは、今回の作戦は第一段階であって、俺の名声を汚すためだけに仕組まれたと見るべきだ。第二段階以降に何を企んでいたのかを今は知る術が無いが、今回はどうするつもりだったのか。

手始めに、今回の作戦は完全にでっ上げの作戦だったと仮定してみよう。その場合、出撃した我が航空隊にはどのような結果が訪れたか。援護が無い状態で、我が航空隊単独で、神聖同盟の本拠地付近に踏み入るのだ。戦闘になるのは間違いない。相手は強力な軍備で迎え撃ってくるだろう。我が隊が如何に屈強だとしても、負けるのは目に見えている。これでリモーの今回の目的は達せられるはずだ。俺を負け犬にすることができなのだ。場合によっては俺も戦死するかもしれない。そうなればリモーにとってより望ましいことなのだろう。でっ上げ作戦の線はありそうだ。リモー達の目的と整合している。

次に、あの作戦自体は本物だった、と仮定してみよう。リモーはどうやって目的を達成させるだろうか。恐らく我が隊の援護を得た王国軍は、相当な戦果を上げたはずだ。そうなると名声は汚される

どころか、一層高まってしまふ。リモーにとっては我が隊が敗戦せねばならないのだ。例えば、敵に内通して作戦の一部を漏洩させてみせたか。我が隊が緒戦で兵装を使い切った頃に神聖同盟の別働隊を迎撃に仕向けられれば、我が航空隊の敗走は必至だ。いや、冷静に考えてみよう。それだけのことを成し遂げるためには、相当な情報網と機動力を持つ隠密の組織が必要だ。宰相派といえども、大した拠り所もない神聖同盟の本拠地付近に、それ程の裏組織を作り出せるはずはない。敵との内通を前提にした線は無いと見ていいだろう。そうか。フェルチアは、空母艦隊が次の作戦を控えているはずだと言っていた。次の作戦に我が隊が入っていないとも言っていたな。我が隊が帰還できる余地は初めから無かったのだ。我が隊が発艦した後、空母艦隊は急ぎ移動するつもりだったのだ。作戦を成功させた後に空母に戻るうにも、空母がどこにいるのか分からず、我が隊は路頭に迷うことになる。後は何とでも話を作り出せる。これで、戦果も上げられ、且つリモー達の目的も達せられる。一石二鳥を目指したか。しかし、でっ上げ作戦の方が単純で分かりやすいようにも思う。この作戦が本当だとするならば、自分の名声を汚すということの他に、相当の戦果自体も上げなければならない理由が必要だ。

そこまで考えてルナは、必然の結論に戦慄を覚えた。

戦果が必要か？ 問うまでもない。今の王国には何としても必要なのは明らかだ。先制攻撃でダメージを与えねば、神聖同盟に勝つ見込みはない。この作戦で王国側を有利な立場にさせ、協定に持ち込もうというのだろう。だからこそ、自分が必要だったのだ。戦果を確実にするために。これだけでは名声を汚すことにならないので、空母を移動させて我が隊が帰還できないようにする。わざと行方不明にした上で、敵前逃亡なり、神聖同盟に寝返って自滅したなりの噂を真しやかに流すに違い無い。汚い手を使う連中である。これで

決まりだ。リモーの思惑は見えた。

しかし、ルナが戦慄を覚えたのは、リモーを含めた宰相派の汚さに対してではなかった。

確かに、我が航空隊はリモー達の思惑通りにはならなかった。彼等の作戦、いや謀略は失敗した。フェルチアの参画という想定外の幸運も手伝って、我々が失敗させたのだ。だが、我が航空隊の支援を失った爆撃隊はどうなったか、陸上部隊は戦果を上げられただろうか。その答えは絶望的である。支援戦闘機の援護が無い爆撃隊や、航空戦力が同行しない陸上部隊の末路は、火をみるよりも明らかだ。つまり、王国の兵隊を大量に消耗させ、国の状況も極端に悪化してしまっただであらうということだ。自分の保身のために、臣民の、そして王国の将来を台無しにしたのではないだろうか。あつてはならないことだし、我が信念に反する振る舞いでは無かったか。

「王に会いに行くのかい？ 隊長。」

隊員が無線で問い掛けて来たところで、ルナは思考を機上の現実に切り替えた。隊員全員に聞こえているので、迂闊には答えるわけにはいかない。

「何らかの形で謁見賜ることになるさ。時期は分からんがね。」

敢えて軽く流してみたが、隊員達はそんな小細工が通じる心境ではない様子だ。

「よもや、跪く以外の形で王の前に参上するなんてことは無いよな？」

隊員達はこの時点でも、自分達を反逆者と考えてはいない、あるいは考えたくないようだ。ルナの行動に正義があるとすると、リモーや艦隊の方が謀反を企てているという構図でなければならぬ。そうであればルナ隊は救国の英雄に成り得る。しかし、そのためには必要な行動があった。

「どうして艦隊を攻撃しないんだ？」

核心を突かれたルナは、暫し沈黙してしまった。艦隊側が反逆者であるなら、ルナ隊は艦隊を攻撃せねばならない。それをしてこそ、英雄になれるのである。このままだと、反逆者を放置したということで、自分達に敵前逃亡の汚名が着せられはしまいか、隊員達の不安はそこにあつた。軍人にとって、特に誇り高き王国の軍人には、敵前逃亡は最大の不名誉であり、それに応じた、決して受け入れられない罰則が設けられている。隊員達は、ルナの方が反逆者であるという可能性には考えが及ばないか、その選択肢を完全に捨て去っているのだ。

「どこまでが裏切り者か、それが分からないんだ。艦隊の兵員全てが反逆者とは思えないし。ヘタを打つと無実の奴に濡れ衣を着せることになりかねないだろう。」

一応、筋は通った答えのはずだ。ただ、誰も納得していない様子を、空気を、ルナは感じ取っていた。

「俺達の兵力は限られている。諸悪の根源を突いて、正義を確立しなければならぬ。王との接見も然り、目的に合致した会い方になるってことさ。」

つい言い過ぎたかと思い、隊員の反応を待った。王までが国賊の可能性を示唆してしまったのである。しかし、隊員からはこれといった反応は無かった。今は、何が起きているかということよりも、これから何を成すのか、ということの方が彼らにとって重要なのだ。誰もが拠り所を探しており、ルナの考えを知りたいと思っっているのだ。自分が芯になって見せるしかない。これまで以上に団結しなければならぬことだけは、明らかであった。

「王国の榮譽は俺が守る。」

隊員に、見えぬ未来に、ルナは一人ごちた。

燃え上がる炎を、人々は静かに見つめていた。永遠の辺境と思わ

れたブリタニアは、ここ数年だけで急速に町の様相を呈した。ルナが作り上げた国、そこに人々は集まり、行政と商業と農業が奇跡的に発展したのだ。

それらは夢だったのか。ルナが立ち去る前の、垢抜けないが素朴で豊かな国家の名残、全てが目の前で炎とともにその痕跡を消して行く。王国の軍隊はまるで機械のように、容赦なく、そして徹底的に破壊の限りを尽くして立ち去った。悪魔の変化としか言いようのない巨大な人工の怪鳥が飛来し、あつという間に町は灼熱地獄と化してしまった。怪鳥から稲妻が発せられ、少し遅れて雷鳴が轟く度に、地獄の業火に何もかもが飲み込まれていった。かろうじて生き残った誰もがその後予想した惨劇、兵隊による略奪と殺戮は起こらなかった。いや、そうする余地も無い程に町は徹底的に崩れ去ったのだ。

わずかに残った人々は、燃え上がる自分の国をただ眺めるしかなかった。辺境の人々にとつてみれば栄えた国での生活は一時的な夢だったのだ。再び自然と暮らす生活に戻るだけであった。多くの家族と友人が、恋人が、一時の栄華と引き換えに奪われてしまった。余りにも残酷で高価な代償を、人々は未だ咀嚼できていない様子だった。

戦果を確認すべく降下してきた王国の兵隊は、淡々と状況を記述するだけで、そこにわずかな人々が生き残っていることなどは意識の外にあるかのように、追撃もしないが救済するわけでもなかった。生き残った人々がこの理不尽を兵隊に詰め寄っても、あくまでも彼らは淡々と答えるだけであった。

ルナが裏切ったと王国の兵隊は言った。そんな戯言をブリタニアの統領が受け入れたのだろうか。有り得ないと誰もがそう思った。しかし、怪鳥の攻撃は何の躊躇もなく推し進められた。

ブリタニアは、王国の一部ではなかったのか。それを疑う者は誰もいなかった。それでも王国軍は、仇敵を討つが如くに振る舞った。あの怪鳥がリメス・ジンだ、これで王国は覇権を回復する。王国の

兵隊は怪鳥を指して誇らしげに言った。

風にあおられ勢いを増して燃え続けた炎は、一面を焼き尽くして衰えはじめていた。立ち尽くす人々の悲しみと怒りが燃え上がっていくのとは対照的に。その矛先は王にもルナにも向けられた。明らかに人々はいわれの無い被害者なのだ。

王国は、ルナの王国復権の思いとは別に、致命的な分裂の要素を一つ作り出してしまったのである。現在の王や宰相達、そして皇帝までもが、大国による大権統治が既に時代錯誤になっており、分散方向に動き出していることに気付いていないのだ。それぞれの民族や風土、それらの上に培われた文化からは、それぞれ異なった価値観が創出され、異なる価値観から導き出される主義・主張は、相容れないことが多いのだ。帝国の母体となった都市国家が創立されてから二千七百年近く、その間に繰り返された繁栄と衰退、その度に国家も人々も成熟して行き、成熟とともに主義・主張も洗練されていく。洗練を深める過程で、各々の主義・主張は相違点を明確にしていき、人々の信条が乖離していく。それが成長なのであって成長するために時代は流れている。そんな時代の流れに反して、如何に統合方向の策略を巡らそうとも、それは結果的に分裂に向かうトリガーにしかならない。歴史は人が紡ぐものだが、それは為政者が作るものではない。流れを読むことができる為政者によつて組み立てられ、それを人々が営み続け、その結果として生まれる新たな流れを組み立て直す。そうした所業の断片を結果論として結晶させたものが歴史なのである。

こういつた哲学的な知恵は、今は亡き王だけが知りえた境地なのかもしれない。他には、亡き王の直系であるルナだけが理解して行動できる可能性を秘めているのだが、そんなことは民衆の知る由もないことであり、怒りという弓から放たれる怨念という矢の幾つかは、間違いなくルナに向かうであろう。

< 続く >

悲劇はブリタニアだけに訪れたものではなかった。大陸の北方の森林にはあらゆる残骸が飛散していた。王国の爆撃隊の末路である。昼なお暗いと形容されて来たゲルマニアの森、その所々に火災の痕跡が黒々と点在していた。その数の多さが、爆撃隊の辿った軌跡を物語っている。ルナ隊の支援を得られなかった爆撃隊は、奮戦するも神聖同盟の餌食になってしまった。足の遅い爆撃機は、神聖同盟の迎撃隊にとって、演習目標のようであった。北方半島に残された僅かな王国領土に帰還できた爆撃機の数は、出撃していった半分にも満たなかったのである。これは、一機当たり二十名以上の乗員を有する爆撃機、鬱蒼とした森の中に、数百の御霊が飲み込まれたことを意味する。それでも、爆撃隊の被害は地上部隊よりもマシだったと言える。神聖同盟の陸空の守備隊に迎え撃たれた王国の地上部隊は、西ケルト奪還の思いとは裏腹に、全滅状態であった。わずかに逃げ果せた兵士達は、古代の蛮族の様相で北方半島の領土に帰還した。彼等にはもはや王国軍人の誇りも規律も無く、大陸にあるこの僅かな王国領土を守る術は残されてはいなかった。神聖同盟の軍隊に蹂躪され、その支配下に入るのは時間の問題だろう。

未開地域ではあったが、王国が唯一保持していた大陸の領土は、まさに風前の灯火であった。脱出も救出もままならぬ状況が、そこに残された人々に王国への不信感を植え付け、作戦を失敗に導いたルナへの恨みとして開花した。その思いは、捕虜として各地に連れ去られ、生き恥を晒すことになった兵隊達の中では一層強かった。数は多くはないが、その怨念の強さはブリタニアのそれに引けをとらないだろう。

ルナが気に病んでいた状況は、ここに最悪の形で具現化してしま

っていたのである。

古代より陰惨な戦闘が多かったこの地で肉体を焼かれた魂達は、過去から漂う悪霊達と折り合いを付けられたのだろうか。彼等が、自らを死に追いやったルナがこれから諸悪の根源を突こうとしている、ということを知ることがもう無い。そんな彼等が、ルナの行動を後押ししてくれることは無いだろう。過去から各地で繰り返されて来た権力闘争や陰謀の数々、それらの犠牲となった人々は余りにも多い。王家の血とは、そんな怨念までをも力として取り込んでしまふものなのだろうか。

これらの状況について、ルナは着陸してすぐに報告を受けた。斥候として大変優秀な部下、ブルータスが着陸地点で待ち受けていた。そこは同時に、フェルチアやカク・サンカク達との合流地点でもある。ブルータスは、僅かの時間に最低限ではあるが補給の準備をも整えていた。勿論、専用部品の多いタイガー・ルナのパーツまでは揃えられてはいないが、それは止むを得ないだろう。

ブリテン王国の北方は、かつては大陸から海を渡って来た蛮族が闊歩していた。その南侵を食い止めるべく、島の東西の海から海に渡る城壁が構築されたことがあり、現在でも二千年の時を越えてその一部が残っている。過疎となって人の往来も無い地域であるために必然的に残ったものであるが、昨夜にルナから指示を受けたブルータスは、この場所にルナを受け入れるべく彼が持つ全てを投入して準備にあたった。彼が何年もかかって極秘裏に作り上げた情報網と裏組織、それらの全てを注ぎ込んだのだ。そうでなければこの短時間にこれだけのことはできなかつただろう。一度使ってしまうと、極秘は秘密ではなくなる。これは斥候の常識である。よって、これらの情報網や裏組織は、もう使えなくなってしまうのである。しかし、ここ一番で使うために作り上げたものであり、ブルータスの感性は今がその時だと告げていた。

ブルータスはこの地域で生まれ育った。彼の親は、信念を持って生きて欲しい、という思いを込めて、敢えて『ブルータス』という名前を彼に贈ったという。あのカエサルを裏切ったブルータスのように、自らの信念に生きよ、裏切りもその一つの形でしかない、と語り聞かされたものだ。この地域の厳しい自然に生きた彼の親は、既にこの世にはいない。しかし、その思いは確実に伝わっていた。そして彼の信念は、ルナへの忠誠という形で具現化した。その名のため、裏切り者と罵られた少年時代も影響したのだろう。彼のルナへの忠誠心には全く淀みが無い。持つべき信念が芽生えず悶々としていたある日、ルナが彼の前に現れた。当時、ブルータスは地場のヤクザのようだったし本人もそう思っていたが、ルナに言わせるとブルータスの組織のお陰でこの地域は安定していたという。力の作り方と使い方を知っていると言うのだ。そんな組織力と調整や運営の能力を買われ、ルナの斥候として誘われた。皇太子を廃位されたばかりの王子、そんなルナがどうにも魅力的に見えたのは、その出会いが運命だったからなのか。少なくともブルータスはそう考えていた。親の死を看取ってからそれまで、他人に認められたり評価されることは皆無と言ってよかった。むしろそうされることを警戒するようにさえなっていた。このような生き方をして来た者が選ぶ生き方である。しかし本音では、それでは寂しくてしょうがない。そこにルナが現れ、本質を見抜いたのだ。心の拠り所は多くは要らない。ブルータスの心はルナによつて満たされたのだ。これからも彼は、ルナに尽くすことにだけを考えて生きていくことだろう。それがあくまでも秘密裏に、表の世界から認められるものではないとしても、彼の忠誠心に一点の曇りも出るものではないのだ。

ルナは隊員に補給と休息を命じ、それができる状況を作ってくれたブルータスに感謝の意を示した。あっさりしているが、ブルータスにはそれで充分であった。そしてルナは、自らの考えを纏めることに集中した。

明らかに状況は最悪である。王国の将来自体が極めて危ぶまれるし、王もルナも人心を再び掴むことは難しいだろう。神聖同盟が侵攻して来ることが現実になった今、く侵攻するためにこれ以上は望めない口実を王国側から与えてしまったく 王国は国としての体裁を保つこともできなくなりつつあるのだ。

「救命艇が接近して来ます。」

ブルータスの報告にルナが立ち上がった。空母から脱出した救命艇が合流して来たのだ。今のルナにとって、それは唯一の朗報である。この状況であっても、フェルチアをはじめ、命がけで彼を慕い、寄り添って来る者達がいる。プライドも責任感も無くしかけていた今、彼の心にも支えが必要なのであった。追い詰められたルナの心の中で、フェルチアの存在が徐々に大きく育っていることに未だ気付く余裕は無かったが、狼狽や弱みを見せられない立場の彼を、人知れず救ったのは彼女なのであった。

「ブリタニアに帰る。体制を整える必要がある。」

突然、決断を隊員に告げたルナは、自ら離陸の準備に取り掛かったが、ブルータスがルナに歩み寄って耳元でささやいた。

「さつきも言ったが、ブリタニアは焦土と化しているんだぜ。統領をはじめ、お前の腹心は所在すら掴めていない。それにお前に対して不穏な動きも予想される。考え直すことだな。」

「基盤が必要だ。ゲリラになるわけにはいかない。それに怪鳥の件、捨て置くわけにはいかん。王国がそんな兵器を所有していたなんて話は聞いていない。」

ブルータスにそう告げると隊員に大声で言った。

「諸君、ここで分かれよう。付いて来ることを拒みはしないが、それは絶望への旅路になることだろう。」

後から合流したフェルチアが応えた。

「絶望を希望に変えに行かれると信じます。地獄も極楽に変えられるはずです。私にお手伝いさせてください。」

何とも純粹な、若々しい感受性だろう。しかし、ルナは返事をせず
にタイガー・ルナを離陸させた。

ある程度は予想していた。付いて来る者がいることを。だが、全員
がルナ乗機の後を飛んでいた。甲板要員までもが、狭いタイガー・
ルナのコックピットに収まっていた。

「俺を撃ち落とすつもりなら、すぐにやれ。」

付いて来る理由にはそれもあるうかと思ひ、ルナは全機に告げた。

応答も反応も無いまま、ルナ隊はブリタニアに向かった。

隊員の真意も気になってはいたが、怪鳥出現の情報で、ルナの考
えが繋がった。

怪鳥の件は知らなかった。そんなものがあるなら、宰相派は神聖
同盟を本気で叩き潰すつもりなのかかもしれない。帝国との開戦まで
も視野に入っている可能性もある。しかしそれなら、自分の招聘は
何のためだったのだろう。いや、秘密は漏れるものだとブルータス
も言っていた。きっと怪鳥は開発されて間もないのだ。だから自分
の耳にも未だ入って来ていないと見てよいだろう。つまり、究極の
兵器で先手を打とうとしていたが、実戦配備する前に神聖同盟から
の侵攻が予想されたので、戦線を維持させるために俺達が必要だっ
たのだ。どこまでも姑息な連中だ。

捨て駒にされていたことを腹立たしいと思ひながらも、未だ裏が
ありそうだとルナの直感が告げていた。

< 続く >

ルナの航跡 23

第5章《回帰》（3 / 4）

この日の天候は優れなかった。そんな空を飛びながら、立ち込める雲の狭間に機影を確認したのはルナだった。雲の合間を縫って届く朝日を浴びて輝く機体は、近づくにつれてタイガー・シャーク2の特色を示した。王国の空軍である。恐らく、最初にブリタニアを攻撃した編隊だろう。血が血管を流れて行く音がルナの耳に響いた。途方も無く腹が立っていた。部下に何も命令を発しないまま、ルナは自らのタイガー・ルナを駆って空軍の編隊に単身で突入して行った。

これが本当の鬼人と言うのだろうか。ルナの乗機は、天才整備士のカク・サンカクがチューンアップしたとは言え、元は空軍と同じタイガー・シャーク2型の戦闘機なのだ。にも関わらず、空軍の戦闘機はまるで武装していない農薬散布用の双発機の如くであった。片側のスロットルバーを足で蹴飛ばし、絶妙のタイムラグで方向舵を力いっぱい傾げる。すると、ドッグファイトモードに設定されたタイガー・ルナは、その優れた空力特性を持つ翼面に姿勢変化の空気を存分に溜め込み、同時にプロペラ軸の角度が旋回方向に傾く。更には左右に並ぶ二機のプロペラを駆動するエンジンと変速機は、その出力とギア比を変えて旋回を補佐する動力を発生させる。もともとタイガー・シャーク2に装備されたシステムではあったが、カク・サンカクのチューンアップは徹底していた。プロペラ軸の調整角度がオリジナルを上回っており、左右のエンジンの出力とギア比の変動幅を増大させて、回転差を大きくさせた結果、能動的旋回能力が大幅に向上していたのだ。また、プロペラ軸の駆動距離が大きくなったことや、左右の回転差が増大したというのに、レスポンスの低下が一切見られないといった、非の打ち所が無い躰が成されていた。

ルナと対峙したパイロットからは、妖怪変化の如く、消えては現れ、現れては消える、と映ったことだろう。目で追うことができたとしても、上下左右に自在に動くルナ機に対し、どんな反撃ができたであろうか。次々とルナの機銃に引き裂かれた機体の破片が飛び散り、それらがルナ機の風防をかすめた。翼に染み付いた液体は四散する機体から漏れ出した燃料か、それとも乗員の血しぶきか。何者もルナを止めることは出来なかった。彼の部下でさえも。それどころか、撃ち落とす相手がいなくなった時、ルナ隊にまで飛び掛って来そうな勢いだっただ。

「隊長！ もう終わってます！ もういいんです！」
フェルチアがあらん限りの声で怒鳴った。ルナは何も応答せず、そのままブリタニアに進路を取った。激しい鼓動と息遣いが徐々に静まっていくのと反して、同属を討ったという途方も無い空しさが込み上げて来ていた。

その時、凄まじい殺気が編隊を包み、誰もが冷や汗を流しながら四方を凝視してその原因を探した。今までに感じたことが無い、悪意に満ちた殺気であった。

「怪鳥だ……。」

誰からともなく呟きが漏れた時、雲の合間から巨大な飛行機が現れた。それは空飛ぶ空母というべき規模だったが、悪魔座上の怪鳥というイメージそのものであった。翼の後には非常識な数のエンジンが並んでおり、リニアロータリーエンジン特有の腹に響くような排気系の重低音と甲高い金属音を吸気系と駆動系から響かせていた。その怪鳥が、これまでの音とは異なる低い大きな雄叫びを上げたかのように、空気を振るわせる鼓動とともに稲光に似た光を放った後、瞬時の沈黙に続いて幾つかの悲鳴が上がった。

「隊長！」

「何だ！？」

「あれからの攻撃だ！」

「攻撃だと？ あれは武器なのか?!」

混乱して取り乱した会話が飛び交っている中を、数機のタイガー・ルナが、タイガー・ルナであつたであろう破片が、海上に落下して行つた。恐るべき破壊力である。続けざまに稲光が再び空を駆け巡つた。パニック寸前であり、中には定員以上に乗員を乗せた機体があるにも関わらず、ルナ隊は散会して攻撃体制に入つていたが、それでも数機のタイガー・ルナが部品以下の単位にまで粉碎されて消えていった。どこをどう飛んだのか、その時にはルナ機は怪鳥を射程に捕らえており、その銃口から銃弾を怪鳥に浴びせていた。銃弾は怪鳥の体に幾つもの穴を穿ち、整然と並ぶ機銃座の何機かを破壊した。

「怪鳥なんかじゃない！ただ、大きいだけの飛行機だ！」
ルナの叫びも空しく、かすり傷程度ではビクともせず飛びつづける怪鳥の上面に並ぶ機銃座から、無数の迎撃弾がルナ機に放たれた。王家の血を引くルナにとつて、それをかわすのは不可能ではない。空力学を駆使した翼面が発揮する受動的旋回能力と、各種の能動的旋回補助システムから得られるその動きには、対空機銃とて照準すること自体が神業に近い。照準がムリとみるや、怪鳥の機銃座からは一面の弾幕が張られた。ルナはそれらを僅かな拳動で寸分のところでかわし続けたが、ちょうどそこに飛び込んで来たルナ隊の隊員達にとつては、針のむしろに飛び込んだようなものである。軽量なタイガー・ルナは、数発の機銃弾で四散してしまい、次々に夜明けの太陽に光る海面に飲み込まれていく。

「退避しろ！逃げるんだ！」

そんなルナの叫び声を待つまでもなく、各々が回避行動を取りながら散会していった。それはまるで、巨鳥に群がるハエのようだったろう。違いは巨鳥が武装していること。低空に、高空に、雲に、逃げ惑う隊機を見送りながらルナが怒鳴つた。

「増装タンクを未だ付けているヤツはいるか!？」

基本的にそんな機体はいないはずである。航空戦に外装の燃料タンクを付けたまま臨む者など、ルナを除いてはいない。ブリタニアへ

の残りの距離を考えると、増装を切り離して怪鳥に戦いを挑んだ機体は、撃墜を免れていたとしても、もう戦闘できるだけの燃料は残っていないはずだ。つまり、ルナのこの問いかけの意味するところは、燃料に余裕がある機体が残っていれば、怪鳥から逃げるのではなく未だ戦いを仕掛けようということなのだ。たとえ増装を付けたままの機体があったとしても、通常の隊員は申告を躊躇したことからう。

「私の機は未だ付けています！」

フェルチアである。定員オーバーであり、パイロット以外の人間を載せているため、戦域から離れていたので、増装を切り離していなかったのだ。歴戦の勇者が集うルナ隊の隊員でさえ黙ってしまったのを尻目に、彼女はあっさりと申し出て見せたのである。それは彼女がルナに対して抱く他の隊員以上の何かが成させる技なのか。

「よし、まだ一戦する燃料が残っているな。タンクを切り離して俺に続け。」

「勝機は？」

これだけルナに心酔する彼女であっても、さすがにおののいている様子が伺える。

「ヤツは俺の銃撃で被弾している。上部甲板上の銃座に破壊した所があつて穴が開いている。俺はそこに突っ込んで行って、ギリギリのところまで燃料タンクを切り離して、ヤツにぶつける。貴様は俺の後方に控えて、タンクがぶつかった所を銃撃しろ！」

「無茶です、隊長！ 飛びながらタンクを目標に、それも銃座に……」

「やるんだ、フェルチア！ 俺はできる！ そして貴様もできる！」
二機のタイガー・ルナが怪鳥に向かって突入した。

逃げたと思って油断していた怪鳥の乗員は、改めて突入してくるタイガー・ルナに面食らうことになった。その間隙を突いて、ルナ機とフェルチア機が極限にまで怪鳥に接近した。

「ここだ！」

タイガー・ルナのリニアロータリーエンジン用に強化された燃料を半分残したタンクが、ルナ機から切り離された後もまるで手が添えられているかのように正確に飛んだ。銃撃で破壊され、穴があいた状態になっている銃座があった所に、時速数百キロの相対速度で激突したタンクは変形・圧壊し、中身の燃料を怪鳥の体内に染み込ませていく。

「フェルチア！ 今だ！」

ルナ機のエンジンが許容回転数を越えて唸りを上げ、後方に焼けたオイルの匂いを残しながら上昇に転じた刹那、フェルチアがスロツトルレバー上面に配置された機銃の発射ボタンを力任せに押した。コマ数秒のタイムラグも無く、フェルチア機の機首に装備された機銃から銃弾が怪鳥に浴びせられていく。既に広範に広がっていた燃料は、安全性のために発火温度が高められているものだったが、音速を超える銃弾が金属の機体を引き裂く時に発する高温の火花によつて、いとも簡単に発火した。それが一瞬で爆発的に燃え広がつていくのを横目で確認したルナは、困難をやり遂げてやや放心状態のフェルチアを怒鳴りつけた。

「逃げるぞ、着いて来い！」

ただちに我に返つたフェルチア機は、反転上昇するルナ機を追つたが、怪鳥の上面に無数に配置された機銃も二機を追つた。ルナが再び鬼人の動きでひとしきりの弾幕を避けたが、怪鳥からの銃撃はすぐに止んだ。そしてルナが振り返つた時、フェルチア機は視界にはなかった。ルナの目には、内部から火災を起こし、猛烈な黒煙を吐きながら高度を下げていく怪鳥だけが映っていたが、それも涙でかすんで見えた。

「フェルチア……、俺の部隊に来たばかりに……。」

ルナにとつても、彼女に対して特別な感情が芽生えていたことに、ここでやっと気付いたのだ。無くして始めて気付くというのは、人の人たる所以か。前回、涙を流したのはいつだったか。ドーバー戦役の英雄とうたわれながらもブリタニアに追放された時でさえ、彼

は涼しい顔を装っていたものだ。昨晚、旧知の戦友である副官の裏切りを知り、自らの手にかけて時とも違った、彼が初めて味わう苦渋であった。長い間に溜め込まれた涙が一気に溢れ出たとでもいうように、とめどなくそれは流れ続けた。

呆然と飛び続けるルナ機の周りに三割は数を減らした編隊が集結し、そのままブリタリアに向けて進路を取ったが、誰もが言葉を失っていた。

< 続く >

想像以上だった。ブリタニアには何も残っていなかった。廃墟と化した宮殿の中で、冷静さを取り戻したルナは一人で善後策を練っていた。フェルチアを亡くした痛みに捕われないために、休んでいることはできない。

この状況を最も望んでいたのは誰か。神聖同盟？ いや、違う。彼らは所詮小間使いに過ぎない。王か？ それも違う。彼は陰謀の中心にいると思われるが、同時に王国の将来を憂いでもいる。宰相派か？ 王と一枚岩ではないのだろうか。それは有り得る。如何にも目先の損得だけで動きそうだ。しかし、リモーヤその他の軍人を手なずけることはできない。王国の兵士は優秀であり、決して騙し通せるものではない。ということは、帝国が動いたということだ。しかし、動機がわからない。神聖同盟は帝国にとっても面白くない存在だろう。名目上は属国といえ、既に神聖同盟は少なくとも軍事力において帝国と肩を並べるところまで来ている。しかし、そうであれば王国と神聖同盟を戦わせ、両者の疲弊を望むはずだ。ところが現状は王国だけが打撃を受けている。皇帝が、国としては老獪になったとは言え、往年の帝国回復という野心に目覚めたか。正当な皇族の末裔である王国をまずは殲滅し、その後には神聖同盟と事を構えるつもりか。今の皇帝ならば無い話ではない。それとも何か他の謀略があるのか。

ルナが如何に考えようと、替え玉の国王を王国に送り込み、宰相派までも取り込んで、王国に神聖同盟を攻撃させようとしているのが皇帝である、ということまでは思い至らなかった。皇帝はその上に、自分に国王から王位を禅譲させることで皇位の統一を図る

うとしていたのだが、如何に優れていようとも、ルナの想像はそこまで及ばなかった。更に、皇帝の駒であるはずの替え玉国王が内々に謀反を起こし、宰相ともども独自の謀略に手を染めているなど、分かるうはずもないのだ。しかしルナの鋭さは、謀略を見通すことではなかった。裏にも裏がありそうだということに気付くセンスがあり、それに沿ってすぐに行動を起こすことができるところに彼の本分がある。

迷っていてもしようがないと思った。帝国のカプトウ・ムンデイ（世界の首都）に向かうことにした。そこで何かが見えて来るはずだ。そもそも、双方とも正当な皇位継承者を主張する王国と帝国が並び立っていることが不自然なのだ。きっとこの不自然さから導き出された何物かが諸悪の根源のはずだ。行ってみて何も無ければ、自分の運命もそこまでということだ。確信はあつたが根拠は無い。賭けである。だから、部下は連れて行けない。ルナは一人で出発の準備に向かった。

ルナ達が宿営しているのは、今は廃墟となつた町のはずれにある元はブリタニアの軍が布陣していた基地である。町以上に徹底的に破壊されたそこには、瓦礫以外の何物も残つてはいなかった。着陸速度を遅くできるタイガー・ルナであればこそ、滑走路の跡地と周辺の道路に着陸できたが、それも至難の業であつた。タイガー・ルナのパーツを積んだカク・サンカクの輸送機は空母に置き去りにしてきた。一刻を争う脱出であり、それは止むを得なかったのだが、たとえ輸送機で脱出できていたとしても、輸送機ではここに着陸することはできなかつただろう。ブルータスが整えた補給は、与えられた時間からすると素晴らしいものだったが、ルナ隊の再起に充分とは言えない。その上にカクの補給も無いという状況で飛び立つには、隊員の機体からパーツを取るしかない。ルナが単独で行動を起こそうとしたのは、補給の面からも理に適っていた。

そんなルナ隊の宿营地から町の反対側にある丘の上、なだらかな斜面を持つ山間に逃げ込んでいた人々がいた。国政を運営していた人々であり、宮殿の地下から何とか脱出していたのだ。そこは、町の喧騒を避けて宮殿の人々が議論する時に使われる言わば別荘であった。地上部分は通常の民家にしか見えないので、王国軍の爆撃を逃れていたのだ。

「かなりの数の戦闘機が着陸した模様です。ここからでは確認できないので、偵察しましょう。」

「危険だな。複数の戦闘機を今ここに派遣するのは王国軍しか考えられない。見つかるのは望ましくない。」

「しかし、じっとしていても何も始まりません。」

「それは分かるが、今は危険過ぎる。ブリタニアの市民の生き残り、どうしていると思う?」

「……………」

「市民に見つかったら、その場で我々はなぶり殺しにされるぞ。今はじっとしている時だ。機会を待つのだ。」

「しかし、我が軍の連中は、着陸した戦闘機はタイガー・ルナだと言っています。音で分かると。ルナが戻って来たのかもしれないよ。ならば、ルナには補給が必要なはずです。」

不毛で結論の無い会話が続けていたが、その場に現れた別の男がそれを遮った。

「軍の連中が……、行ってしまいました。」

「何だと?」

「あれはタイガー・ルナに間違い無い、ルナが戻った、と言って出て行きました。」

「今はとても微妙な時で、一つの行動も慎重に構えねばならん時だが……………」

ルナに代わってブリタニアの国政を担ってきた統領は、溜息とともに決断した。

「動き出したものは止むを得ん。着陸した戦闘機隊を偵察する。」
別荘を守る者、個別に偵察に出る者、市民の生存者と出くわした時の対処方を考える者、そして、戦闘機が王国軍であった場合の処置を検討する者、それぞれを任命して即座に結論を出させた統領は、偵察隊とともに別荘を出た。

道程は静かだった。怪鳥からの攻撃は爆撃とは違って爆弾で地面が穴だらけ、ということではなく、地上の建造物はことごとく焼けただれていたが、突出物が少ない道路は、比較的元の形を保っていた。すぐに軍の連中が乗り出した車両が道に止まっているのを見つけた統領は、異様な雰囲気に分達の車も停めた。数人が軍の車両に近付いたが、中には誰もいなかった。統領が周辺の調査を命じようとしたその時、一発の銃弾が静けさを打ち破る轟音とともに統領の横をかすめた。

「何者だ？」

銃を撃つた男が瓦礫から出て来て問い掛けた。銃を振り、武装を解除するように求めながら。反撃を試みようとする一同を押さえ、統領が静かに答え始めた。

「私はブリタニアの統領だ。あんたは？」

「統領だと？ 笑わせるな！ この町を見る！」

瓦礫と焼け跡だけに成り果てた町を振り返りながら、男が怒鳴り付けた。

「町がこうなってしまったのは統領の思惑か？ だったら今、俺が貴様を殺す！」

「自分の国の町を焼きたいはずがなかるう？」

「じゃ、王国の侵略を止められなかった統領が貴様というわけか！」
男は銃を統領に向けて続けた。

「同じことだ！ 貴様が町を焼いたんだ！」

それには統領も言葉を詰まらせた。側近が反撃のために銃を構えようとした時、怒鳴り続ける男の後ろから見慣れた連中が顔を出した。勝手に偵察に出て行ったブリタニア軍の連中だったが、統領に銃を

向ける男の耳元で何某かをつぶやいた。それに男は応えて言った。

「知っているさ。この人が本当の統領だつてことくらい。」

状況を飲み込めない統領とその一派が硬直しているのを見て、男が銃を降ろした。

「俺はブルータスと言う。ルナの斥候をやっている。」

統領が思わず口を開いた。

「では、あの戦闘機隊はルナ伯爵なんだな？」

「そうさ。ルナ隊が帰還したんだ。」

「会わせてくれ、ルナ伯爵と。」

「会わせてやるさ、統領さん。だがな、さっき俺が言ったことは忘れんでもらいたい。」

忘れるものか、と統領の目が頷いた。国を、市民を守れなかった統領として、それなりの覚悟を見てとったブルータスは、統領をルナの元に連れて行くことにした。その道すがら、統領は自分が知らない情報をブルータスから得ようと質問責めにした。知っている限りを概ね話したブルータスが、念を押した。

「ルナを一人にしちゃダメだ。あんたも協力してくれ。」

「分かっているつもりだ。」

これで、補給の問題はいくらか解決するだろう。ブリタニアはタイガー・シャーク2を配備していたが、ルナが王国に招聘されるにあたり、カクバージョン化、即ちタイガー・ルナ化を進めようとしていたのだ。焼き払われた国土の中にも、幾らかの設備と部品は残っているはずだ。また、軍の連中が手足となつてルナ隊をサポートできる。小さくはあつても、ルナを中心に一つの纏まりができるようとしていた。そして、ブリタニアの統領とルナが再会した時、その纏まりはあらゆるものが分裂しようとしている状況にあつて、唯一の強固な集団となつた。確かに、ルナは何処からか分らないが冷ややかな視線を感じていた。恐らく、生き残つたブリタニアの人々が、遠目にルナ達を見ているのだろう。それも期待や羨望といった類のものではなく、恨み辛みといった思いを持って。彼等を説得す

るのは不可能かもしれない。諸悪の根源を暴き、正義を確立するま
では。こうなってしまったのは、一重に王家の統治の失敗である、
とルナは考えていた。これ以上は巻き添えを増やしたくないという
思いが強かったので、やはり単独で事を決することにしていった。

ルナがとりあえず仕立てた滑走路を歩いていると、そこに一人の
男が立っていた。ブリタニアから召集した隊員だったか。

「隊長。」

「どうした、こんな所で。」

「パイロットが滑走路にいるのは普通だろ？」

「そうか……。」

「俺にも家族がいたんだ。ところが、生きているのかさえ分からな
い。」

「……………」

「知りたいもんだ。」

「俺にもわからん。すまないが、一緒に探してやることはできん。」

「そうじゃないだろ。分かっているはずだぜ。どうしてこうなっ
たか、これからどうすべきかが知りたいんだ。」

男の顔は引きつっている。悲しみにも理由があるはずだ、彼の目が
そう言っていた。

「俺もそれを探しに行こうとしている。」

「そんなこつたるうと思っただぜ。」

隊員が腰から銃を引き抜き、ルナに向けた。

ルナはそれも仕方ないと思った。目の前の男のように、悲しみや恨
みを持った人間は数限りが無いことだろう。そんな一人の憂さ晴ら
しのために、自分の人生に幕を引くのも悪くはない。何も解決しな
いだろうが、少なくとも一人の人間の区切りを付けさせることがで
きる。それでもいいではないか、そう思っただけの人生を振り
返ろうとした時、男が再び口を開いた。

「ブルータスに言われててね。隊長が一人で飛ぼうとしたら力づく

でも止めろってね。動かないでくれよ。」

男が携帯無線のマイクに何かを呟くと、すぐに隊員達が集まって来た。

「隊長、見せてもらいたいもんですな。あんたの決断とその結果を。一人でなんて何処にも行かせねえさ。」

ブルータスの仕業であった。少々ヤツは優秀過ぎたようだが、今となってはしょうがない。

「カプトウ・ムンデイに行く。付いて来るか？」

一人の隊員が叫んだ。

「カクは何処だ？ 遠距離飛行だ。ここの整備でローマまで行けるか？」

珍しくカク・サンカクが笑っていた。ベルアーレがいるわけでもないのに。意中のベルアーレは今、ブリテン王国軍の統帥に連れ去られてしまっていたが、未だカクの知るところではなかったのだ。近いうちに統帥の魔の手はカクに伸びて来るだろう。小さくはあつても折角纏まったルナの一味は、既に崩壊の芽を植え込まれていると言っている。しかし、この時点では何物にも替え難いこの世の春を得て、カク能力は今まで以上に発揮されていた。その哀れを知る者はここには未だ誰もいなかったが。

「俺の整備がどうしたって？ 燃料が尽きない限り、どこにでも行けるさ。」

明るいカクの太鼓判を得て、あつという間にパイロット達は自らの機体に乗れ込んでしまい、パイロットで滑走路に立っているのはルナだけになった。元甲板要員が大声で怒鳴った。もうフェルチアはいないが……。

「隊長！ 出撃準備完了！ 隊長が戻って来た時には、次の出撃準備に備えておくから安心して行ってもらっている。」

統領は口を開かなかつたが、その目が強い意思を湛えていた。ルナが再び戻ってくる前に、彼はきつと生き残った市民との軋轢を解消しようとするだろう。それはムリかもしれないが、何もしないで手

をこまねいてはいないだろうことだけは確かだった。

出撃を前にして、一人で出掛けようとしていたことがみつともないことのように思えて来た。国と臣民の将来を決する行動を自分だけで成せると考えたのは、何たる自惚れか。己を恥じていた。自分には強力な仲間がいるのだ。そのこと自体を喜んでいいのか、怒るべきなのか、ルナ自身にも分からなかったが、魂が荒ぶるのを感じていた。

「俺は王族だ。本来の場所に帰らねばならない。」
自分でも何を言っているのか分からなかった。彼の血が喋らせているのか。

そもそも皇族とはルナの血統を現す。それが乗っ取られ、帝国の旧領土の一部であるブリテンに引きこもって王国を名乗って来たのだ。その王国も今や何者かに取って変わられようとしている。黙っている時ではない。原点に帰らねばならないのだ。

「皇帝に会わねばならない。俺が皇帝だって言ってるために！」
次にここに来る時は、帰って来るのではなく、皇帝として出向いて来ることになるだろう。

隊員達の静かな歓声とともに、ルナ隊が空に舞い上がった。帝国の首都、カプトウ・ムンディに向けて。

< 第5章終わり 6章に続く >

第6章《収束》（1/4）

親衛隊の隊員は、半地下の豪勢な牢屋から王室に戻り、首尾を親衛隊の隊長に報告した。隊長は王室への入室を請い、それはすぐに王に報告された。

「そうか、自ら命を絶ったか。」

宰相は驚きとともに満足そうな表情を浮かべている。

「手間が省けましたな。」

王は怪訝な表情であったが、特にこのことについて議論すべき要素も見当たらず、親衛隊の隊長を下がらせた。

王室に残ったのは、王と宰相に軍の統帥を加えた三名である。軍の統帥を王の新たな謀議に参画させるために、王の脅迫や宰相の説得は不要であった。彼にとって、リメス・ジンという最新兵器の活用こそが魅力であり、その目的は二の次なのであった。軍を統括する者として最も相応しくない男が統帥を努めていることに王は辟易としたが、宰相すらもその思いは同じのようであった。

「ローマを攻めますか。」

軍の統帥が目を輝かせて切り出した。極めて分かり易い性格である。

「果たして、できるかな？ リメス・ジンで。」

宰相は言葉で疑問を投げかけたが、彼の心は死の業火に焼かれる『世界の首都』を見ていた。

「まあ、待て。カプトウ・ムンデイと呼ばれる街だ。人口も多い。いきなりあそこを攻めるのが良策とは限らん。」

王の指摘に、宰相も軍の統帥も我に返ったようだ。大将のいる中心を攻め落とすのは、確かに兵法としては王道かもしれない。しかし、その後のことを考えると、無血開城が最も望ましい。

「どこで我々の力を見せますか？」

新たに君臨する者として、圧倒的な力を誇示しておく必要があり、どこかを犠牲にするのも止むを得ないということか。確かにそれも王道なのだろう。

「西ケルトはどうだ？ 公爵が国王と称して自立しようとしているらしいが、内部では分裂しているとも聞く。帝国も神聖同盟も表向きは手出ししていないようだが、斥候は掃いて捨てる程に集結していることだろう。」

宰相が顔で同意を示しながら、言葉でそれを繰り返した。

「妙案ですな。あそこを一気に焼き払いましょう。その結果は斥候どもが自国に詳細まで伝えてくれることでしょう。」

「軍としてもその方針を支持します。リメス・ジンは王国から直接ローマまで攻撃に行けますが、西ケルトなら近いので不測の事態へ動的に対処することができます。」

軍の統帥からも支持を受け、王が続けた。

「よし、基本路線はそれでいく。詳細を詰めるでしょう。」
「皇宮からローマの街並みを見下ろし、臣民の歓声を聞く場面が目に見えようですぞ。」

宰相の言葉である。途中経過を無視して結果を想像する。何とも幼稚な感性ではないか。王室という狭い所で全てを取り仕切ってきた者が、現場感覚の欠如故に陥りやすい落とし穴である。元々はそういったことを敏感に感じ取る能力を有していた王も、この時点では超兵器の虜になってしまっており、宰相や統帥の過ちを見過ごしてしまっていた。

『王家の秘蹟』を司る玉石。これが秘蹟を受けた王族によって発動していることを検知したのは、現代科学の力である。本当の王が秘蹟を放棄し、ルナがブリタニアに追放された時、玉石は停止した。神殿の神官が、狂気じみた悲鳴とともに玉石の沈黙を告げた。その時は、王も宰相も不思議が一つ増えた程度にしか考えなかったのだが、王家の伝統を守るため、それは一般には秘密にされたのと同様に、原因の究明が始められた。結論から言えば、原因は未だに不明

である。しかし、副産物があつた。千年以上に渡つて、玉石を帝国に伝えた東方の王国から数えればそれより遙かに長期間に渡つて、『振動』し続けてきたエネルギー源とは何なのか。それすらも解明されてはいないのだが、その振動を活用する手法ならば考案されたのである。水晶と電気の関係にも似た、しかしながらそれとは比較にならない無限と言つても良い力、それもただ振動するだけではなく、自然に働きかける効力も有していることが分かつた。それを活用できれば、人類はエネルギー問題を解決する可能性を入手したことになる。ところが実際には、殆どの発明がそうであるように、それは軍事に活用されることになつた。そして、リメス・ジンが生まれたのである。従来では不可能な規模の航空機を飛行さしめ、全く新しい形の攻撃兵器が搭載された。『空雷砲』である。

こういつた経緯を見る限り、人という生き物が『平和』に辿り着くのは不可能なのではないかと悲觀的にもなり、その感覚をこれまでの歴史が裏付けているようでもある。当事者達がこういつたことを考えるには、何が必要なのだろうか。

王室から退出した親衛隊の隊長に隊員が近付いて耳打ちした。自死した本当の王を看取つて来た隊員である。

「隊長、お話があります。」

「そうだろう。場所を変えるぞ。」

隊長も予想していたと見え、王室の近くに設置された親衛隊の詰め所に二人が入つて行つた。

「地下牢の男、亡くなられてしまいました。彼こそが陛下のようです。」

「ようです？ 曖昧さが許されるような発言ではないぞ。」

「あの服装とお顔、間違いありません。」

「では、王室の中におられる陛下は誰なのだ？ 私にはあのお方が陛下に見える。」

「分かりません。」

隊員が自らの直感に従って進言しているのは明らかだ。隊長とて、最近の一連の騒動に怪しさを感じてもいるし、隊員の直感が正しいだろうという確信もある。

「私は親衛隊の隊長として、どこまでも陛下に忠実であらねばならない。そして、今王室におられる陛下こそが、私にとっての唯一の陛下なのだ。分かるな？」

隊員は諦めたような表情で僅かに頷いた。隊長の言葉は、自分を処刑することを意味している。親衛隊なのだから、これは当然の帰結である。早まってしまったことを後悔するのは簡単だが、彼は自らの信念に従ったことを誇りに思うことにして、姿勢を正した。そんな隊員を見つめながら、隊長が続けた。

「私は何も聞いていない。よって何もしない。今まで通りだ。お前も元の配置に戻れ。」

それだけ言うと、隊長は詰め所から出て行った。一端死を覚悟したこの隊員は、この成り行きに躊躇したが、すぐに隊長の意図を汲んだ。元の配置とは、本当の王に従え、と言っているのである。感謝と敬意を込めて敬礼し、彼も詰め所を出て行った。王室に残る者も必要なのである。それは、情報の収集という意味と、親衛隊の翻意を気取られないためという意味で。親衛隊の隊長が従来通りに詰めていけば、少なくとも暫くの間は親衛隊に疑問を抱く者はいない。しかし、疑問を持たれた瞬間に、隊長をはじめとして王室に残った親衛隊には、死を伴った結末が訪れるであろう。そのような重大な結末をも含めて、瞬時に決断を下した隊長の覚悟と姿勢に対し、この隊員の目からは涙がこぼれ落ちたが、それは隊長の決意を無駄にしてはならないという強い意志の現れでもあった。この隊員はただちに信用できる仲間を組織した。もともと親衛隊には志の高い兵隊が集まっているという事実が、彼を後押ししたのである。そして新たに組織された部隊が向かう先と言えば、本当の王が亡き今となつてはルナの元しかないというのも必然であった。王室に集まっていたものと親衛隊独自の情報網を駆使して得られた情報から、彼らは

ブルータスに繋がる糸を見出すことに成功した。通常であれば、如何に彼らの情報網が優れていようと、すぐにブルータスへの道が開かれることは無かったであろう。リモー艦隊から脱出したルナを救出するために、ブルータスがなりふり構わず動いたために露見した糸を辿ったのである。そういう意味で、彼等もついていたと言わねばきだろ。隊長が詰め所から決死の覚悟で出て行ってから数時間後には、隊長の意思を継いだ隊員達が親衛隊の専用機でルナの元に飛び立って行った。

ブリタニアの地を飛び立って編隊飛行に移ったルナは、海上に出て南下し始めたところでブルータスからの極秘通信を受けた。

「何だ、ブルータス？」

諸悪の根源を付くために、現在の歪んだ情勢を生んだ根本に迫ろうとローマに向けて飛び立ったのである。隊員ともども強い意志と興奮に包まれていたルナは、ブルータスからの通信に水を差されたような気になり、素っ気無く応えた。ブルータスとてその気持ちが分からないわけではなく、冷静に説明し始めた。

「進路を変えて欲しいんだ、ルナ。」

「今更だぜ。ブリテンの上を通らない範囲で最短距離を行くさ。」

「それはちょっと待った方が良くなった。北を回ってくれないか。」

「そんなことをしてみろ。燃料も心配だし、ブリタニアに帰る前に補給した地点をかすめることになる。俺達の行方を探すのに躍起になっっている王国軍と出くわしてしまうぜ。」

フェルチアを失った付近には近付きたくない、という本音は口には出さなかった。

「いや、計画的に出くわしてもらいたい相手がいるんだ。ルナ、前はやつぱりすげえよ。」

要領を得ず、ますますルナが不機嫌になるのを見越してブルータスが続けた。

「親衛隊から俺の情報網に接触があった。一口乗せろってさ。」
これには流石のルナも閉口した。親衛隊が接触して来るというのは
全くの想定外であり、何が起こったのか分からなかったのである。

<続く>

第6章《収束》(2/4)

「前に王が偽者だつて言つたらう？ 親衛隊もそれを嗅ぎ付けたんだとさ。」

国王に忠誠を誓う親衛隊として、王が偽りであると判明したのなら、王の長兄であるルナに同調しようとするのは道理に適っている。しかし、である。少し冷静になってルナが切り返した。

「三つ説明してくれ。一つ、なぜ今の王子でなく俺に接近するのか。一つ、王が偽者と分かったのなら、なぜ親衛隊自身でそれを正そうとしないのか。一つ、これが一番重要だが、なぜお前はその親衛隊とやらを信用したのか。」

「全て理由があるさ。今聞くか？ 時間は無いんだぜ？」

ブルータスが優秀であることは、誰よりもルナが認めている。しかし、王族とは孤独なもので、誰であっても疑ってしまうという側面を持つ。全面的にブルータスを信用して良いものか、と暫し考え込んでしまった。そんな様子を見抜いたブルータスが付け加えた。

「そのままローマに行ってくれてもいい。それならそれで、俺がお前を全面的にバックアップすることに変わりはないさ。だが、今は俺を信用して進路を変えてくれた方がもつといい。」

ブルータスを傷つけてしまったと思つた。これが今まで献身的に仕えてくれた者への仕打ちかという思いと、情に流されてはいけないという理性が、ルナの心の中でぶつかっている。そして、それには冷静な部分が決着をつけた。

「いいさ。どうせこのままローマに行つても、それでどうするってのは無いんだからな。お前の言う通りにしてみるさ。」

「いい決断だ。きつと俺に感謝することになる。」

「言ってくれるぜ。で、俺はどうすればいい？」

「これからの進路を送るから、詳細はそれを見てくれ。要は、暫く行ったところで親衛隊の編隊に出くわすことになるんで、合流して一端ここに戻れ。」

「俺達を探している王国軍を連れて帰ることになるかもしれないな。」

「それは困る。そんなのは振り切ってから帰って来てくれ。ついでに、お前が見て信用できないと思ったら、親衛隊の編隊も落とすしまえ。」

ルナは一瞬でもブルータスを疑ってしまったことを恥じていた。この男は信用していい。一蓮托生、いい言葉だ。仲間とはこういうものだ。

「問題は、我が王国に同盟を求めている西ケルトに攻め入るということ、この理由をどうするか、ですな。」

既に西ケルト侵攻の作戦はできていたし、皇帝との交渉カードも概ね準備ができた。残ったのはこの問題だけだとの認識を宰相が披露したのである。それを受けて軍の統帥が不思議顔をして応えた。

「何を心配することがありますか。西ケルト公爵は、畏れ多くも『王』を名乗っているのですぞ。それだけで万死に値する。」

王が続きを受け取らざるを得なかった。

「しかし、彼が名乗っているのはケルト民族の王だ。帝国の皇族を謳っているのではない。」

「それは認められないでしょう、陛下。ある程度の主権を持った民族は他にもあります。それを統括するための爵位ではないですか。」

ケルト民族の元首として、公爵のままであるべきだったのです。王を名乗った時点で、それは皇位への侮辱以外の何物でもない。」

「それは分かる。余とて同じ意見だ。しかし、民がどう受け止めるか、というのが問題なのだ。」

宰相が諦めた様子で言い放った。

「恐らく民は、西ケルトへの侵攻を王国の暴挙と断ずるでしょうな。助けを求めた者を踏みにじったと。」

軍の統帥が何か言おうとしたが、宰相の言葉が続くのが先だった。

「少々乱暴ですが、ここは勝者の論理で押し通すしかありませんまい。」

王も心中では同じ結論に至っていたのか、すぐに同調した。

「ブリテン王国には伝統がある。王国が西ケルトを攻撃したことを民が知る頃には、既に皇帝を屈服させているはずだし、リマス・ジンの圧倒的な破壊力を見せ付けてもいる。これらを以ってすれば民は黙るはずだ。民の声は王権が弱腰になると大きくなる。強権発動でいくしかあるまい。」

「その通りです。皇統が統一されれば世も平和になりましょう。さすれば、平和が民から怨念を取り払うに時間はかかりませんまい。」
この結論には軍の統帥も満足な様子であり、話題を変えた。

「リモーの艦隊は、既に巡洋艦艦隊と合流し、空母にも新たに航空編隊が着艦しております。これからドーバー海峡に向かわせます。」

「よし、リマス・ジンの編隊は後どれくらいで出撃できるのだ？」

「二日後には。」

「ルナ隊の整備士を招聘して、リマス・ジンを強化する件はどうなつたのだ？」

「進めてはありますが、それは次の機会で見たいかと存じます。既にリマス・ジンは無敵です。」

「良かろう。明後日にはケルトの地で帝国に圧力を掛けるといっわけか。」

「そして明々後日には、皇帝が庶民に落ちぶれて陛下の前に跪きます。」

王も満足顔になった。

「その後には、神聖同盟の解体に取り掛からねば、な。」

「忙しいことですね、陛下。」

「全くだ。」

王室の笑い声が扉の外にまで漏れ出た。ブリタニアを焼き払ったりメス・ジンが、その帰途においてたつた二機のタイガー・ルナに撃墜されたということは、彼らには興味がないことなのだろう。

ルナの驚異的な検知能力は、親衛隊の飛行隊を誰よりも早く見つけさせた。高度の取り方と雲を利用して、親衛隊が気付いた時にはルナ隊が彼等の後ろに付いていた。

「お前達の機体は親衛隊の専用機と見たが、こんな所で何をしている？」

後を取られて親衛隊は動揺していたが、懐かしいルナの声を聞いて襟を正して応えた。親衛隊という立場上、皇太子時代のルナを皆知っていたのだ。

「ルナ殿下とお見受け致しましたが、間違いありませんか？」

「質問しているのは俺だ。勘違いするな。」

「は。失礼致しました。我々は親衛隊の有志です。殿下とご一緒させて頂きたく推参致しました。殿下の斥候殿からお聞きになっておられませんか。」

「俺が質問してるって言ってるんだぜ。」

ルナの機銃から銃弾が放たれそうな勢いにもめげず、親衛隊は一糸乱れず隊列を組んで飛び続けていた。

「重なる無礼をお詫び致します、殿下。」

「いいだろう、俺に何の用だ？」

「殿下、冷静にお聞きください。父君が自死されました。」

「王が？ なぜだ!？」

「王室に不正が蔓延っております。陛下はその御命を以って不正を是正されようとなさったのです。」

「今は国王不在ということか？」

「はい。しかし、王室には王を名乗る者がおります。」

最悪の結果と思えた。国王が自ら命を絶つなど、千年来無かったこ

とで、あつてはならないことだった。

「陛下の御意志、くれぐれもお汲み取りください。陛下は殿下に後をお任せになられたのですぞ。」

あの親父はいつもそうだった、とルナは思う。結局、ルナには過剰の期待を寄せ続けるのだ。父親の息子への思い、皇族と言えどもその気持ちに変わりはないということか。

「殿下、王国を立て直さねばなりません。」

「宰相は、あの男はどうしているんだ？ あの男もその不正とやらの一味なのか？」

「我々はここに来る前、王室の前で王室憲兵隊と一触即発状態にまで陥りました。その時点では未だ王が偽者と気付いていなかった国王派の我々親衛隊と、宰相派の憲兵隊です。」

「ということは、宰相は王が偽者だと気付いたということか？ それで争いになったと？」

「もし、親衛隊と王室憲兵隊が衝突すれば、私はもうこの世にはおりませんまい。」

「両派に協定が成った、ということだな。」

「はい、宰相の人柄からして、王を名乗る男に与したものと確信しております。」

「王子は、あいつは無事なのか？」

「不自由ではありませんが、ご無事です。親衛隊がお守りしております。」

「そうか。無事なのだ。しかし、王宮に残った親衛隊もいるということなのだ。親衛隊も分裂したということか？」

「そうではありません。決して！」

「それなら、貴様達がここに来てしまったことが明るみに出れば、残った親衛隊は大変なことにならないか？」

「残った者はそれも覚悟の上です。」

言葉の上では、この親衛隊員の言うことは辻褃が合っているし、熱意も伝わって来る。あとは目を見て話してみなければならぬ。こ

の段階でルナは、ブルータスの進言に従うことに決めた。

「よし、進路を指示するからその通りに飛べ。俺達が親衛隊の後から着いて行く。」

その時、遠くに飛行隊を見つけたのはまたしてもルナだった。そして、回避して身を隠す前に先方もこちらを見つけたらしく進路を変えて近付いて来る。それを確認したルナ隊の隊員が反応した。

「隊長、見つかったまっただぜ。ありゃ、王国の空軍編隊だ。叩き落すかい？」

それも止むを得ないが、どうも様子がおかしい。攻撃や防御のフォーメーションを取っていないし、増装も切り離していない。そうこうしているうちに空軍編隊はある程度まで近付いて来たが、すぐ去って行ってしまった。それを見て親衛隊が口を挟んだ。

「殿下、ご心配なされますな。我々がお供しております。」

そうだった。ルナ隊は今、親衛隊編隊の後を飛んでいるのだ。どこから見てもすぐにそれと分かる親衛隊の専用機編隊。後に空軍の編隊を率いて作戦稼働中の親衛隊にしか見えないはずである。親衛隊の作戦は指揮系統が違つので通常の軍には知らされないし、そもそも国王直轄の親衛隊にいちやもんを付けるような物好きはいない。というわけで、安心してブリタニアに帰れるわけである。

誇り高い親衛隊に守られながら、ルナ隊は再びブリタニアに向けて進路を取った。ルナ隊も親衛隊も、これはあたかもルナを王に戴いた直営編隊のようだと思い、これからのルナを暗示しているものと考えていた。ルナの決意に同調してローマに向けて飛び立ったにもかかわらず、王国の領空から出る前に引き返すことになった。ルナ隊の隊員は、詳細は分からないがルナのことだから特別の理由があるはずだと思いつながら、肩透かしを食らったような気持ちになるのを押さえられなかった。団結していることが最も大事な時期にあって、それは好ましくないものであったが、ローマに行く前から親衛隊を侍らしてしまうルナの力量と運に、隊員達の心は再び昂ぶるのであった。

< 続
>
>

ブリタニアの大地は相変わらず瓦礫と焼け野原であった。王国空軍の偵察が来てもすぐにはそれと気付かれないように、ブルータスをはじめとしたルナの仲間がカモフラージュした滑走路と倉庫は、そこにルナ隊の基地があることを示すものを何一つ見せてはいなかった。そんな基地の地下壕の一室で、ルナとブルータスが今後について話し合っていた。

「多くを語る必要が無いと思うが、どうだ、ルナ？」

「親衛隊についてはそうだな。直接会って話しを聞いてみるが、彼等が仲間であることに疑う余地は無いと見ていい。」

「そうだな。さて、これからどうする？」

「俺達のローマ行きは、八方塞を打開する最後の望みだった。だが、策があつたわけじゃない。」

「要はやぶれかぶれだったってことだ。」

「そういうことになる。だから俺一人で行こうとしたんだ。」

「ルナ、お前は一人じゃない。お前がどう思っているようにとも、お前には皆が着いて来る。」

「認めるさ、ブルータス。お前だけじゃなくみんなの気持ちが俺に集まっているのを感じている。」

「そういうことだ。ただ、お前に着いて行こうとする理由は様々だぞ。お前が抱く未来像に同調する者は少数派とみていい。」

「だろうな。未来像といっても王権復帰という概念だけで具体性は俺にも未だ無いのが本当のところだ。」

「先が思いやられるぜ、全く。」

「そう言うな、ブルータス。こんな話ができるのはお前だけだ。」

「信用してくれるのは有り難い。これからも変わり無くたのむぜ。」

「こちらこそ、な。これからは今まで以上に働いてもらうことになる。」

「そのつもりだ。とりあえず、お前の元に皆が集まっている。今はそれだけでいい。事を成した後にお前が求心力を発揮してくれれば、集まった理由なんてどうでもよくなるはずだ。」

親交を深められてはいるが結論の出ない会話が続けていたその時、入室を請うノックが響いた。ブルータスがそれを待っていたように応じる。

「やつと来たか。」

言いながらドアを開けると、そこにはブリタニアの統領が立っていた。

「首尾はどうだい？ 統領さん。」

気軽なブルータスの問い掛けを無視して、ブリタニアの統領がルナの前に進み出た。

「ルナ様、三つ報告せねばなりません。」

「聞こう。いい話か？」

「その判断はお任せします。」

憔悴しきった統領の顔から、彼では判断できない何かがあることを理解したルナは、敢えて穏やかな表情で続きを促した。

「民の怒りが静まりません。」

ブリタニアの民の動向を探っていたということのようである。怪鳥の攻撃以来、民は為政者の無能に怒っているのだ。それを確認し、収めようとしたのだろうか。

「生き残った民は、幾つかのコミュニティを設けて自活しております。接触を試みましたが、半数からは接触することすら拒否され、残りの多くについても殺気だっております。」

「ここブリタニアに拠点を築くことは難しい、ということか？」

「時間が必要です。併せ、民を納得させるモノが無ければなりません。」

「親衛隊が合流したんだ。王の拉致と暗殺をぶちまけて、ルナを救

国の義士に仕立てることもできるだろう?」

ブルータスである。ルナもその手はあると思う。照れくさくはあったが、そんなことを言っていられる状況ではない。

「長期的には可能です。ただ、我々には今この時に力が必要なので。」

統領の言っていることも正しい。明日にも王国の軍隊が再び攻め入って来るかもしれないのだ。ルナの足取りが偽の王に辿られるのは時間の問題でしかない。

「民の中から確保した同調者は少数ですが、良識ある彼らは各々の業界の実力者でもありました。我が軍は残り僅かとは言え全て参集しており、新たな同調者の参画で補給や整備に関する当面の問題は解決したと言えます。」

「しかし、戦争できる状態ではない。そう言いたいのだな?」

「残念ながら……。民の支援が無くしては戦えません。」

「もとよりさ。王国とブリタニアでは国力が違い過ぎる。正面からぶつかっても結果は見えている。うまい手を考えよう。」

「一つ目の報告はこれまでのようだった。統領も彼なりにブリタニアの再建に動いてくれているのが伝わって来ていた。」

「次は?」

「はい。今お話したブリタニアの状況は、予想できたものです。むしろ、少ないながらも有力な同調者を得たのは幸いと言うべきでしょう。」

「俺もそう思う。で?」

「ブルータスとも事前に相談したのですが、纏まった基盤を確保するのは難しいと思われます。」

今回の件があるまで、ブルータスと統領に面識は無い。質は違うが、他人を疑うことを真髄とする役目の両者が、ルナ抜きで事前に打ち合わせをしていたという。緊急事態にあつて、人は持てる能力を發揮するものなのか。あるいは、普段は猜疑心と謀略に包まれ、持てる力の發揮場所や方向を間違えているのか。ルナはそんな余計な感

概を持ったが、すぐに本題に頭を切り替えた。

「皆が俺の元に参集してくれていることに感謝している。やぶれかぶれの行動に出られないというのも理解している。だからこそ基盤が必要で、基盤が無ければ何もできないぞ。」

「おっしゃる通りです。私どもも基盤を作らないと申し上げているではありません。」

「ブリタニア以外の地に、ということか？ この地を捨てると？」

明らかに不機嫌になって行くルナを見て、ブルータスが割り込んだ。

「統領さんはそうは言っていないぞ、ルナ。ここだけじゃ攻めも守りも不十分だつて言っているんだ。」

「そうです。纏まった基盤が持てないのなら、分散させれば良いわけです。」

「そこで、俺と統領さんで相談して、基盤に成り得る他の場所を探したわけさ。」

「結論から申し上げます。西ケルトです。」

「今あそこは大変なことになっている。西ケルト公爵を王に仕立てて、神聖同盟から独立しようとしているんだ。」

状況を知らないルナが反論する。

「独立だと？ そんなことは不可能だ。神聖同盟が認めないだろうし、力で押さえ込まれちまう。」

「そうでもないのです。事実、神聖同盟の現地総督は殺されました。」

「神聖同盟は、王国との戦争準備でケルトに軍を派遣できない。帝国もあいかわらず他国には干渉しないと格好を付けている。」

「なら、独立できるじゃないか。王権の乱立は俺としても認められんがな。」

「そんなに簡単ではないようです。ケルト内部が分裂していて、無政府状態に陥っています。」

「それに、神聖同盟だつてただ黙っているわけじゃない。斥候やら

何やらを派遣して、分裂を煽っているようだ。」

「状況は分かった。だが、なぜそこが俺たちの基盤になるんだ？」

「親衛隊からの情報では、西ケルトは独立に動き出した時点で、王国に対して神聖同盟との共闘を求めて同盟を申し出て来たということ。王室はそれどころではなく無視しているようですが、ルナ様が名乗りを上げれば、少なくとも今は分裂している西ケルトの各派閥から、半数は参集することでしょう。」

悪い話ではない。しかし、ルナの不機嫌顔はあいかわらずである。

「ケルトにも基盤を持ったとして、それでどうなる？俺にゲリラになれと言つのか？」

「万事は大きな目的のためです。手段を選べる状況ではありません。」

「もう話は進めているんだな？俺が何と言おうと。」

「時間がありません。事は急を要します。」

暫く考え込んだルナは、おもむろに態度を急変させた。

「分かった。よくやってくれた。それしか無いのなら、それで行く。それで、実際のところ西ケルトはどうなんだ？」

「信用できる者を派遣してあります。今までに入っている報告では、既に幾つかの派閥が同調して来たということ。」「

「いいだろう。そっちは任せる。ブリタニアとケルト、二箇所の基盤を持ったとして、さて、どうするかだな。」

「ルナ、慌てるな。報告は三つと言ったはずだ。親衛隊を部屋に入れるぞ。」

ブルータスの招きに応じて、親衛隊の代表が入って来た。

「殿下、お会いできて光栄です。」

「その『殿下』はやめろ。俺は皇太子じゃない。」

「は。我々としましては、今後『陛下』とお呼びさせて頂きます。」「
そういうことなのだ。今回の件でルナの元に参集する者全ては、ルナを王、あるいは皇帝として擁立しようとしているのだ。そしてルナの目的もそうすることによって成就する。ルナは王権そのものに

興味は無かったが、陛下の称号で呼ばれることを領いて了承した。

「こちらの親衛隊の方々にお話を伺ったところ、親衛隊の隊長と一部は王宮に残っているそうです。」

「聞いている。分裂したのではないんだよな？」

ルナの言葉を継いで親衛隊の代表が応えた。

「王室の連中に我々の翻意が悟られぬように、決死の覚悟で残ったのです。」

ブルータスが付け加える。

「王宮に残った親衛隊、見殺しにするのは惜しいよな、ルナ。」

ブルータスの言わんとすることを悟ったルナが後を受けた。

「王国の中には、王宮に残った親衛隊の他にも俺達と同調者がいるんだな？」

「親衛隊の隊長に連絡を取った。ルナがここにいることを確認して、彼等はルナに忠誠を誓って見せたさ。そして、既に同調者の確保に奔走している。」

「彼等にはどんな役割を？」

「王国の指揮系統を混乱させる。俺達が帝国に向かうにあたり、背後を心配しなくていいようにするためだ。」

「後は帝国に対してうまい奇襲策を考えればいいってことか。」

「そうだ、ルナ。」

「その通りです、ルナ様。」

「そこに妙案を、陛下。」

部屋の中にいる各々が熱い眼差しでルナを見つめていた。ルナも何とかなるような気がして来ていた。この連中とならやり遂げられないや、やり遂げねばならない。既に多くの犠牲が出ているのだ。これで成功させねば犠牲者が報われない。

「ところで、親衛隊は兎も角として、ケルトに派遣したヤツは大丈夫なのか？ 大役だぞ。」

「心配するな、ルナ。お前の命の恩人が行っているんだ。」

確かにルナには驚異的な強運と実力があるが、それでもこれまでに

助けられたことは数え切れず、多くの人に支えられてきたことは認めねばならない。ブルータスが信用できると言うのだから、それ以上は追求する必要はないだろう。今は先に進むことだけを考える時である。

< 続く >

第6章《収束》（4 / 4）

「こんな所に親衛隊の隊長が自らお出ましとは珍しいですな。」
「世間話をしに来たのではない。」

そこは軍情報部の総本山とも言うべき所で、王宮から少し離れた軍本部の一角であった。親衛隊は独自の情報網を持っているが、総合力で軍には到底適わない。ルナの元には様々な勢力が終結して来ているが、戦力や持久力において国軍の足元にも及ぶまい。そうであればこそ、情報力が必要なのだ。親衛隊の隊長は、まず軍情報部が握っている情報を収集し、彼等の動きを把握しようとしていた。水面下から接触していたところ、軍統帥直轄の極秘作戦が進行していることを掴んだ。どうやらそれは誘拐・拉致作戦のようだが、ルナに関係している何かのようなのだ。統帥直轄ということは、末端にいくら接触を試みても核心には届かない可能性が高いと踏んだ隊長は、思い切つて情報部の統括室にやつて来たのだ。情報部の部長は親衛隊の隊長がやつて来たことに驚きを隠さなかった。一般には、誇り高き親衛隊は汚れ仕事の多い情報部とは対極に位置付けられており、両者が接触するのは極めて稀なのだ。

「ブリタニア辺境伯が出撃した後、港付近で進めている情報部の作戦について、伺いたい。」

部長は顔色一つ変えなかったが、空気が一変したのを隊長は見逃さなかった。

「何のことやら……。」

「建前はいい。きつと我々はお役に立てると思う。」

「たとえそうであったとして、私があなたに作戦の内容をお話するとお考えか？」

「……やはり無理だろうな。」

踵を返して退室して行く親衛隊の隊長を、部長は満足げに見送ったが、隊長が扉を開けた刹那、親衛隊が突入して来たので、部長の表情は笑顔から恐怖に一変した。

「何事だ、これはっ!？」

「すまない。お互い役目は違っても王国の治安を預かる身、こんなことはしたくなかったのだが……。」

隊長のそんな言葉とは裏腹に、親衛隊の隊員達は瞬く間に情報部を占拠してしまった。

「貴様、クーデターでも起こす気か！」

「そのつもりだ。」

あっさとり言いかけた隊長に部長は言葉を失った。しかし部長の目は、残された抵抗手段を求めてせわしく動き続けている。

「無駄な抵抗はやめた方がいい。我々はここを完全に制圧している。」

「完全だと？ 俺は貴様等と違う！ 情報部の軍人として、陛下の信任を裏切ることには決していないぞ！」

部長のベルトには、特別な事態が発生した時にそれを知らせるアラームのスイッチが付いている。そのスイッチはクーデターのようなレベルの事態を想定したもので、数世代に渡って押されたことがなかった。部長自身もその存在を忘れていたが、親衛隊の隊長との口論の間に思い出した。そして今、それは想定した目的のために押された。親衛隊はスイッチが押されるのを止められなかったのだ。親衛隊と自分の立場が逆転したという思いから、部長の口調は落ち着きを取り戻した。

「これで終わりだ。陛下を裏切ろうとしたことを後悔するがいい。」
言いながら部長が歩き出した。多くのディスプレイが並ぶ情報部の統括室は、身動きがしづらい。銃口を部長に向けている親衛隊の隊員は、部長の歩みに沿って後ずさりしたが、その度に机や椅子にぶつかってしまった。そのみっともない姿が部長をより高慢にさせた。
「どうした、親衛隊。腹いせに俺を撃つか？ それとも親衛隊用の

飾りが付いたその銃には弾は入っていないのか？」

部長の高笑いが響くと同時に、統括室の二つの扉から情報部の保安隊が突入して来た。凄まじい銃撃戦を予想した部長は、巻き添えにならないように付近の机の下に隠れた。しかし、突入の足音が静まると、部屋には機械の音だけになった。そして、それを打ち破ったのは突入して来た保安員の言葉だった。

「部長、正義は親衛隊にあります！ 目を覚ましてください！」

一瞬の沈黙で状況を悟った部長はゆっくりと立ち上がった。

「まさか、ここまでやっているとは……。」

親衛隊の隊長が部長の前に進み出た。

「やっとお話ができる環境が整った。話を聞いてもらえますかな、部長？」

「話せる環境？ 脅迫や拷問のことを親衛隊では『話』というのか！？」

「そんな野蛮なことはしないし、我々は貴方が協力してくれるものと確信している。」

部長は考えた。如何に親衛隊とは言え、保安員までをも抱き込めるものだろうか？ 部長以外の何者も信用しないように訓練されている保安員に限って、そんなことは常識的に有り得ない。しかし現実にはそうだった。つまり、常識と現実の辻褄を合わせる何かが存在するのだ。それが何なのかを知りたいという好奇心は、情報部の人間であればこそ尚更なのであった。

それから暫くの沈黙を伴った睨み合いが続いた後、親衛隊の隊長と情報部の部長は、どちらからともなく会話を始めた。長い時間を掛けて話した結果、互いの情報を突合せて見えてきた輪郭に双方ともが啞然とした。

「首謀者は、皇帝ということか……。」

「玉石を兵器に流用するとは……。」

これらの情報は、ただちにルナの元に送られた。

親衛隊が軍情報部を押さえた翌日には、ベルアーレが救出された。彼女が隔離されている部屋に親衛隊が踏み込んだ時、彼女を拘束していた二人の情報部員は驚きの余り何の抵抗も見せなかった。しかし、ベルアーレが見せた、引き裂かれた衣服で何とか素肌を覆い隠そうとしたいじらしい仕草と、情報部員に向けられた獣を見るかのような視線が、彼女に起こったであろう屈辱を充分に物語っていた。それを確認した親衛隊の隊員は、情報部員の脚を撃ち抜いて動けなくしてから、そっとベルアーレに銃を渡した。通常はこんなことはない。情報部員を二人とも隊長の下に連行するのが彼の役目であったし、また、悲劇直後の女性は自らを撃ち抜いてしまう可能性があるからだ。ところが、ベルアーレの目に強い意志を感じ取った隊員は、ことの結末を彼女自身につけさせることにした。それが最良と思えたのだ。泣き叫ぶ情報部員の股間に向けられた銃口から発せられた銃弾は腿に当たり、その情報部員は激痛の余りにそこで気を失った。もう一人の情報部員にゆっくりと銃口が向けられていく過程で、彼は恐怖の余り失禁の後に気を失った。ベルアーレは銃を手放し、復讐をやり遂げるよう勧める親衛隊の手を振りほどき、そのまま立ち去ってしまった。その背中を追われることを拒否しており、親衛隊は言葉を掛けることさえできなかった。

この一部始終は、親衛隊からブルータスを経てルナに伝えられた。ベルアーレの件について、ブルータスはカク・サンカクに伝えないようにと進言し、ルナもそうすべきかとも思った。整備を含めて技術の要であるカクが以前にも増して力を発揮しているのが、ベルアーレに拠るといえるのは間違いない。そして彼の精神は、決して打たれ強いわけではないのだ。それでもルナは、事実を伝えることにした。ベルアーレが行方をくらましてしまったことまでをも含めて。話を聞かされてカクは、大声を上げて泣いた。そしてそれは夜中まで続いた。誰も慰めの言葉を持っていなかった。あまりに悲壮なその様子から、このままカクは死んでしまうか、あるいは失踪してしまうだろうと思われた。ルナもそう思い、また、それも止むを

得まいと考えた。そして、今回の謀略に対して一層の憎悪を抱くのであった。

翌朝、ルナの前にカクが現れた。タイガー・ルナの格納庫から出て来たらしく、手も顔を油まみれになっている。カクにとってそれは珍しいことではない。増してや玉石を使った兵器の詳細を聞かされた後であれば、普段なら喜び勇んで機械と戯れたことだろう。泣き疲れた後であってさえカクが向かった先が格納庫であり、結局は機械だけが彼の心を癒せ得るということが、一層の悲壮感を醸し出していた。

「隊長、これであんたも悪魔の仲間入りだ。玉石の出番さ。」

それだけ言々とカクは、ルナの胸元のネックレスにあしらわれた玉石に手をかけながら、倒れ込んで眠りに付いた。近くで見守っていたブルータスが訝しげに問い掛ける。

「何だ？ カクの野郎、いかれちまったのか？」

ルナはカクの看病をブルータスに頼み、タイガー・ルナのコックピットに昇ってみた。

ネックレスにあしらった輝石が玉石のかけらであること、確かにカクは知っていた。その力を使うということは、答えは一つしかない。操縦桿の脇に、『取扱注意』と書いた紙が張られているボタンが新設されている。昨日までは無かったものである。そして、座席の上に薄い冊子が載っていた。表紙には『空雷砲 取り扱い説明書』と記載されていた。

<第6章終わり 7章に続く>

第7章《決戦》（1/6）

ローマの宮殿では、皇帝の下にルナ離反の知らせが届いていた。そして、王国の軍隊は海軍では空母艦隊が敗走し、北方の王国領土から神聖同盟に向けて出撃した爆撃部隊も陸上部隊も壊滅した、という情報が届いたのもその後であった。神聖同盟は王国からの先制攻撃を明確な侵略行為と糾弾し、撃退の成功は我に正義があるからだと喧伝しているという。もとより王国への侵攻を準備していた神聖同盟は、またとない理由を得て今まさに反攻に取り掛かるうとしていたのである。

帝国は今、元老院での議論が紛糾していた。秩序を乱した王国の成敗を掲げて主戦派が息を吹き返し、王国との融和路線を踏襲しようとする穏健派と衝突したのである。徹夜で議論されたが、主戦派の神聖同盟に王国の成敗を命じる元老院通達を発せよという主張と、穏健派の神聖同盟と王国を協定に持ち込むために帝国が介入すべきだという拘りは、折り合いを得ることができずにいた。結局、その最終判断は皇帝に委ねられることになった。皇帝が描いた筋書きとは異なる方向に事態は進み始めており、自らの思惑と違ってしまった現状に皇帝は舌打ちしたが、それを他人に悟らせはしなかったのはさすがと言っべきか。

歓声と満場の拍手で議場に迎え入れられた皇帝は、右手を上げて静粛を求めた。

「元老院議員諸君、諸君があらん限りの熱意で議論してくれたことに感謝する。」

これから主戦派と穏健派の意見を聞くのである。まず、主戦派を代表した議員が壇上に立ち上がり、全議員に対して語り始めた。

「我が帝国は、その版図の一部を神聖同盟に委ねてはいるが、ここ

数年の間は安泰で平和であった。ブリテン王国なる小賢しい連中を見過ごして来たのも、平和を愛する市民会の意図を元老院と皇帝が重視したからに他ならない。」

そこで一拍置いて代表が皇帝に視線を据えた。

「しかし、そんな我々の寛大な心も知らず、ブリテン王国のふしだらな連中は神聖同盟に侵攻した！これが侵略でなくて何と言おうか？！皇帝陛下におかれましては、ブリテン王国を成敗するという意思を見せて頂きたい。我が帝国の最高意思としてそれを現すには、元老院通達こそ相応しい！」

半数には満たないが、決して少なくない議員が賛同の拍手を贈った。当然のように穏健派の議員が立ち上がって反対の論陣を張る。

「平和を愛する心は、どこの民とて同じだ。そして、平和とは、未来を子供達に託せる世の中のことを言うのだ。ブリテン王国の振る舞いは確かに許し難いが、あの国と全面的に戦争になってしまつては、将来を託すべき子供達にも大きな犠牲を強いることになる。その見返りは何だ？」

一同を見渡してから穏健派の議員が続けた。

「何も無い。どんな体制にせよ、我が帝国の元に民は生きている。陛下、既にブリテン王国は大敗を喫し、充分に痛手を負っている。これ以上の争いは何も生まないと心得られよ。」

すかさず主戦派の議員が反論する。

「何を言うか！このまま協定に持ち込んでブリテン王国が存続してしまえば、遠からず再び血が流されよう。そんな未来を子供達に託せと言うのか！？」

「ブリテンの連中とて馬鹿ではない。諭してやるのも盟主としての我等の役目。」

「諭して分かるものなら、はじめから今回のような暴挙には出まい。」

「起こってしまったことをとやかく言つてもしょうがないのだ。我が帝国には数百年もの間争いが無かったのだ。ところが属国には神

聖同盟といいブリテン王国といい争いが絶えない。我々の責任でもあるのだ、これは！」

「それは属国という発想が招いた結果だ！ 神聖同盟もブリテン王国も、我が帝国の版図ではないか！ そういう他人行儀な姿勢が物事の解決を遅らせるのだ！」

「他人行儀とは聞き捨てならん。我々に向かって言っているのか？」「他に誰がいるというのだ？」

「では聞くが、帝国が乗り出すことの意味を考えているのか？ 元老院通達なぞ出しては、国内の混乱を内外に公言するようなものだ。オリエントの連中が黙っていると思うのか？ そんなことも考えられないとは浅はかとしか言いようがない！」

「浅はかと言われるか！ その程度のこと、我々も充分に考慮しておるわ！」

もはや喧嘩であった。そのようなやり取りにうんざりしていた皇帝は、議員達の討論を熱心に聞いていた素振りではなかった。こんな稚拙な議論に付き合っている状況ではないのだ。ルナが離反したとはどういうことか？ 今回の策略を誰かが奴に漏らしたのだろうか。有り得ないはずだ。では、奴の強運が逃げ果せることを可能にしたのだろうか。いや、違う。ブリテン王国の神聖同盟への攻撃が失敗したということは、恐らくルナはその攻撃自体に加担していないのだ。事前に何かに感付き、何らかの意思を持って何処かに逃げたに違い無い。ブリテン王国を利用して神聖同盟を併合させ、国王から王位を自分に禅譲させることは、もうできなくなってしまう可能性が高い。ブリテン王室の連中に連絡を取って、善後策を講じなければならぬ。ルナが何を考え、何をしようとしているのか、それが問題であり、それが何なのか、突き止める必要がある。

「諸君の考えはよく分かった。私なりに考えてみることにする。明日の議会で私の考えを諸君に諮ろうと思う。」

皇帝の退出でこの日の元老院議会は散会した。それぞれの議員達は

各々の主張を言い切って満足顔であった。皇帝がそれらを殆ど聞いていなかったということは、彼等の知るところではない。そして、翌日までに結論を得ようとしている皇帝にしても、事態はそんな余裕すら認められない程に逼迫しているとは考えてもいなかったのだ。それは致命的な結果を招来するに違いない。

親衛隊の編隊と自らの部隊の一部をブリタニアに残し、それらの統率をブリタニアの統領に任せて来たルナは、三個小隊を率いてケルトに向かっていた。夜が更けるのを待ち、闇の中を飛び続けて来た。間もなくケルトの同士から連絡が入る手筈になっている。西ケルト公爵に会って、その配下の勢力をルナの元に集結させようと言うのである。自主独立を掲げてしまったケルト民族の全てを統率するのは難しいだろう。しかし、王を名乗った西ケルト公爵がルナに傾けば、分裂した幾つかの派閥が集結するだろうし、ルナの活動拠点としてはその程度で充分であった。

その時、ブルータスだけが知っていたルナの極秘通信機の暗号無線から声が響いた。

「こちら子飼いの娘。感度よろしいか？」

通信を聞いたルナは思わず笑みを漏らした。子飼いの娘とは気の利いた暗号名である。ルナの子飼いであるブルータスが仕立てた斥候という意味なのだろう。それが女性だとはこの時初めて知ったのだが。この暗号通信も見直しが必要になるだろう。ブルータスとルナだけの極秘通信だったのだ。信用できる仲間とは言え、今の通信相手がその存在を知ってしまった以上、今回の件が終わったら別のモノに置き換えなければならない。本当の秘密は味方や仲間を欺くことから始まる。

「聞こえている。間もなく陸地に入るところだ。」

「誘導する。進路を入力されたし。」

「了解した。任せる。」

送られて来た通りにタイガー・ルナを操り、ルナ隊が闇夜に着陸して行った。すぐに偽装した格納庫に隠すため、ルナはタイガー・ルナを広くはない扉から中に入れ、エンジンを止めて地面に降り立った。そこで強い視線を感じて振り返ったルナは、我が目を疑ったのも束の間、腹の底から込み上げる喜びに我を忘れた。そこにはフェルチアが立っていたのである。

「隊長、あれから何日かしか経っていないのに、お久しぶりですと言いたくなります。」

フェルチアの言葉を遮って抱きしめようとしたルナは、彼女の拒絶する目に立ち止まってしまった。

「私達だけが再会を喜んではなりません。ここにいる者の多くは、最愛の人を失ったり別れて来た人達ですから。」

道理である。このまま個室に連れ込んでしまいたいという突き上げるような衝動に堪え、ルナは彼女の次の言葉を待った。

「隊長にはすぐにここを発って頂きます。西ケルト公爵、今はケルト国王ですね、彼との会談が三十分後に設けてあります。」

今後の趨勢を諮る極めて大事な会談である。しかし、ルナの頭はそうは簡単に切り替わらない。フェルチアが生きていた。どうやって？ フェルチアがブルータスの斥候を勤めている。彼女はスパイの教育も受けていたのか？ 答えは出なかったし、問い掛けてもフェルチアも今は応えてはくれないだろう。ルナとて渦巻く疑問よりも、フェルチアが無事であった事実がより重要であり、その経緯はどうでもいいという気もあつた。

「ここからは車で移動します。私が同乗しますが、面通しまでです。その後は隊長、あなたの双肩にかかっています。気を強く持って臨んでください。どのような結果であれ、私達は受け入れるでしょう。あなたには仲間がいるのです。」

小娘と思っていたが、母親のようなことを言う。そんな可笑しさもあつて、ルナは笑顔で頷いて見せた

<
続
<
>

第7章《決戦》（2 / 6）

車の移動は数分しかなかった。会談は西ケルト公爵の別荘で行なわれる。ルナ隊が着陸したのも別荘の敷地の中だったのだ。広大な敷地を移動する車中で、ルナはフェルチアを抱き寄せ、ことの次第を聞くこともなく彼女を貪った。敷板の向こうにいる運転手の存在など気にする余裕すら無い。彼女とて望んでいたことなのだろう。彼等の人生がその数分に凝縮されたような濃厚な時が過ぎた。あっという間に母屋に着いた車から出た二人を門兵が迎え、フェルチアが衣服をただして事務的に告げた。

「ルナ伯爵です。入ります。」

火照った頬のフェルチアをいやらしい視線でなめまわす門兵を無視して、二人は足を進める。大きな扉をくぐった先には薄暗い広大な広間があり、その先の一画に明かりが漏れている部屋があった。その部屋に入ったところで、フェルチアは衛兵に止められた。

「ここからは伯爵だけになります。」

ルナが衛兵を振り払おうと思うよりも早く、フェルチアの目が先を急げと急かしていた。ルナは更に奥の部屋に通され、背後で扉が閉められる音を聞いた。迂闊だったか、とも考えたが、フェルチアの首尾を信じることにした。使い古されてはいるが、材質の良さと職人の技量の高さを示す事務机、そしてその机の向こうの椅子に座っている男。ルナの警戒心を含んだ視線を男の猜疑心に満たされた瞳が捉えたところで、まず男が口を開いた。

「ルナ殿、率直にお話頂きたい。勝てますか？」

甲高い耳障りな声の主は、西ケルト公爵である。老齢に近いその男は、立ち上がるのも億劫な様子でルナに問い掛けて来た。抱擁や握手も無く、儀式めいた挨拶も無い。失礼この上無い話だが、ルナは

むしろその方が好きだった。ただ、話の中身はいただけない。

「勝つ、と？」

「そうだ。我々ケルトの民はもう充分にあなた方のお役に立って来た。これからは自分達で生きて行く道を選んだのだ。」

「あんた達が勝つとは、独立を果たすということだと思うが、それはあんたの心根次第だな。」

「君は我等を従順な民族と考えておるのだろうか？ 違うと言っておこう。誰よりも平和を愛しているということなのだ。争いを好まないだけで、あなた方への不満や独立への思いは昔からあったのだ。」

「俺を買いかぶらないでくれ。俺は王国の代表じゃない。数千年来の従属関係を俺に愚痴られても拉致は開かないぜ。」

ここで西ケルト公爵は、目の前の机に拳を打ち付けて怒りを露にした。

「何たる横柄さか！ 君は王族なのだろう？ 生まれながらにして

民や属国に責任があるのだよ。」

「俺が望んだことじゃない。」

「では、君はここに何をしに来たのだ？」

「王国だけじゃなく帝国も神聖同盟も、今は欺瞞に満ちてる。正義を確立したいだけだ。」

「西ケルトの正義をどう考えるかね？」

「俺達がより良い統治にあんた達を必要とするか、あんた達が平和のために俺達を必要とするか、それだけの関係だ。あんた達の正義はあんたが考えてくれ。」

「良からう。では最後に一つ。世の中を正せるのか、君は？」

「俺は信じる道に行く。評価は歴史に任せるさ。」

西ケルト公爵は、今度は両手を広げて呆れて見せた。

「だから横柄だと言っているのだ！ 君の選択に人民の未来がかかっているのだぞ！」

「じゃあ聞かせてくれ。あんたはどうして『西ケルト国王』の称号を受け入れたんだ？」

「この地に真の平和をもたらすには、自主独立が必要だからだ。人民もそれを望んでおる！」

「事情は聞いているんだぜ。ケルト人民の望みは一つじゃないんだらう？」

「当たり前だ。それが正常なのだ。ただ、大きな目的を達成するために、一時的に人民の希望を統合せねばならん。」

「そのために今は力が必要で、そこに俺が現れたってわけだ。」

「揮える力が必要なのは今、という意味では君とて同じだらう？」
「やっとならう。西ケルト公爵は立ち上がった。ルナも前に進み出て、両者の手は固く結ばれた。目的や思想に共通点が見出せなかつたとしても、手段として双方が互いを必要としている。ルナの持つ求心力と西ケルト公爵が持つ基盤、性質が違うが故に、この相手であれば補填できない力がある、という認識が共通であることを確認しあえたのである。握った手を離さずに公爵が続けた。」

「歴史上、大きな目的に向かって団結することはよくある。そして、目的を成した後は互いに衝突することもよくある。我々の同盟もそうなると思うかね？」

「お互いの能力次第だな。双方にとって必要性が発揮し続けられるかってことだらう。」

公爵の高笑いが響いた。そして最後に付け加えた。

「我々は協力を惜しまない。何を使ってもいい。やってみせろ、若造。」

西ケルト公爵は、自らが何かを成すタイプの男ではないようだ。そんな男を王に頂くケルト民族の将来は課題山積だらうが、尊程に低脳で粗雑な男でもなかった。神聖同盟の総督に実権を握られ、波風を立てないことだけに全精力を注いできた男。しかし、それを継続するにも相当な能力が必要だったということだらう。

フェルチアとともに格納庫に戻ったルナは、ブルーナスとブリタニア統領に事の次第を伝えた。これで基盤は整った。いよいよ行動を起こす時である。

ちょうどその頃、王宮から最も近い王国の空軍基地では、大地を揺るがす轟音が響き渡っていた。十機のリメス・ジンが滑走路上でアイドリングしているのである。搭載されたエンジンの数は、王国空軍の全戦闘機にも匹敵する。凄まじい音と巨大な勇姿を管制塔から見下ろしている王は、感無量の面持ちであった。

「陛下、至急王室に戻られるようにと、宰相殿からのご伝言でございます。」

管制官の言葉が王の思考を現実に取り戻した。

「戻って来いと？ ……分かった、ご苦労。」

ただならぬ事態を感じ取って足早に王室に戻った王は、にやけ顔の宰相を迎え入れられた。

「皇帝の密使が別室で控えております。現状を踏まえた上で、今後の打開策を相談したいとのこと。いかが致しましょう？」

王が思ったよりも皇帝の反応は早かった。連絡も無いまま、いきなり密使を送り付けて来るとは、王に何らかの疑問を感じているのか。皇帝への畏怖の念が再び王の頭を占め始めたが、宰相の不愉快なやけ顔がそれを押し留めた。宰相は状況を楽しんでいる。いよいよ佳境ということ、王のお手並み拝見といったところなのだろう。

とりあえず、疑いを持たせないために密使を待たせておくことはできないので、王室へ入室させることにした。宰相の招きに応じて、未だ三十歳前後の生意気ざかりの男が入って来た。皇帝の密使ということは、それなりに優秀な男なのだろう。

「遠路ご苦労である。必要であればこちらから連絡係を派遣したものを。」

「貴国の神聖同盟への侵攻が失敗したこと、そしてルナ殿が離反したこと、皇帝陛下はいたく心を痛めておられます。」

「同じ目的を持つ同士として、我々としてその思いは同じだ。だが、あわてても仕方が無い。まずは寛がれよ。飲み物を用意させよう、座りたまえ。」

立つたまま微動だにせず密使が続けた。

「結果には必ず原因があります。それを知るために私は来ました。」
「下手な引き伸ばしは逆効果のようだ。」

「正直に申し上げよう。ルナがどうやって逃げ果せたのか、我々も未だ掴んでいない。作戦の失敗は、ルナが作戦に参加しなかったためというのには間違い無いが。」

「言い訳に聞こえます。私は、皇帝陛下にルナ殿が離反し得た理由をご説明せねばなりません。答えを得なければなりません。そしてあなた方は私に答えを託す義務がある。」

これはもう脅迫であった。王が仕損じたとしても、自分にとっては対岸の火事で済ませられると考えているのか、宰相は何も言わずに座っている。

「我々とて手をこまねいているわけではない。現場からの報告を分析しているところだ。間もなく結論は得られよう。」

「私もそれを望んでおります。一時間後に私はローマに戻るべく出発します。それまでにご説明頂きたいと存じます。」

それだけ言い残して別室に下がるうとした密使を王は引き止めた。

「ルナ離反の理由がどうであれ、予定外の対応が必要になったのは明らかだ。善後策について議論したいのだが、君にその資格はあるか？」

リメス・ジンがケルトを焼き払い、その始終を斥候が皇帝に報告するまで、何とかこの密使を引き止めねばならない。ブリテン王室が皇帝を裏切ったという知らせが、事前に皇帝の耳に入るのには望ましくない。帝国が神聖同盟と共同戦線を張るといった事態になっしまえば、いかにリメス・ジンを持ってしても戦線の長期化は避けられまい。国力の差から言って、短期決戦で結論を出す必要があるのだ。

「物事には順序があります。王国軍の神聖同盟への侵攻は、皇帝陛下の作戦において始めの一步だったのです。それが失敗したのですから、まずはその原因を探らねば次の一手を考えることはできません。」

ん。」

「君では話にならんようだ。私が直接皇帝とお話することにする。

ご苦労だったな。」

「失礼を承知で申し上げます。見苦しいですぞ！」

< 続く >

第7章《決戦》（3 / 6）

これまでのようである。そもそもこの密使は、王が彼の帰国を引き止めようとすることを想定していたのだろう。あるいは確認していたのか、その態度は毅然としたものであった。王は宰相に目配せし、密使の拘束を指示した。すぐに親衛隊が王室に乱入して密使に手錠をかけたが、それまでもが想定範囲内だったのか、彼の表情に驚きの色は全く無かった。

「掲げる目標は同じなのだ。ただ、我々には我々のやり方がある。それに気付いたただけのことだ。」

王が密使に掛けた最後の言葉だった。

「不忠者め、思い知るがいい。」

それだけ言い残すと、密使はその場に倒れ込んだ。何処かに自殺のカラクリを仕込んでいたのだろう。その死顔は大義に殉職した潔さと強固な意志を現していた。

「親衛隊、死体を片付けろ。」

王は王室に残った宰相に命令した。

「リメス・ジンの行先を変更する。二手に分けて、一方をローマに向かわせる。」

「ローマを焼いてもよろしいので？」

「止むを得ん。皇帝の動きは思ったより早い。こちらが先手を打つ必要がある。」

「指揮官が足りなくなりますな。」

「予定通り、ケルトには余が行く。ローマ行の部隊は貴公が指揮を執るのだ。」

「王室を空けると申されるか？」

「我々の不在中は、王国を軍に預ける。」

「ローマへの攻撃部隊こそ陛下が統率されるべきです。ケルト行き
の部隊は軍の統帥に任せるのがよろしいでしょう。王室には私が残
って国務を代行致します。」

「それも道理よな。しかし、だ。余の親征ではあるが、余が直接ロ
ーマに攻め込むよりも、後方で増援を仄めかす方が、より迫力が出
せるのだ。そのためには、完全に余の代行が勤まる者がローマ行き
の部隊を率いなければならん。」

王の真意を測ろうと宰相の目が鋭く輝いている。勿論、この狸に国
政を任せるわけにはいかない、というのが王の本音である。軍の統
帥であれば、彼は有能な政治家ではないが、分かり易い性格のため
コントロールもし易く、王室を任せても心配がないのだ。

「親征は数世代に渡って無かったことです。我々の姿勢を内外に示
すため、陛下にご出陣願うわけです。そして、軍の統帥が同行する
ことで、全軍を上げての作戦であるという位置付けまでも同時に
示すのです。」

「貴公の言うことは一般論として理解できるが、実態を考えてみよ。
あやつめに実戦部隊を任せることができるか？」

「軍には有能なスタッフがあります。十分に補佐してくれるでしょ
う。」

「古来より、重要な攻撃軍の総司令官は執政官コンスルが努めている。親征
の時でさえ、皇帝が執政官をわざわざ兼務したこともある。我々の
姿勢や作戦の位置付けを示すためにも、我が国の執政官とも言うべ
き、宰相の貴公に同行してもらいたいのだ。」

もともとは宰相と軍の統帥を両方とも王室に残して行くことになっ
ていた。王は、統帥をコントロールして宰相を押さえようと考えて
いたのだ。しかし、部隊を分ける必要が生じた今、どちらかを同行
させる必要がある。宰相を残してはならないと王の直感が強烈に訴
えかけていた。

「余とともに歴史に名を残す者として、貴公こそが相応しいのだ。」
「そこまで言われては宰相も引き下がれない。悪い気もしない。」

「いいでしょう。お供させて頂きます。」

「貴公が来てくれることで、今度の作戦は一層磐石となった。」

「ご期待に添えますよう全力を尽くします。」

歴史には『世界都市ローマを焼き払った男』として貴公の悪名が残るのだよ、と心の中で呟いた王は、話題を切り替えた。

「宣戦布告の時間だ。布告後、ただちに出撃する。」

宣戦布告は、帝国と近隣の国々の隅々にまで届いた。ブリテン国王が敵とするのは、ローマ帝国の正当な後継者であるブリテン王国を侮辱する国々、即ち、帝国を名乗ってローマを占有している国やその庇護の下に生きる全ての国々とそれらの為政者である。布告は全面的な無条件降伏を求めていた。その期限は本日の十七時ちょうど。例え降伏が検討されるとしても、数時間で結論が得られるような問題ではない。つまり、ブリテン王国は十七時に何らかの攻撃を仕掛けるということなのである。

神聖同盟では同盟国全てが王国への臨戦体制を整えていたので、即座に徹底抗戦と帝国の防衛を担うことを宣言した。

西ケルトからは、西ケルト国王名義でブリテン王国との同盟が申し出られた。勿論、ケルト公爵が同盟を申し出た相手は王室の連中はなくルナなのだが、未だ誰もそのことには気付きようがなかった。帝国の元老院では、主戦派の勢いが益々強まっていた。先方から宣戦布告が出された以上、穏健派と言えども開戦に躊躇しているわけにはいかない。皇帝からは全軍に臨戦体制を敷くべく勅令が下され、神聖同盟には体制整備までの帝国防衛が下知された。

帝国全域が戦争状態に突入しようとしていた。人々は数千年来無かった事態に右往左往し、何もかもが混乱していった。

この時皇帝は、ブリテン王室に裏切られたことに怒りを覚えていたが、なぜかその表情は満足そうでもあった。謀略を企てて事を成すのも良いが、直接的に戦争を指揮した皇帝は、歴史書を古代にまで遡らねば出て来ない。やはり自分は歴史に名を成す皇帝として生

まれ出たのだという確信が、彼には芽生えていたのだ。

戦争の被害者は一般の人々である。しかし、彼等の悲劇が歴史に記録されることは無く、記憶の糸が途絶えたところで忘れ去られてしまうのが常。千年来戦争を経験していない帝国の皇帝が、これから起こるであろう数多の悲劇よりも、戦いに勝って凱旋する自分を想像してしまうのは仕方のないことなのだろうか。それは人知の限界か、あるいは属人的な問題か。

宣戦が布告されるとすぐに、王と宰相はリメス・ジンに搭乗すべく空軍基地に向かった。その道すがら、宰相が解決していない事態への配慮を見せた。

「ルナ殿は何処で何をされているのでしょうか。」

「リモーからの報告によると、ルナ隊に編入した仕官が我々の策略を鋭く見抜いたということだが……。」

「ルナ殿が我々の策略をどこまで知り得たのか、気になります。この作戦が終了したら説明せねばなりません。」

「奴が我々への復讐に燃えているのは間違いない。しかし、一介の軍人に何ができる？」

「正直に申し上げますが、私は彼を恐れております。リモー艦隊に配属した時点で、彼が逃げ果せる可能性は無かったです。底知れない強運を感じます。」

「うまくいかないこともある。考え過ぎるでないぞ。」
あれだけ用心深かった王のあまりに楽天的な物言いは、宰相に幾らかの猜疑心を植え付けたが、これから大陸侵攻作戦に赴くにあたり、これ以上そのことに彼の思考がとらわれることはなかった。その様子を目で確認した王はしたり顔であった。

王は、ルナをリモー艦隊に派遣する作戦を考えていたあの時には、未だ彼を守ろうと考えていたのだ。ルナを守るために、リモーが宰相派に属すことと、大陸侵攻作戦に何か裏がありそうだ、ということだけを含ませた情報士官を空母に潜り込ませたのは王なのであつ

た。艦内にルナを助ける者が必要だろうと考えたのだ。敢えて女性を送り込んだのも、殺伐とした作戦稼働中にルナの心を癒すためでもあった。抹殺してしまうには、ルナは魅力的に過ぎた。今では、何とも余計なことをしたものだと思う。しかし、ルナが離反し、大陸侵攻作戦が失敗したが故に、皇帝の呪縛から逃れる術を見つげられた。あの作戦が予定通りに進んでしまったとすれば、自分はいつまでも皇帝の駒として使い尽くされたことだろう。あるいは、用済みになった時点で皇帝に消されたかもしれない。結果的にこれで良かったのだ。王はそう考えることにした。とは言え、あのルナの元におくった女性仕官は何としても消し去る必要がある。真相を宰相派の耳に入れさせるわけにはいかないのだ。そのためには宰相が言う通り、ルナの行方を追って、ルナともども抹殺するしかないだろう。あるいはその仕官をルナ抹殺に利用するか。やり方は色々ありそうだ。女であれば尚更である。

「暫くは正念場ぞ。」

王は宰相にそう言い残して自らが座上するリメス・ジンに乗り込んで行った。その言葉を宰相は素直に受け止め、彼も自分の機体に搭乗したのだった。

間も無く、轟音とともに巨大な怪鳥は群れを成して飛び立って行った。

<続く>

第7章《決戦》（4 / 6）

西ケルト公爵の別荘では、公爵からルナに王国の宣戦布告が知らされていた。

「予想を越えるものではないと思うが、どうだ、若造？」

「確かに。これ位の内容だと思っただけさ。」

「で、王国の軍は何処に向かう？ やはりローマか？ それともまずは神聖同盟か？」

「ついさっき、情報が入った。はっきり言おう。奴等はここに来る。」

「何だと?! 同盟を申し込んだ我が国に攻撃すると言っのか！」

さては貴様、我がケルトの同盟者が実は貴様達であることを漏らしたな！」

「そんなことをして何になるってんだ？ 奴等はケルトを焼き払う

ことで、帝国と神聖同盟に脅しをかけようとしているんだ。」

「脅しをかけるだと？ そんなに兵力に余裕があるとは思えん。」

「いや、あるんだ。この前、怪鳥の話をしただろう？ それが編隊組んでやって来るそうさ。王国はあんた達を抹殺することで、絶对的な兵力を見せつけるつもりということだ。」

「我々は同盟者だぞ？ そんな暴挙が許されるわけがないだろう！」

「王室の連中に聞いてくれ。俺に分かるのはここまでだ。それより、今は事態の打開が優先される。」

「あいかわらずの横柄さ、虫唾が走るわ！」

「お互い様だっことは言っておくぜ。ただ、お互いがお互いを必要としているってことを俺は忘れていないがね。……爆撃隊の目標は宮殿だろう。人々を避難させておくんだな。」

「やっておく。間に合うか……。」

「やらないよりましさ。」

「守つて見せる、このケルトの地と人民を。」

「そのつもりさ。」

言い残してルナはタイガー・ルナの格納庫に急いだ。情報によると、十機の怪鳥（リメス・ジンと言うらしい）が王国を飛び立ったと言う。後は王宮の親衛隊の首尾を信じるしかあるまい。

「上がるぞ！ 着いて来い！」

ルナの一声の元、ルナ隊のタイガー・ルナが離陸して行った。

時を同じくして、ブリタニアを飛び立った親衛隊編隊が、ブリテン王宮に接近していた。親衛隊の隊長は軍情報部の取り込みに成功していたが、その後も積極的に行動を続け、軍内部に相当数のルナのシンパを獲得した。そして、王室が親征を以って大陸侵攻作戦を実施するとの情報から、国王不在の間に王室占拠の作戦を進めていた。ブリタニアからの親衛隊編隊が王宮内の中庭の一つに爆弾を投下するのを合図に、ルナシンパの各部隊が武装蜂起する算段になっているのだ。

ここに至るまで、王室に残った親衛隊の道のりは平坦ではなかった。一つづつ乗り越えて来たのだ。最大の障壁は、親衛隊は常に王と行動を共にする、ということであった。親征なのであれば、親衛隊の編隊もリメス・ジンの編隊に同行しなければならぬ。もとよりルナの元にその過半数が去った今、王の編隊の護衛に充てられる機数が不足していた。最大限を護衛に付けたとしても中隊一つ程度で、それではリメス・ジン一機の護衛がいいところ。そこで、情報部に協力を要請した。王の編隊に同行する親衛隊は、実は国王座上機に待てる一個中隊だけなのだが、それでは国王座上機を敵に教えるようなもの。何機かのリメス・ジンを親衛隊の中隊に護衛させるべし、と上申させたのだ。影武者は親征の王道である。親衛隊には複数のリメス・ジンを護衛する程の数はない。ところが、一機あたりの攻撃範囲が広いリメス・ジンは、編隊とは言っても各々が目視で

きる距離にはいない。個々のリメス・ジンは自らの機体に護衛が付いていなくても、影武者に選ばれたのは他の機だったのだろうと思いい、同行する親衛隊の数が少ないと気付くことは無いはずである。各々のリメス・ジンは、自分達以外の他の機体に護衛が付いていると思うことだろう。これでこの問題は解決したかに見えたが、ことはそう単純ではない。そもそも人数が少ない親衛隊の隊員、その一部が王の護衛に飛び立ってしまうのだ。武装蜂起を指揮する者が足りなくなってしまった。親衛隊の隊長が下したこの問題への回答は、いたずらに数を頼るのではなく、数は少なくとも意思と団結の強い集団の形成であった。忠誠が不安定な烏合の衆よりも、高い志に支えられた強固な集団による確実な蜂起を選択したのだ。内戦状態に陥らせるつもりは無いわけであり、それを許す状況でもない。ルナが帰還できる環境さえ整えれば良いのだ。隊長の判断は、クーデターという混乱が必至であり且つ各々の局面において個々に判断が求められる行動において、勢力を分断したり細分化する要素は少ない程望ましい、であったのだ。

飛行禁止区域である王宮周辺に向けて、ブリタニアから来た親衛隊の編隊は悠々と飛び続けた。親衛隊の編隊が飛んでいることに誰かが異常を察知し得ようか。むしろ、国王不在の親征中であって、王宮上空から威圧するためには編隊飛行しているものと誰もが思った。王宮を預かっていた軍の統帥は、親衛隊の飛行計画を自分が知らないことを不信には思ったが、親衛隊の暴走程度としか考えなかつた。国王直轄であるが故に、親衛隊の暴走はよくあることなのだ。統帥が何かおかしいとやっと感付いたのは、編隊から一機が離脱して爆撃コースを取った時であった。その段階で撃墜指令を出した統帥には、類稀な才能があつたと言つべきだろう。しかし、時速数百キロメートルで降下し始めた航空機が、腹に抱えた爆弾を手放すまでに要する時間では、統帥の撃墜指令は官僚組織機構の二つ目辺りに届くのがやっとであった。

この前日の深夜に、王宮内では一つの事件が起きていた。市街地と言える地域に存在する施設としては広大な王宮の中で、そのはずれに平和そのものの地区がある。そこでは、国が戦時体制に突入したという雰囲気は殆ど感じられない。王族の子息とその取り巻きが暮らす一画である。この国の教育熱心なことは、二千年の昔から引き継がれた美德とされており、成人と呼ばれる年齢までは様々な教育が施されるのだ。老師と呼ばれる教育係と王子、そして王子の取り巻きがつい先日まで授業を受けていたのだが、雰囲気は平和であっても、親衛隊による王子捕囚以来はあらゆる教育カリキュラムが停止していた。つまり、リーダーである王子を取り上げられた少年達は、何もすることがなくなってしまったのだ。血気盛んな少年が時間を持て余した時、彼等がリーダーを奪還したいと考えてもそれは無理もない。誰からともなく王子の開放が言い出され、それはとても自然なことのように思われた。彼等は実戦訓練も用兵学も幾らかは学んでおり、その知識を揮いたいという欲望もあつたのだろう。そして何よりも、かつてローマの地でブルータスの襲撃からカエサルを守った英雄がいたが、男の功績は今なお語り継がれていることを学んだばかりの彼等が、その榮譽に憧れたということなのだ。戦鬪訓練用に用意されていた武器の奪取は、瞬間に成し遂げられた。管理・監督する立場の老師が、王子の捕囚によって意気消沈してしまっており、事実上は武器庫までもが無警戒に陥っていたのだ。この地区の平穏さがそのことへの危機感を喪失させてもいた。武器を手にした少年達は、本来なら成されるべき綿密な計画や地道な準備よりも、正面突破による華々しい方法を選んだのだが、それは少年たる所以だろう。身を呈することが、救出劇に彩りを添えると信じて疑っていないのだ。武器の調達が難なく成功したことも、彼等の気持ちをより昂ぶらせたに違いない。しかし、闇夜の先に建つ王子が囚われてる建物の前で哨戒しているのは、教育係ではない。親衛隊の隊員なのだ。確かに、ルナ派の武装蜂起の直前であり、親衛隊

も十分な哨戒要員を配置できない事情がある。事実、扉の前には一人の隊員が立っているだけであった。それでも、彼はプロである。怪しさや危うさを嗅ぎ付ける嗅覚も、動作の素早さも、そして射撃の腕も、少年達の比ではない。彼は瞬く間に押し寄せる敵の数を把握し、指揮系統を探り出してしまった。家系や年齢と性格から自然に構築された仲間内のヒエラルキーをそのままに、王子の代理としてリーダー役を演じる少年は、中腰に身を屈めて彼等が組織する部隊の中央を進んでいた。親衛隊の隊員としては、闇夜のために迫り来る敵が子供であることは分かりようがない。ただ、その動作から稚拙さだけを読み取っていたのだが、彼にとってそれは、単独で戦わねばならない状況で相手に恵まれた、ということではなかったのである。

<続く>

第7章《決戦》（5/6）

悠然と立ちすくしているだけに見えた隊員は、目にも停まらぬ素早さで肩にかけた銃を持ち替え、確実に相手を倒す二連射を加えてから地面に伏せた。リーダー役の少年は、文字通り瞬きをすることしかできなかった。二発の銃弾は、彼の腹部を貫通して行った。そこで彼は、実戦訓練の時に教官が怒鳴っていた台詞を思い出した。

「撃つ時は相手の腹を狙え。それも必ず二発だ。どちらかが命中すれば良いし、両方当たったら留めになる。腹を打ち抜かれると相手は前屈みになるから、断末魔の反射で引き金を引いたとしても、弾はこちらに向かつて来ない。地面にめり込むだけだ。」

その通りであった。地面に顔面から崩れ落ちる過程で、彼は引き金を引いていたが、銃弾は空しく地面を穿ただけであった。その僅かな間に、親衛隊の隊員からは次の攻撃が開始された。倒れ込むりーダ役に駆け寄ろうとしていた少年が、次の標的であった。そこでやっと少年達から反撃の銃声が響きはじめたが、既に錯乱した彼等に狙い等ない。がむしゃらに放たれる銃弾が隊員を捉えることはなかったが、彼の標的は確実に射倒されて行く。あっという間に少年達の戦意は消失し、銃を置いてその場で立ちつくしかなかった。降伏を認めた隊員は注意深く敵に歩み寄り、そこではじめて少年達の容姿を確認した。王子の取り巻きである。彼は一瞬の動揺を見せたが、事の次第を隊長に報告するに滞りはない。無線で報告を受けた隊長は、自ら少年達を連行しに来た。王宮の中で、夜中に、幽閉されている王子を標的に、武装集団が進入したのだ。これ以上は無いという程の重大事件である。当事者にその自覚があったかは疑問だが、隊長が事の重大さを理解していたのは当然である。ここ数日、王宮やその付近では過去に例を見ない大銃撃戦が繰り広げられる可能性

があつた。王室での親衛隊と王室憲兵の睨み合い然り、軍情報部での情報部長と親衛隊隊長のやり取り然り。その他にも、ルナ派形成の過程において、そのような危険はあつた。しかし、それらは全て現実にはならなかつた。それは、流す血は最小限でなければならぬという隊長の信念故であり、唯一の例外は明日の武装蜂起の時だけに限られるべきだつたからだ。それがこんな所で、それも子供の犠牲者が出てしまった。このやるせなさの幾らかでも実行犯の少年達には理解が及ぶだろうか。無理だろうし、それは銃声だけを聞いていたこの地区の人々として同じだろう。本来ならこの地区を親衛隊の武装隊員に封鎖させ、徹底した緘口令を出すところである。しかし、タイミングが悪かつた。隊員の殆どは武装蜂起に向けて出払つており、地区全体を封鎖するための人手がいない。止むを得ず、少年達と隊員に射殺された死体を王子とは別の部屋に監禁した。そして王子の部屋を哨戒していた隊員にその部屋の哨戒も命じ、隊長はその場を去つた。時間が無かつたのである。真夜中だつたために、この地区の人々は何が起こつたのかは知らない。しかし、王子が囚われている所で銃撃戦があつたのだ。野次馬と化した人々から立つ噂は概ね予想がつく。そしてそれは、夜が明ける前の段階で既に面白おかしく語られ、広がつて行つた。朝には、相変わらず不動の姿勢で哨戒する親衛隊の隊員の周囲は、あたかも昨晚と同じ状態のようになつており、銃撃戦があつた痕跡は見当たらなかつたし、当事者は誰もが静かであつた。野次馬達とは反比例して。王子は事の次第を知らないで、騒ぐはずもない。新たに監禁された少年達も別の部屋で大人しくしている。彼等をはじめて『死』を身近に感じたのだ。ずっと喜怒哀楽を共にして愛憎を振りまき、さつきまで夢を語り絶望を嘆いていた仲間が、人間から蛋白質の塊に変わる瞬間を見てしまったのだ。泣き声さえ上がらなくとも無理は無いだらう。この静けさが、人々の好奇心を一層高めてしまった。噂の核心は『王子はもうここにはいない。王子は脱出した。』であつた。そして、親衛隊が何事も無かつたかのように取り繕っているように見えると

いうことが、噂に信憑性を与えていた。この噂の意味するところ、影響はとてつもなく大きい。相手は王子であり、場所は王宮の中なのである。

ブリタニアから来た親衛隊編隊が王宮に放った爆弾は、絶対値としては決して大型ではないが、王宮内で炸裂したものとしては歴史上最大であろうもので、それは中庭の池に落ちて爆発した。その炸裂音は、王国の首都一帯に猛烈な爆風とともに広がっていった。動揺する人々をよそに、軍施設の中ではちよつとした争いが起きていた。ルナのシンパが武装蜂起したからである。数では少数だが要所要所に配置されたルナのシンパは、効果的に周辺を征圧していった。そして、ルナのシンパとそれ以外の者達の勢力が拮抗した時点で、争いが止んだ。争いの継続が総力戦を意味し、王国の壊滅に繋がる。と両者が判断したのである。親衛隊は王室を押さえ軍の統帥を拘束したが、王国の軍では司令官の消失が戦闘能力の崩壊を意味しない。王国軍は、優れた指揮系統とバックアップシステムを備えているのである。そして、代替の司令官として指揮を任された將軍は、事態の収束を急がないことにした。親衛隊がクーデターを起こしたのは間違い無い。しかし、古来より親衛隊のクーデターというものは、より相応しい指導者を選択する一つの手段なのである。つまり彼等の主張は、現指導層に問題有り、なのだ。必然的に、その向こうにはルナの影が見え隠れする。ドーバー戦役の英雄であり、理不尽な退陣を国のために躊躇無く受け入れた義人、そんなルナに心酔する兵士は、現在においても少なくはないのだ。新司令官は、結論を急ぐ余りに拙速に走ることなく、何らかの結果が出てから行動を起こしても良いだろうと判断したのだ。

この一事を指導した親衛隊の隊長の判断も、結果的には同じ行動に繋がった。クーデターを起こす側として、短時間でより多くを制圧するのが正道だろう。しかし、国の将来を憂いで行動を起こした彼にとって、同国の者同士の争いは最小限に留めたかったのだ。ル

ナが作戦を成功させて戻れば、この争いは必然的に収まる、そしてそれは必ず成されると彼は考えていたのだ。根拠らしい根拠は無かったが、確信していた。

実際には、ルナ派の武装蜂起は少数に過ぎ、そのままでは制圧される可能性は充分にあった。ところが『王子が脱出した。』という噂は、この時には王宮内から外にまで広がっており、人々の間では『王子、起つ』として受け止められていた。王子がルナに心酔しているのは有名であったし、ルナは王子をかわいがっていることを隠していない。そんな事実が「王子派はルナ派を支援する」と人々に思わせたのであり、それが国軍の抵抗を止めたのである。『王子派』など本当は存在しないのだが、それだけにその勢力は計り知れず、不気味であった。国軍司令官は、ルナ派との衝突が『内戦』に繋がると考え、戦闘の継続を迷った。そして、王子派の登場で『保身』のためにも膠着させることに決めたのだ。

少年が若い命を投げ出したという事実。そのこと自体は批判を免れないだろう。彼等は浅はかであった。しかし、結果的には言え、そして一時的であったかもしれないが、少年達は内戦を抑止したことになるまいか。短絡的であろうと、あるいは迂闊であろうと、その心根が純粹であった場合、そこから導き出される行動には学ぶべきことが満載されているものだ。後年、その時代の価値観によつて批判も評価もされようが、いずれにせよ人の活動には意思がある。結果の良否とは別の次元で、それは受け止めるべきだろう。少年を射殺した親衛隊の隊員は、少年達の銃に込められた弾が殺人用ではなかったことを後から知って、残りの生涯を苦しみ続けることになる。彼の苦しみは、人が分かち合わねばならない最も大事なものでなからうか。

高空から大地を凝視していたルナは、風防の外を流れる風からリメス・ジンの匂いを嗅ぎ取った。異様な殺気とともに、陸と海の境界線を越えて来る怪鳥は、一機しか見当たらない。編隊を組んでい

るはずだが、僚機は見えなかった。恐るべき破壊力を持つリメス・ジンの兵器は、一端発動してしまうと僚機までをも破壊してしまう。つまり、攻撃圏内には味方機を配置できないという宿命を負っているのだ。これは迎撃隊にとって有利な条件である。ルナ隊は、タイガー・ルナの性能的限界点まで上昇し、リメス・ジンの上空に移動して機会を待った。そうこうしている内に、怪鳥の目は西ケルト公国の宮殿を捉えてしまった。そして、何の躊躇もなく、稲光に似た最終兵器を発動させたのである。

<続く>

第7章《決戦》（6/6）

「突撃する！」

ルナ機を先頭に、十五機のタイガー・ルナが旋廻しながら急降下して行ったが、数秒の静けさの後、リメス・ジンの最終兵器の標的となった宮殿付近は一斉に炎に包まれ、あらゆる構造体が瓦解した。地獄の業火はこの後どれくらい燃え続けるのだろうか。急降下中のルナの第六感、地上の人々の恐怖と悲鳴を感じ取っていた。しかし、それは死に赴く者達が発する独特の絶望感ではなく、生きた人間の生への執着といったものであり、西ケルト公爵の避難処置は実行されたという安心感をルナに与えた。ルナがそんなことを考えていたコンマ数秒の後、十五機のタイガー・ルナが一斉に銃弾が放たれた。命中とともに爆発する銃弾は、砲弾と言った方がいいのかもしれない。王宮の親衛隊からリメス・ジンの設計図の一部を入手していたルナは、事前に弱点を探し出していた。カク・サンカクが廃人同様になつてしまっており、確証的な弱点が見出せたとはいえなかったが、最終兵器『空雷砲』の仕様から類推することはできた。この兵器が一端発動するとリメス・ジンは、僅かではあるうが一時的にあらゆる機能が停止するはずであった。更に、『空雷砲』はリメス・ジンの真上には効力を発揮しないのだ。よつて、『空雷砲』発動後に真上から急降下攻撃し、撃破しようと言うのが今回の攻撃方法である。また、リメス・ジンの大きな機体がルナ隊に多様な攻撃方法をも提供した。リメス・ジン迎撃にあたって、ルナ隊の半分は爆撃用の爆弾も搭載していた。言うまでもなくそれは、機銃とは比較にならない打撃力を持つ。通常の航空機に爆弾攻撃は有り得ないが、上面面積がとつともなく広いリメス・ジンが相手ということ、そしてルナ隊の腕の良さが『爆撃』を可能にしていた。先行の機体

が機銃でリミス・ジンの上面に無数に配置された機銃座を無力化し、後続の機体が爆弾で止めを刺すわけである。

『空雷砲』発動後の一瞬の沈黙後、リミス・ジンの機銃座は上空から突進して来るルナ隊へ一斉に照準し始めた。しかし、遅かった。ルナ隊から放たれた砲弾は、雨となつてリミス・ジンにめり込み、炸裂した。一面から炎と煙を巻き上げる怪鳥に、激突ギリギリまでルナ隊の機体は銃撃を続け、怪鳥から僅か数メートルの距離をかすめて離脱した。そしてその時には、後続の機体の二機が爆弾を放ち、黒々とした爆弾は放たれた時の降下速度に重力による加速を加えながら落下していった。そして、一発が怪鳥の中心に命中したのだ。既に断末魔の悲鳴を上げていた怪鳥は、屋台骨をへし折られて空中で四散した。

「まず一匹！」

ルナが雄叫びを上げ、すかさず次の獲物に向けて編隊は上昇した。実のところ、この攻撃パターンは後二回、多くても三回が限度である。王は十機のリミス・ジンを伴って侵攻して来ているという。つまり、撃墜できるであろう三機か四機の中に、王が乗っていないければならないのだ。可能性は多くて四割。余りに危険ではないだろうか。離陸前に、ルナは隊員から当然のようにこの点について問い詰められた。

「王が座上している機体は、俺には分かるんだ。」

ルナの答えである。最早理屈ではなかったし、隊員も納得するしかなかった。王家の秘蹟を受けたルナには、きっと分かるのだろう、隊員達はそう思うことにした。ルナの作戦は勿論、それだけではない。最後の手段を残している。カク・サンカクが、ルナのタイガー・ルナにも『空雷砲』を仕込んでおいてくれたのだ。

「次の獲物はあそこだ！」

獣と化したルナが、血を求めて獲物に突進して行った。

「隊長！ さっきのが目的の機体だったのか？ それともこれか？」
僅かに残った不安を解消したいのか、隊員が問い掛ける。

「叩き落とせばいいのさ！ 着いて来い！」

「やってやるさ！」

隊員も興奮している。冷静な会話は成り立たない。

二機目のリメス・ジンは、『空雷砲』を発動させる愚を冒さなかった。上空にルナ隊を確認した時点で、機銃座に迎撃が指令された。相手はルナ隊のこと、このリメス・ジンの司令官とて全てを撃墜できるとは思っていなかったが、上空からの降下攻撃である以上、ルナ隊は銃撃後にリメス・ジンよりも低空に降下してしまう。その時点で『空雷砲』である。ルナ隊の全てが塵に帰すことだろう。いち早くそのことを悟ったルナは、配下の編隊に離脱を命じた。

「お前達は次の獲物を探せ！ こいつは俺が殺る！」
無数に打ち上げられる銃弾を縫ってルナ機が降下して行った。そして、ルナの『空雷砲』が発動した。ルナに向けて放たれた銃弾がルナ機に近い方から順番に粉碎されていき、あっという間に怪鳥に届いた。地上から怪鳥を見上げていた者がいたら、魔法か魔術と思っただけに違い無い。怪鳥の巨体は、瞬時に煙のように消えてしまったのだ。粉碎された破片は余りに小さく、地上に落下するのが目視できないためである。これがカク・サンカクの『空雷砲』なのだ。所詮タイガー・ルナでは、何発も放てるものではなかったし、威力もリメス・ジンとは比較にならない。しかし、指向性を持たされたそれは、目標を確実に捉える。

「これも違う！」

一人で叫びながらルナの血走った目は次の獲物を探していた。

ルナの抜けたルナ隊も、他のリメス・ジンを捉えて涎を垂らしている。

古来より、戦場の地獄絵図は多く残されている。ルナが今戦っている状況は、それらと比べても過去に例を見ない殲滅戦である。国王座上のリメス・ジンだけに親衛隊の護衛編隊が同行しているという事実は、なぜかルナの耳には届いていなかった。その情報が伝わ

つていれば、この戦いで失われる命は最小限に留められたはずだが、何処でその情報が途切れたのかは不明だ。混乱する中で止むを得ず途切れてしまったものなのか、あるいは誰かの思惑で敢えて留め置かれたものなのか。前者ならば、この戦いで散る命の多くは何の為に生まれ出たのだろうか？ それが運命と言うならば、余りにも無為に過ぎるというものではないか。後者ならば、その思惑はこういつた犠牲をして尚崇高なものだとも言うのだろうか？ 崇高であれば許されるというものでなからう。

この他にも、今回の戦いでは多くの犠牲が出ている。そしてそれが犠牲者を取り巻く環境の全てに対して与えた弊害と打撃は、とてつもなく大きい。いったいそれらは何のためなのだろうか？

ことの発端となった皇帝が巡らせた謀略は、元はと言えば国の安定と繁栄、そして民の幸福を願ったものだった。自らの権力欲を満たすことを重要視していたとは言え、それはパックス・ローマーナを実現するためなのであって、それを責めることができるだろうか。偽の王とて、そんな皇帝の意思と理想に感銘を受けていたのだ。結局、彼は皇帝を裏切ることになったが、彼の裏切りとて皇位の統一がもたらす平和を願ったものであることに違いはなかったのだ。世に平和をもたらず、それを成すのが自分でありたいという欲望は、人間であれば仕方の無いことではないだろうか。

各々が最善と信じたことが、衝突して行く。ルナの思いとて究極の目的は皇帝や偽の王と大差は無いのだ。帝国の版図から争いを無くしたい、それが平和と繁栄の第一歩であると考えていたのだ。違ふとすれば、彼は争いが呼ぶ悲劇を実際に現場で見に来たということと、そして彼には皇帝や偽の王のような欲が無いということか。しかし、西ケルト公爵が言ったように、それも横柄というものかもしれない。彼が見て来た悲劇は事実ではあるが、全てではない。為政者たるもの、大局的にモノを見なければならぬ。そしてより本質的には、人たるもの欲に突き動かされるものであり、全ての人々が

希望と欲望を持って生きているのだ。ルナには欲が無いと言っても、こんな人としての本質的事実を超越した者が、果たして庶民の王と成り得るのか。人の心を知らぬ者が人を治めて、本当に幸福は来るのだろうか。

今は亡き本当の王は秘蹟を放棄した。故に玉石が停止し、再び発動させるためにルナが呼び戻されたことから今回の悲劇が始まった。本当の王は、迷信じみた『王家の秘蹟』や血族の既得権、そしてそれらに纏わる諸々からは、真の平和は求められないと悟って秘蹟を放棄したのだ。そこから始めようとしていたのだ。彼にとっては、皇統すら守るべきものでは無かったのだろう。しかし、そんな意図は誰にも引き継がれることなく消え去ろうとしている。そんな彼の思いと期待に、ルナは気付くことができるのだろうか。

戦いは続き、無数の思いが血となって流れて行く。

<本編終了、エピソードに続く>

《終章》

吹き抜ける風は爽やかであった。王宮に咲き乱れる花々の香りさえするようでもある。陽の光も穏やかであり、そこは平穩そのものであった。閉ざされた一画から自由に出入りできないことを除いて、幽閉とは、地下牢にでも押し込まれるものと思っていた王子は、穏やかな表情で庭園を見下ろしていた。なぜ自分が幽閉されなければならぬのか、この先どうなってしまうのか、全く想像もできなかった。昨日、王宮内で炸裂した爆弾の衝撃はここにも届いていたが、脱出を言いに来る者は誰もいないし、父親である王は会いに来てくれない。

自分が何をしたと言うのだろうか？ 噂では、王国は大陸の北方において致命的な敗北を期したとも言う。そして究極の最終兵器も、無敵の前評判も空しく破壊されたと聞いた。これらに自分が関係していると思われるのか？ そんな馬鹿な。

しかし、囚われの身の耳に届く噂は、もたらされる食事程の鮮度もなく、信憑性は皆無といい。そんな情報からは何事も推し量ることとはできなかつた。

そんな王子を見ている初老の男がいた。王子の教育係であり、ルナの時代から『老師』と呼ばれている男である。孫のような王子とその取り巻きを、彼は彼なりの最大の情熱を以って教育して来たつもりである。そんな彼にとって、王子捕囚の知らせは悪夢以外の何物でもなかつた。だからと言って、何ができるだろうか？ 一介の役人でしかない彼には、見ていることしかできないのだ。いつも一緒にいた仲間達とも引き離され、王子は本当の意味での孤独を始めて味わっていることだろう。少年にとって、恐らくそれは耐え難い苦

痛であるか、近々そうなるはずだ。

脱出できないものだろうか。過去に、幾人の英雄が囚われの身から脱したか。その脱出劇までもが英雄足る所以なのだろうか。王子にそれが可能だろうか。彼の仲間は助けに来ないか。奇跡が訪れてくれはしまいか。

彼は、王子の仲間の数人が既にこの世の人でなくなってしまったことを知らない。王子奪還が計画された上に実行され、既に失敗に終わったこと、彼はそれを知らなかったのだが、誰よりも彼等の幼さと至らなさを知っているだけに、もしも救出に来ようものなら、その命を賭けることになるということまでを見抜いていた。故に、少年達にはそんなことをしないで欲しいという気持ち先立っており、だからこそ偶発的な奇跡を期待してしまいもするのだ。そんな複雑な心境にも関わらず、初老の男は何故か樂觀的な気分でもあった。理由は定かではないが、あの不躰な男が再びドアを開け、王子を解き放ってくれるような気がしてならないのだ。

ルナの行方は杳として知れないと聞く。王国の将来も極めて危うい状況であるし、その原因はルナにあるとの噂は絶えない。あろうことが、王子がここから脱出してルナに合流した、との噂まである。また、リメス・ジンとか言う最終兵器を撃破したのがルナだと言う者いる。軍がクーデターを起こしたと真しやかに語る輩もいるが、それさえもルナとの関係が疑われている。全てがルナに面白可笑しく結び付けられた情報は、どれも噂の域を出ないと考えるべきだ。そもそも、ルナの生死すら誰も確認できてはいまい。ところが彼も、現状はルナが打破してくれる、といった確信めいた思いを払拭できずにいて、噂を流している連中と大きくは変わらない。

くしくも、一人で物思いにふける王子も同じことを考えていた。ルナが現れて自分の窮地を救ってくれるはずだと。

多くの臣民と同様であった。周到に仕組まれ、そして大部分が事実の上に構築されたルナの悪評は、一部の者へ悪評を仕組んだ者達へ以外には受け入れられなかったようだ。

初老の男は、次回の講義を準備することで気持ちを落ち着けることにした。次回は、オリエント遠征を終えて、カエサルがローマに帰還するところからフィルムが始まる。ローマ帝国は危機を脱し、それから数百年に及ぶ繁栄と安定を謳歌するのだ。後年、『パックス・ローマーナ』と呼ばれる時代の始まりであり、二千年の時を越え、現在の概ねの枠組みが完成した時代だ。

歴史に『もし』は無いという。だがしかし、もし、カエサルなければ、どんな世界と歴史が作り出されたのだろうか？ ブルータスがカエサルの暗殺を成し遂げていたら……、そんな他愛も無い想像にふけりながら、初老の男は淡々と講義の準備を進めるのだった。

< 終わり >

ルナの航跡 35 (後書き)

ここまで完読された方がおられましたら、心から御礼申し上げます。ありがとうございます。

始めて長編に挑戦した物語でして、真面目に懸命に書きました。面白さが付いて来ないのは何とも悔しいやら齒痒いやらですが、熱意だけでも伝われば満足です。

貴重なお時間を費やして頂き、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8255b/>

王家の帰還

2010年10月9日13時57分発行